

インドネシア 言語と文化

Bahasa dan Budaya:

Jurnal Himpunan Peneliti Indonesia Seluruh Jepang
＜第 26 号＞

日本インドネシア学会

Himpunan Peneliti Indonesia Seluruh Jepang

2020 年

インドネシア 言語と文化
Bahasa dan Budaya: Jurnal Himpunan Peneliti Indonesia Seluruh Jepang

第 26 号 (2020 年)

目次

【日本インドネシア学会創立 50 周年】

日本インドネシア学会創立 50 周年記念座談会	1
日本インドネシア学会 50 年のあゆみ	3

【講演】

Strategi Optimalisasi Pengembangan dan Pembinaan Bahasa Indonesia, Pelindungan Bahasa Daerah, dan Penguasaan Bahasa Asing (インドネシア語の発展育成、地方語の保護、外国語修得の最適化戦略)	
Dadang Sunendar (ダダン・スネンダル)	23

【研究発表】

転写された聖者廟空間ーインドネシア・バリ島におけるイスラム聖者廟ワリピトゥー (WALI PITU, the Transcribed Shrine-Space: Pilgrimage to Islamic saint graves in Bali, Indonesia.)	
東海林恵子 (SHOJI Keiko)	29
古ジャワ文学における『ガトートカチャーシュラヤ・カカウイン (Ghaṭotkacāśraya Kakawin)』に関する一考察 (Suatu Pengkajian mengenai Kakawin Ghaṭotkacāśraya dalam Sastra Jawa Kuno)	
上石景子 (KAMIISHI Keiko)	43
インドネシア語における非意図性を表す「接頭辞 ter-+自動詞」 (“Prefix ter- + Intransitive Verb” Denoting Accidental in Indonesian)	
佐近 優太 (SAKON Yuta)	57
インドネシア語会話における gitu の談話的機能 (Fungsi Penggunaan ‘Gitu’ dalam Percakapan Bahasa Indonesia)	
藤崎拓海 (FUJISAKI Takumi)	75
Sebuah Tinjauan atas Singkatan, Akronim, dan Politik (略語、頭字語と政治についての一分析)	
Edy Priyono (エディ・プリヨノ)	91

インドネシア語応用教材に関する共同研究からの報告

(Laporan dari Penelitian mengenai Bahan Pengajaran Bahasa Indonesia Terapan)

降幡正志、原真由子、森山幹弘

(FURIHATA Masashi, HARA Mayuko and MORIYAMA Mikihiro) 105

日本インドネシア学会会則 115

編集後記 117

日本インドネシア学会創立 50 周年記念座談会

2019 年 11 月 9、10 日、大阪大学豊中キャンパスで日本インドネシア学会第 50 回創立記念大会が開催された。学会創立 50 年目を迎えることが出来たのは驚異的なことである。つまり、本学会は日本・インドネシア国交樹立の 11 年後には創立されたということである。この記念すべき学会創立 50 周年記念大会に「学会創立 50 周年記念座談会 ～50 年を振り返って～」を企画し、創立当時のことを詳しくご存じの佐々木重次先生（東京外国語大学名誉教授）、クトゥット・スディアルタ先生（天理大学名誉教授）をお迎えし座談会を行った。司会進行は舟田京子である。非常に興味深かった佐々木、スディアルタ両先生のお話は下記の通りである。大きく、「学会創立の経緯」「研究大会」「学会誌」「会長」にまとめることができる。なお、執筆に際し、事実確認のために、他の先生方のコメントやお持ちの資料も参考にしている。

1. 学会創立の経緯

1969 年の学会創立以前はインドネシア語を教授している大学の横のつながりはなく、どこの大学でインドネシア語を教えているのか、また他大学ではどのようなインドネシア語教育を行っているのか全く情報がなかった。そんな中、天理大学の倉田勇先生が関東と関西の大学のつなぎ役となり、関東圏では東京外国語大学、拓殖大学、関西圏では大阪外国語大学、天理大学が参加し、初めての集いが天理大学で開かれた。これが創立の総会となり、現在の日本インドネシア学会の第 1 回目大会となった。その時点では名称は「インドネシア学会」であり、1974 年まで続き、1975 年から「日本インドネシア学会」と名称が変更され、現在に至っている。

2. 研究大会

当初、研究大会は 1 泊旅行で行われていた。旅館・ホテルが会場となり、そこで研究発表を行い、夜には懇親会が開かれ、深夜まで部屋の中でインドネシア語教育などについて議論が交わされた。当時の研究大会は大学同士の横のつながりに重きを置き、懇親会での話し合いにより情報交換が行われた。当番校が会場を決め、九州、四国、沖縄まで足を運んでいた。このような形式は 2006 年までで、2007 年第 38 回大会（南山大学）からは現在のように大学を会場として行われている。

3. 学会誌

研究発表の内容は、各発表者が要旨を 3 ページ程度にまとめて、「日本インドネシア学会研究報告要旨」として出版された。当時は紙媒体であり、全会員に 5 部ずつ、発表者には 30 部配布された。このような「要旨」では業績になりにくいとの意見が出され、学会誌『インドネシア 言語と文化』になったのは 1995 年からである。

4. 会長

通常は学会創立と同時に会長が決定されるものだが、本学会は会長無しで 1997 年まで運営されていた。1998 年の第 29 回大会が沖縄県の名桜大学で開催される際に手続き上会長が必要となり、佐々木重次先生が初代会長となった。佐々木先生が 1998 年から 2007 年まで 3 期を、左藤正範先生が 2007 年から 2013 年までの 2 期を、そして舟田京子が 2013 年から 2019 年までの 3 期を務め、

2019 年から降幡正志先生が第 4 代会長を務めている。

座談会から、日本インドネシア学会は上記のような過程を経て現在に至っていることがわかる。

また、研究大会では外部の方に講演をしていただくこともあった。特別講演で Ayu Utami 氏（第 30 回）、David Hill 氏（第 41 回）、招待講演で当時の Badan Pengembangan dan Pembinaan Bahasa 所長の Mahsun 氏（第 45 回）、Dadang Sunendar 氏（第 48 回、49 回）、同じく Badan Pengembangan dan Pembinaan Bahasa の Bidang Pengembangan 部長の Dora Amalia 氏、その他 Dendy Sugono 氏、Widodo 氏が登壇してくださっている。

会員数は 80 名前後とこじんまりしているが、日本で唯一の、国内でインドネシア語教育を行っている教授陣が揃い、インドネシアで国語（インドネシア語）政策の最高峰である Badan Bahasa と密な関係を持つ学会である。

50 年間学会を育ててくださった先人に感謝すると同時に、今は 75 年、100 年と継続し、日本におけるインドネシアの言語、文化教育の中心的存在となり続けることを期待したい。

日本インドネシア学会 50 年のあゆみ

研究大会

(1969～1974 年は、前身である「インドネシア学会」の研究大会である。)

第 1 回大会 [1969 年 12 月 天理大学]

研究発表なし

第 2 回大会 (1970 年 12 月 天理大学)

1. 佐藤栄三郎 「インドネシア学会発足にあたって」
2. Anas Ma'ruf “Kesusastraan Indonesia Sesudah Perang”
3. 伊東定典 「バンテンと VOC」
4. 森村 蕃 「Salah Pilih に於ける adat をめぐる抗争の問題」
5. 佐々木重次 「hendak (mau, ingin)+活用形をめぐって」
6. 柄屋征士 「インドネシアでの日本語教育」
7. K.S.スディアルタ 「インドネシア語文法概説<接頭辞 me, ber と基本文型>」

第 3 回 [1971 年 12 月 4 日 (土) 京都産業大学]

1. Anas Ma'ruf “Pembabakan Sedjarah Sastra Modern Indonesia”
2. 伊東定典 「バタック部族回教・キリスト教伝来小史」
3. 倉田 勇 「血縁原理補足の実態について<スマトラ・ミナンカバウ社会事例考察>」
4. 崎山 理 「インドネシア語の二種の『二重主語文』」
5. 渋谷元則 「Itinerario における接続詞 ende について」

第 4 回 [1972 年 11 月 25 日 (土) 拓殖大学]

1. 佐藤栄三郎 「インドネシア語文字改革に関する一私見」
2. K・S・スディアルタ 「接頭辞 di について」
3. 倉田 勇 「インドネシアの相続慣行
<レジャン社会とバタック社会の場合>」
4. 森村 蕃 「インドネシア語・マレー語にみるアラビア語受動分詞からの借用語のいくつかの特徴」
5. 松岡邦夫 「インドネシア語の語順について」

第 5 回 [1974 年 11 月 5 日 (月)・6 日 (火) 賢島]

1. 正保 勇 「副詞節を作る名詞起源の接続詞」
2. 倉田 勇 「慣習の意味」
3. 佐々木重次 「助動詞論に見る能動論者と受動論」
4. 崎山 理 「比較言語学的に見たインドネシア語の “twee wijzers”」
5. Muskarna Sastranegara “Sejarah Ejaan Bahasa Indonesia”

第6回〔1975年11月 舞子〕

1. 倉田 勇 「バリ島バトール湖周辺の方位観」
2. 佐々木重次 「BER-動詞について」
3. 正保 勇 「インドネシア語の分裂文」
4. Ito Seki “Beberapa Soal Mengenai Kalimat-Kalimat Kata Kerja Transitif Dalam Bahasa Indonesia”
5. 宮坂正昭 「スーフィー文学の役割——東南アジアにおける初期のイスラーム化（パサイーマラッカ・ジャワ北部沿岸）と関連して——」

第7回〔1976年11月9日（火） 三重県志摩「洋望館」〕

1. 佐々木重次 「BER- と KE-AN の説明に用いた円について」
2. 左藤正範 「インドネシア語の出発点について」
3. K・S・スディアルタ 「接尾辞 LAH について」
4. 関 伊統 「インドネシア語文の一特性（ini, itu, nya の用例から）」
5. 正保 勇 「インドネシア語の複合名詞句に関する一考察」
6. Toerseno A.S. “Peresapan Bahasa Jawa ke dalam Bahasa Nasional”
7. Toerseno A.S. “Kumpulan Kata-Kata Bahasa Indonesia yang mengutamakan Kata Pinjaman dari Bahasa Jawa”

第8回〔1977年12月8日（木）・9日（金） 京都市嵐山「嵐狭館」〕

1. 佐々木重次 「人称代名詞の体系の吟味」
2. 森村 蕃 「khattulistiwa という語について」
3. M.Z. Asry “Mengenai Hubungan Ekonomi, Kebudayaan & Pendidikan Indonesia-Jepang Dewasa Ini”
4. 倉田 勇 「事例からみた共同飲食の意義について」
5. 相馬幸雄 「インドネシアに於ける稲作神話に関する一考察」
6. 伊東定典 「蘭印農地法とジャワ農民一揆」
7. Anas Ma'ruf “Sekedar Perbandingan Kalimat Tanya Indonesia dengan Kalimat Tanya Jepang”
8. 正保 勇 「pun と juga に関する一考察」
9. 佐藤栄三郎 「インドネシア語とアラビア語の語の構成に関する比較について」
10. 粕谷俊樹 「日本文学のインドネシア語翻訳に於ける諸問題」
11. 関 伊統 「インドネシア語の情感表現」

第9回〔1978年12月10日（日）・11日（月） 静岡県熱海「ふじやホテル」〕

1. 佐々木重次 「インドネシア語のカナ表記」
2. 崎山 理 「『二重主語文』その後（日伊対照言語学から）」
3. 正保 勇 「インドネシア語における上昇変形」
4. 左藤正範 「日本軍政の言語政策——ジャワ島の学校教育を中心として——」
5. 伊東定典 「ジャワ・スーフィズムの系譜（19世紀まで）」

6. Toerseno A.S. “Kedudukan Bahasa Daerah Sebagai Sakaguru Kebudayaan Tradisional”
7. 関 伊統 「日本語<は>・<が>とインドネシア語」

第10回〔1979年11月5日（月）・6日（火） 三重県志摩「洋望館」〕

1. 松岡邦夫 「インドネシア語母音の発音について」
2. 富尾武弘 「インドネシアの社会構造について」
3. Anas Ma'ruf “ENKLITIK ‘NYA’ yang banyak menolong tetapi terkadang dianggap serakah”
4. 倉田 勇 「出稼ぎと教育」
5. 佐々木重次 「Sonia membantah bahwa ——『ト』と『ヲ』——」
6. 正保 勇 「インドネシア語に於ける主題化と移動変形」
7. 左藤正範 「インドネシア語委員会について」
8. Ajip Rosidi “Mengenang Almarhum Anas Ma'ruf”
9. 崎山 理 “Tense and Aspect in Indonesian”

第11回〔1980年11月14日（金）・15日（土） 三重県志摩「洋望館」〕

1. 伊東定典 「Dewan Gereja-Gereja di Indonesia インドネシア教会協議会」
2. 柄屋征士 「インドネシア語の格について」
3. 正保 勇 「インドネシア語の代名詞と補文主語の解釈規則」
4. 佐々木重次 「Topic/Comment 系の分析の問題点」
5. 柄屋征士 「インドネシア語の格について」
6. 粕谷俊樹 「『雪国』の翻訳について」
7. 富尾武弘 “Indonesian Trade and Society: Essays and Economic History by J.C. van Leur”

第12回〔1981年11月24日（火）・25日（水） 大阪市天王寺「なにわ会館」〕

1. 倉田 勇 「不連続な時について<インドネシアの事例から>」
2. 佐々木重次 「『主格補足語』について」
3. Ajip Rosidi “Kedaerahan dalam Keindonesiaan”
4. 富尾武弘 「狼牙須国(Langkasuka)について」
5. 左藤正範 「日本軍政の教育政策——インドネシアの『海軍地域』の例——」
6. 正保 勇 「インドネシア語の Identity-Deletion」
7. 山口真佐夫 「インドネシア語の数詞について——tiga, tujuh, 減数法——」
8. 藤田泰伸 「ルピア切下げとインドネシア経済」
9. 関 伊統 「Sejarah Melayu の me-型, ϕ 型, di-型」
10. 宇坪直子 「ジャワの養魚について」

第13回〔1982年11月2日（木）・3日（金） 岐阜県岐阜市「ホテルパークみなと館」〕

1. 藤田泰伸 「エコノミー・パンチャシラ論争をめぐって」
2. 佐久間徹 「神話伝承に現われる『植物のしおれ』モチーフについて」
3. 倉田 勇 「東スンバ社会の通過儀礼についての若干の考察」
4. Soedi R. Hasan “Sekilas tentang Bahasa Mandar: Salah satu bahasa daerah di Sulawesi Selatan”

5. 正保 勇 「インドネシア語の一照応現象について」
6. 佐々木重次 「MEMPER- について」
7. 富尾武弘 「〔書評〕土屋健治著『インドネシア民族主義研究』」
8. 左藤正範 「日本軍政の言語・教育政策
——ジャワの“Kan Po”（官報）を手がかりとして——」

第14回〔1983年10月24日（月）・25日（火） 仙台〕

1. 正保 勇 「itu と -nya に関する一考察」
2. 佐々木重次 「PASSIVE USED WHEN---
3. 富尾武弘 「デサの基本的認識——王国世界と人民世界の接点を求めて——」
4. 佐久間徹 「植物と人間——南スラウェシにおける事例——」

第15回〔1984年11月6日（火）・7日（水） 徳島県徳島市「野上屋」〕

1. 左藤正範 「スマトラにおける日本軍政の言語・教育政策」
2. 正保 勇 「倒置構文に関する一考察」
3. Toerseno A.S. “Sekilas Tentang Peresapan Bahasa Daerah Dan Bahasa Asing Dalam Kaitannya Dengan Sumpah Pemuda”
4. Wing Karjo “Eksistensialisme di Indonesia”
5. Ajip Rosidi “Mencari Jejak H. Hasan Mustapa”
6. 佐々木重次 「Gonda 論文 “Reflections on the Indo-European medium”を読んで」
7. 倉田 勇 「世襲財(Harto Pusako)について
——Franz von Benda-Beckmann の所説に学びつつ——」
8. 松野明久 「願望の untuk——untuk＋動詞について」

第16回〔1985年11月6日（水）・7日（木） 城崎〕

1. 正保 勇 「インドネシア語の受動構文と能格構文」
2. 佐々木重次 「TER- 動詞の＜能動的＞構文について」
3. 藤田泰伸 「インドネシアの演劇——発展と上演形態を中心として——」
4. 左藤正範 「インドネシアの刊行物にみる日本語」
5. 倉田 勇 「パナス・ディギン論」
6. 富尾武弘 「マタラム朝マングブミの治世」
7. 中嶋鴻毅 「インドネシア語母音の音響音声学的考察」

第17回〔1986年11月10日（月）・11日（火） 三重県志摩「洋望館」〕

1. 倉田 勇 「スンバの通過儀礼（その二）——葬式」
2. 山口真佐夫 「南スラウェシの言語——Massenrempulu 諸語の位置づけ——」
3. 正保 勇 「追加付加詞と追加接合詞に関する一考察」
4. 富尾武弘 「インドネシアの仏教——その連続性を求めて」
5. 石井和子 「『聖大乘論』（サン・ヒアン・カマハーヤーニカン）におけるジャワ密教の成就法と神学」

6. 佐々木重次 「『したい』か『されたい』か——その後——」
7. 藤田泰伸 「ハッタの協同組合思想」
8. Ajip Rosidi “Manifes Kebudayaan & K.K.P.I.”

第 18 回〔1987 年 11 月 12 日（木）・13 日（金） 石川県金沢市〕

1. 富尾武弘 「訶陵国の中国遣使年代について」
2. 佐々木重次 「akan について」
3. 正保 勇 「untuk 構文の PRO の解釈」
4. 石井和子 「古ジャワ『サン・ヒアン・カマハーヤーナン・マントラナヤ（聖真言道大乘）』」
5. Ajip Rosidi “Nuguroho Notosusanto dan “Angkatan Terbaru” Sasterawan Indonesia”
6. 山口真佐夫 「ブギス語 Sawitto/Pinrang 方言について」
7. 藤田泰伸 「ハッタとスカルノの経済思想比較」
8. Wing Kardjo “Penerjemahan Puisi dengan Masalah-Masalahnya”

第 19 回〔1988 年 11 月 25 日（金）・26 日（土） 三重県賢島〕

1. 左藤正範 「日本軍政に関するインドネシアの百科事典の記述」
2. 富尾武弘 「Mataram 王朝初期」
3. 倉田 勇 「スンバ人の死と再生観」
4. 山本春樹 「バタック族の宿命観について」
5. 松野明久 「情報といわゆる受動」
6. 正保 勇 「EXE を主語にとる構文とその特徴」
7. 粕谷俊樹 「『語彙』から見たマレーシア語とインドネシア語」
8. 松浦健二 「日本語-インドネシア語表現上の比較
——擬声語・擬音語・擬態語について——」
9. 佐々木重次 「第 5 回インドネシア語会議に出席して」
10. Ajip Rosidi “Situasi Sastra dan Penerbitan Bahasa Sunda”

第 20 回〔1989 年 11 月 21 日（火）・22 日（水） 香川県高松市〕

1. 山口真佐夫 「南スラウェシの諸言語の西と東」
2. 正保 勇 「インドネシア語の指示現象に関する一考察」
3. 佐々木重次 「me- 形といわゆる受動形をどう使いわけなのか」
4. 藤田泰伸 「インドネシアの協同組合思想」
5. 富尾武弘 「ガルー王国について」
6. 倉田勇 「織布の霊的属性について——Minangkabau 社会の父方親族の場合——」
7. 左藤正範 「インドネシアの辞書に見られる日本語の語彙」
8. Wing Kardjo “Jalan sempit ke kedalaman utara”
9. 松野明久 「bukan と tidak——不定辞の用法——」

第 21 回〔1990 年 11 月 6 日（火）・7 日（水） 長野県松本市〕

1. 左藤正範 「インドネシアの辞書に見られる日本語語源の見出し語とその派生語について」
2. 富尾武弘 「ガルー王国考補遺——婆露伽斯考——」
3. M. Soeratno “Kalimat Baku Bahasa Indonesia”
4. 粕谷俊樹 「語彙から見たマレーシア語とインドネシア語（その二）」
5. 倉田 勇 「Minangkabau 社会の階層性について」
6. 石井和子 「ボロブドゥールと『初会金剛頂経』」
7. 小野澤純 「マレーシア語からみたマレーシア語とインドネシア語の語彙の比較」
8. 正保 勇 「マレーシア語の受動構文」
9. 福島弘恵 「スジャラ・ムラユの船の種類に関する語彙」
10. 藤田泰伸 「インドネシアの協同組合政策」
11. 浦野崇央 「インドネシアの社会」

第 22 回〔1991 年 11 月 7 日（木）・8 日（金） 神奈川県湯河原〕

1. 倉田 勇 「共通コード時間と地域の時間——インドネシアの事例から——」
2. 富尾武弘 「宋代における三仏制中国見識六」
3. 左藤正範 「インドネシアのテキストに出ている日本語語源の語彙について」
4. 山口真佐夫 「インドネシア語マカサル方言」
5. 高殿良博 「インドネシアにおける二言語併用教育」
6. 舟田京子 「Bahasa Prokem」
7. 正保 勇 「倒置文について」

第 23 回〔1992 年 11 月 12 日（木）・13 日（金） 三重県賢島〕

1. 正保 勇 「マレーシア語の変項」
2. Tooru Nomura Pengetahuan Bahasa Melayu Terhadap Orang Jepun Dalam Zaman Edo.
3. 左藤正範 「インドネシアの教科書におけるロームシャの意味について」
4. 佐藤弘幸 「『マックス・ハーフェラー』の邦訳をめぐって」
5. 浦野崇央 「Pop Indonesia にみる愛の型」
6. Wing Kardjo “Puitik Sitor Situmorang: Antara Keasingan Dan Keterlibatan”
7. 富尾武弘 「10～11 世紀のスリウィジャヤ」
8. 藤田泰伸 「西部ジャワにおける KUD の社会的意義」
9. 倉田 勇 「東インドネシアの家と霊」
10. K・S・スディアルタ 「Keratabasa」

第 24 回〔1993 年 11 月 29 日（月）・30 日（火） 三重県鳥羽〕

<シンポジウム> 「日本におけるインドネシア語／マレーシア語教育の諸問題」

全体的基調報告（スディアルタ）

第 1 セッション 「発話・聴き取り教育について」

報告（舟田京子）；コメント（梶屋征士）；司会（粕谷俊樹）

- 第2セッション 「教材について」
報告（左藤正範）；コメント（正保 勇）；司会（森村 蕃）
- 第3セッション 「購読・作文教育について」
報告（石井和子）；コメント（相馬幸雄）；司会（小野沢純）
- 第4セッション 「文法教育について」
報告（松野明久）；コメント（山口真佐夫）；司会（佐々木重次）

<自由研究発表>

1. 福島弘恵 「アラビア語からの借用語
——インドネシア語とマレーシア語との相違——」
2. 左藤正範 「インドネシアの小学校の教科書における日本語起源の語彙について」
3. 富尾武弘 「5世紀を中心としたインドネシアの状況」

第25回〔1994年11月12日（土）・13日（日） 兵庫県有馬〕

<自由研究発表>

1. 福島弘恵 「インドネシア語に入った：ター・マルブータ」
2. 降幡正志 「スンダ語の後置詞 mah 及び teh」
3. 佐藤宏文 「マレーシアの言語政策」
4. 野村 亨 「シンガポールにおける地名の起源」
5. 藤田泰伸 「KUD とインドネシアの農村」
6. 山口真佐夫 「インドネシア語ウジュン・パンダン方言について」
7. 浦野崇央 「日本人の描くインドネシア——戦後期滞在記からの考察——」
8. 左藤正範 「インドネシア語の辞書における日本語起源の語彙について」
9. 安田和彦 「インドネシア語と日本語教育からみた『インドネシア語の受動態』」
10. 正保 勇 「受動文と主題—題述文」

<シンポジウム> 「インドネシア語の受動態に関するシンポジウム」

- 発表1 森村 蕃 「インドネシア語の受動態形式に関する一考察」
- 発表2 佐々木重次 「能動論者として」
- 発表3 松岡邦夫 「インドネシア語の従来の受動態とその問題点」

第26回〔1995年12月9日（土）・10日（日） 京都市嵯峨「京都コミュニティさかの」〕

1. Yoshihiro Takadono
“Penelitian Kontrasif Tentang Formula Ungkapan Salam Dalam Kebudayaan Indonesia Dan Kebudayaan Jepang: Difokuskan Pada Perilaku Salam Di Kalangan Mahasiswa”
2. 浦野崇央 「インドネシアにおける外国語使用に対する政府規制とその反応」
3. 安田和彦 「インドネシア語の主語について」
4. 川地智子 「インドネシア語の無接頭辞動詞文の統語構造について」
5. 福島弘恵 「インドネシア語におけるアラビア語源の借用語の接辞について」
6. 山口真佐夫 「南スラウェシのマムジュ語における系統研究試論」
7. Uga Perceka “Pandangan Orang Jepang Terhadap Orang, Negeri Dan Bahasa Indonesia (I)”
8. 富尾武弘 「インドネシアの交易品」

9. 正保 勇 「二種類の連体修飾構造」
10. 中嶋鴻毅 「インドネシア語ウジュンパンダン方言の母音の音響的分析」
11. 野村 亨 「シンガポールにおける都市交通の発達について」
12. 山口玲子 「インドネシア国立ハサヌディン大学大学院修士課程について
——インドネシア語専攻科の場合——」（報告）

第 27 回〔1996 年 11 月 30 日（土）・12 月 1 日（日） 長野県松本市〕

1. 山口真佐夫 「南スラウェシ語群の言語における接頭辞 (m)VN- と(m)VK-」
2. 安田和彦 「インドネシア語における時の接続詞に導かれた従属節中の主語の省略」
3. 高殿良博 「あいさつにおける非言語行動の日本とインドネシアの比較」
4. 降幡正志 「スンダ語の/ɾ/と/ə/に関する音響音声学的研究」
5. 倉田 勇 「インドネシアのイエ研究の可能性——ミナンカバウ社会の場合——」
6. 左藤正範 「マレー語の辞書における日本語起源の語彙について」
7. 正保 勇 「マレーシア語の動詞句の補文」
8. 佐々木重次 「インドネシア語教育と電子メディアの利用」

第 28 回〔1997 年 11 月 8 日（土）・9 日（日） 静岡県伊豆「ホテルカターラ福島屋」〕

1. Anwar Ridhwan “Protagonis Pradata: Teori Tempatan, Behaviorisme Dan Islam”
2. Imran T. Abdullah “Sistem Bunyi Dalam Bahasa Aceh”
3. 降幡正志 「スンダ語の母音/ɾ/と/ə/の解釈」
4. Sheddy Nagara Tjandra 「インドネシア語のテンスとアスペクトの問題」
5. 安田和彦 「続・インドネシア語における時の接続詞に導かれた従属節中の主語の省略」
6. 左藤正範 「インドネシアの中学校の歴史教科書における日本語起源の語彙について——1984～93 年と 1994～97 年の二期間における比較——」
7. 福島弘恵 「ヒカヤット・ハン・トゥアのアラビア語」
8. Edy Priyono “Tinjauan Iklan di Radio Indonesia dan Jepang: Difokuskan pada Aspek Sosial Budaya”
9. 富尾武弘 「ボロブドゥール寺院について——マンダラからストゥーパへ——」
10. 浦野崇央 「戦前期滞在記にみるインドネシア・イメージ」
11. 正保 勇 「マレーシア語におけるピボット動詞」
12. 倉田 勇 「バドイ人の色彩感覚（予備的考察）」

第 29 回〔1998 年 12 月 11 日（金）～13 日（日） 沖縄県〕

1. 勝西紀之 「sini/situ/sana の前方照応機能」
2. Edy Priyono= “Tinjauan Kalimat Iklan Produk Jepang di Media Cetak Indonesia: Dengan Fokus pada Tinjauan Diksi”
3. Yoshihiro Takadono “Penggunaan Permintaan Maaf dalam Bahasa Jepang dan Bahasa Indonesia: Suatu Perbandingan”

4. Sheddy Nagara Tjandra “Teori Penerjemahan Ekuivalen—Pragmatis untuk Bahasa Jepang-Indonesia”
5. Eugenius Sadtono “Tantangan Pengajaran Bahasa Indonesia sebagai Bahasa Asing, Khususnya di Indonesia”
6. 野村 亨 「蘭領東インド東ジャワ地域における軽便鉄道の発達——OJS を中心として——」
7. Imran T. Abdullah “Pemakaian Kata Ganti Orang dalam Bahasa Aceh dalam Hubungannya dengan Bahasa Indonesia”
8. Stephanus Djawanai “The Classifier System of Ngandha Language: an ethnolinguistic perspective”
9. 佐々木重次 「Sanggar Bahasa Indonesia について」
10. Anwar Ridhwan “MABBIM: Penubahan, Objektif dan Perkembangan”
11. 石井和子 「パンチャシラの第一原則『唯一なる神性』について」
12. 降幡正志 「スンダ語の鼻音化現象について」
13. 関 昌也 「インドネシア語の自然態」(報告)
14. 富尾武弘 「インドネシア・イスラム化問題と鄭和の大遠征」(報告)

第 30 回 [1999 年 11 月 12 日 (金) ~14 日(日) 東京外国語大学]

1. Eugenius Sadtono “Adat Perkawinan Jawa”
2. 倉田 勇 「出自・居住・墓地」
3. Edy Priyono “Tinjauan tentang Singkatan dan Akronim Pelesetan dalam Bahasa Indonesia”
4. 富尾武弘 「スマトラ (蘇門答刺) なる呼称について」
5. 原真由子 「インドネシアにおける『地方語』教育の現状——バリの事例——」
6. 小野澤純 「『アブドゥラ航海記』再考」
7. 関 昌也 「文表現にみるインドネシア語の自然態」
8. 大形里美 「インドネシアにおけるイスラーム的フェミニズムの動向」

<第 30 回大会記念特別講演>

Ayu Utami “Problem Modernitas dalam Sastra dan Masyarakat Indonesia”

第 31 回 [2000 年 10 月 14 日 (土)・15 日 (日) 愛知県蒲郡市]

1. I Made Markus “Pengajaran Bahasa Daerah di Daerahnya: Khususnya Bahasa Bali”
2. Eugenius Sadtono “Bahasa Indonesia Tidak Pernah Murni: Studi kecil tentang pengaruh bahasa Inggris dalam bahasa Indonesia”
3. 山口真佐夫 「アラッレ・タブラハン(Aralle-Tabulahan)語の系統」
4. Abdul Muthalib “Beberapa Catatan Mengenai Bahasa Aralle-Tabulahan dan Pitu Ulunna Salu di Sulawesi Selatan”
5. 中嶋鴻毅 「インドネシア南スラウェシ地域諸言語の音声データベースの構築と母音の音響分析 (アラッレ語、マンビ語、パンネイ語について)」
6. Mohammad Syakir “Sumbangan Pers dalam Pengembangan Sastra Indonesia”

7. Yoshihiro Takadono “Cerminan Penyingkapan Diri dalam Bahasa Jepang dan Bahasa Indonesia: Per-bandingsan di Kalangan Mahasiswa”
8. 福島弘恵 「スジャラ・ムラユ——Tun Ali Hati の死からの伝本——」
9. Edy Priyono “Tinjauan tentang Singkatan dalam Iklan di Surat Kabar: Khususnya Iklan Mini”
10. 富尾武弘 「ジャワへの元寇について——丹羽友三郎氏の研究を中心に——」
11. 安田和彦 「インドネシア語のゼロ代名詞の用法について」
12. 勝西紀之 「インドネシア語におけるアスペクト」
13. 関 昌也 「インドネシア語の自動詞にみる『する』と『なる』」
14. Ajip Rosidi “Ensiklopedi Sunda”

第 32 回〔2001 年 11 月 9 日（金）～11 日（日） 大分県別府市〕

1. 舟田京子 「インドネシアにおける独立後の言語状況と MBIM
——綴りを中心に——」
2. Edy Priyono “Tinjauan tentang Eufemisme, Sensasionalisme, dan Vulgarisme di Media Cetak”
3. 倉田 勇 「Mentawai 社会の Punen について」
4. 中嶋鴻毅 「インドネシア南スラウェシ地域諸言語の音声データベースの構築と母音の音響分析(II)（ピトゥ・ウルンナ・サル語マタンガ方言、バンバン方言およびアラッレ・タブラハン語タブラハン方言について）」
5. 山口真佐夫 「南スラウェシ州マムジュ県のカイリ・パモナ語群の少数言語——トボイヨ語、バラス 語、サルドゥ語の系統——」
6. 森村 蕃 「アラビア語動詞第二形の動名詞を作る接頭辞 ? ta の要素」
7. 左藤正範 「Kamus Besar III に見られる日本語起源の語彙について」
8. 福島弘恵 「ジャカルタ方言」
9. 平林輝雄 「メナド在住華人のコード選択」
10. 安田和彦 「インドネシア語代用表現」
11. 磯浦美恵子 「パダンにおける日本語教育」（報告）
12. 富尾武弘 「バリ・ジョクジャカルタ調査報告(2001 年 8 月)」(報告)

第 33 回〔2002 年 11 月 8 日（金）・9 日（土） 静岡県熱海市〕

1. 倉田 勇 「Minangkabau 社会変容の一側面～特に親族関係について～」
2. 関 昌也 「インドネシア語の無為動詞（その 1）——日本語の動詞との対比——」
「インドネシア語の無為動詞（その 2）——接頭辞 ter-型および接頭・接尾辞 ke-an 型」
3. 森村 蕃 「アラビア語動詞第五形及び第六形の動名詞に由来する語」
4. Edy Priyono “Tinjauan tentang Cant dalam Media Cetak Indonesia”
5. 左藤正範 「日本語の辞書に見られるマレー語・インドネシア語起源の語彙について」
6. 山口真佐夫 「南スラウェシ州のタンコウ語の研究」

7. 安田和彦 「インドネシア語の三人称指示代名詞 “dirinya” について」
8. 福島弘恵 「スジャラ・ムラユの ke- -an」
9. 正保 勇 「Adalah と Ialah に関する一考察」
10. 小座野八光 「インドネシアにおける日本占領の東南アジア他地域との対比」
11. 佐々木重次 「最新インドネシア語小辞典
——パソコンを利用する辞書編纂のノウハウ——」（報告）
12. 富尾武弘 「海のシルクロードのひとつま」（報告）
13. 小野沢純 「世界の主要大学におけるマレー・インドネシア語教育事情～MABM
に参加して～」（報告）

第 34 回 [2003 年 11 月 1 日 (土)・2 (日) 箱根]

1. 粕谷俊樹、エディ・プリヨノ、浦野崇央、若林聡子
「日本語からマレー語への翻訳はいかに行われてきたか」
2. 左藤正範 「『広辞苑』に見られるマレー語・インドネシア語起源の語彙について」
3. 関 昌也 「インドネシア語の‘する’動詞・me-型と di-型の並存競合関係について」
4. Edy Priyono “Tinjauan tentang Iklan Layanan Masyarakat di Media Cetak Indonesia:
Khususnya di Majalah TEMPO (2000-2003)”
5. 浦野崇央 「携帯メール (SMS) における表現法」
6. 山口真佐夫 「ランピ (Rampi) 語の研究」
7. Totok Suhardijanto “Pengajaran Tata Bahasa Indonesia kepada Penutur Jepang”
8. 大形里美 「インドネシアにおける女性法学議論」
9. 安田和彦 「知覚・思考を表わす動詞の形態とその機能」
10. Ariyanto “Sistem Tanda dalam Komunikasi Verbal”
11. 勝西紀之 「インドネシア語の継続相」
12. 富尾武弘 「海のシルクロード：その(2)～鑑真随行者崑崙国人軍法力～」(報告)

第 35 回 [2004 年 11 月 20 日 (土)・21 日 (日) 三重県鳥羽]

1. 関 昌也 「前稿『インドネシア語の‘する’動詞・me-型と di-型の並存競合関係
について』の補遺『あれこれ』」
2. 山口真佐夫 「マッセンレンプル (Massenrempulu) 語の系統」
3. Edy Priyono “Tinjauan tentang Kartun Editorial di Media Cetak Indonesia: Khususnya di
Majalah TEMPO (2003-2004)”
4. 原真由子 「多元的語彙特性パラメータ導入によるインドネシア語彙教育研究の展
開」
5. 近藤由美 「インドネシア語検定の実情」
6. 大形里美 「イスラーム女性法学とイスラーム・リベラル」
7. 松野明久 「テトゥン語研究の現状について」
8. 磯浦美恵子 「インドネシアでの日本語教育を終えて」
9. 倉田 勇 「Tepong Tawar と柳田国男」

10. 山本春樹 「バタックの宗教」
11. 富尾武弘 「中部・西部ジャワ遺跡調査報告（2004年8月）」（報告）

第36回〔2005年11月26日（土）・28日（月） ホテル箱根アカデミー〕

1. 山口真佐夫 「言語集団としてのパッタエ（Pattae'）」
2. Zainuddin Hakim “Sekilas tentang Afiks Pembentuk Verba dalam Bahasa Mamasa”
3. Edy Priyono “Tinjauan tentang ILM di Media Cetak Indonesia dan Jepang”
4. 安田和彦 「meN-動詞の目的語となる従属節に現れる動詞+nya について」
5. 左藤正範 「インドネシアの中学校の歴史教科書に見られる日本語起源の語彙の比較研究」
6. 関 昌也 「能動態・受動態と自然態」
7. Toerseno A.S. “Interferensi Bahasa Daerah dalam Media Massa Berbahasa Indonesia”
8. 中嶋鴻毅 「南スラウェシ語群北方下位語群の言語（マッセンレンプル語）の音声データベース構築」
9. Sudibyo “Tuan dan Liyan: Raffles di Mata Abdullah Bin Abdulkadir Munsyi”
10. 大形里美 「インドネシアにおけるイスラームと宗教的寛容性」
11. 正保 勇 「マレーシア語のCOD 構文」
12. 富尾武弘 「ジャワ元寇補遺
——元寇後の爪哇・元朝交渉中の一問題点——」（報告）

第37回〔2006年11月11日（土）・12日（日） KKR ホテルびわこ〕

1. Widodo Hs. “Tutorial Model for Indonesian Language Instruction for Foreign Learners (BIPA)”
2. Edy Priyono “Sebuah Tinjauan tentang Artikel CSR di Media Cetak Indonesia: Khususnya di Majalah TEM-PO (2003–2006)”
3. Bambang Rudyanto 「インドネシアの防災専門用語——日本と比較して」
4. Savitri Elias “Tingkat Kesulitan Membedakan Bunyi dalam Kata Bahasa Indonesia: Tinjauan terhadap Penu-tur Bahasa Jepang”
5. Totok Suhardijanto “Motivasi Internal dan Eksternal dan Hubungannya dengan Harapan Pemelajar: Studi tentang Motivasi Belajar Bahasa Indonesia pada Mahasiswa Jepang”
6. Dwi Puspitorini “Kedudukan Bahasa Jawa Dewasa ini”
7. 左藤正範 「インドネシア語の主要な辞書に見られる日本語起源の語彙について」
8. 山口真佐夫 「タエ（Tae'）語とその周辺の言語の系統関係」
9. 安田和彦 「untuk に導かれる副詞節における主語の代名詞化について」
10. 浦野崇央 「日本におけるインドネシア地域研究」
11. 竹下 愛 「『アジアン・ヒーロー』イワン・ファルスの起源——都市周縁部の若者層にみるカリスマシンガーの受容と消費——」
12. 柏村彰夫 「地方自治体のインベントリ——法令を中心として——」

13. Untung Yuwono “Pengajaran Sastra Indonesia bagi Pemelajar BIPA: Sekedar Membagi Pengalaman Mengajar BIPA di TUFs, Jepang dengan Metode Lintas Bahasa/Sastra”
14. Dendy Sugono “Pembelajaran Bahasa Indonesia untuk Penutur Asing Lintas Kurikulum”
15. 森山幹弘 「新しいインドネシア語教育の可能性」
16. 富尾武弘 「マライ世界とマダガスカルの交流～崑崙層期国考～」(報告)
17. 関 昌也 「インドネシア語の自然態の視点
——インドネシア語の jadi の意味について——」(報告)

第 38 回〔2007 年 11 月 10 日(土)・11 日(日) 南山大学〕

<テーマ発表>「インドネシア語教育の諸問題」

趣旨説明(青山 亨)

発表 1 Henri Daros “Menimbang Pola Pembelajaran Percakapan Bahasa Indonesia Yang Efektif: Tantangan dan Pengalaman Membimbing Kelas Penutur Bahasa Jepang”

発表 2 柏村彰夫 「初級学習者の誤答について」

発表 3 原真由子、降幡正志

「聴覚実験音声学的調査がもたらす知見の発音教育についての含意」

発表 4 Dendy Sugono “Pengembangan Pembelajaran Bahasa Indonesia untuk Penutur Asing”

<自由研究発表>

1. 左藤正範 「インドネシアの小学校の教科書に見られる日本語起源の語彙の比較研究」
2. Edy Priyono Sebuah Tinjauan tentang Iklan CSR di Media Cetak Jepang dan Indonesia.
3. 大形里美 「インドネシアにおけるイスラム教義の理解と実践に関する実証研究——アンケート結果の分析(その1)」
4. 安田和彦 「untuk に導かれる形容詞節の類型と主語の代名詞化について」
5. Totok Suhardijanto “Pergeseran dari Bahasa Jawa ke Bahasa Indonesia pada Keluarga Kelas Menengah di Beberapa Kota di Jawa: Sebuah Kajian Awal tentang Bahasa dan Identitas”

第 39 回〔2008 年 11 月 8 日(土)・9 日(日) 東京外国語大学〕

<テーマ発表>「インドネシア語教育の実践」

趣旨説明(青山 亨)

発表 1 Totok Suhardijanto “Kamus Elektronik sebagai Penunjang Pembelajaran Bahasa Indonesia: Pemanfaatan Stemming untuk Meningkatkan Kemudahan Penggunaan Kamus Elektronik.”

発表 2 安田和彦 「インドネシアのテレビ録画映像の活用について」

発表 3 Suhandano Preposisi dan Afiks pada Verba dalam Bahasa Indonesia.

<自由研究発表>

1. 末延俊生 “Pelesapan Preposisi pada Konstruksi Frasa Preposisional Lokatif dan Temporal dalam Bahasa Indonesia.”
2. 長南一豪 「インドネシア語心理動詞のカスケード構造」
3. 吉久晶子 「小説『ラウマネン(Raumanen)』に見る近代インドネシアの国家、民族、神の位置」
4. Edy Priyono “Sebuah Tinjauan tentang Singkatan di Majalah Bisnis Jepang dan Indonesia”

第40回〔2009年11月28日(土)・29日(日) 京都外国語専門学校〕

<テーマ発表>「ポスト・スハルト期インドネシアにおける言語状況の変化」

趣旨説明(森山幹弘)

- 発表1 塩原朝子 「東部インドネシアの言語状況——地方語の光と影——」
発表2 内海敦子 「北スラウェシ州における多言語状態とマナド方言の威信と活力」
発表3 津田浩司 「ポスト・スハルト期インドネシアにおける華人と中国語——地方都市における中国語学習ブームを手がかりに——」
発表4 北村由美 「ジャカルタの『言語景観』にみられる中国語使用と華人」

<自由研究発表>

1. Edy Priyono “Meninjau Tren Baru lewat Singkatan Asing Kontemporer di Media Cetak Indonesia dan Jepang.”
2. Sri Budi Lestari “Pemakaian Kata Hormat dalam Bahasa Jawa: Studi Siswa dan Masyarakat Yogyakarta”
3. 安田和彦 「supaya/agar に導かれる節について」
4. 長南一豪 「完了性をあらわす動詞接辞 kan」
5. 高地 薫 「9月30日事件を巡る文学と歴史」

第41回〔2010年11月13日(土)・14日(日) 拓殖大学〕

<テーマ発表>「インドネシア語の文法研究」

趣旨説明(安田和彦)

- 発表1 佐々木重次 「幾つかの新しいイラスト(図解文法)」
発表2 長南一豪 「mau+受身の両義性について」
発表3 Sri Budi Lestari 「インドネシア語口語における‘sama’の用法」
発表4 関 昌也 「私見構文論・動詞論」

<自由研究発表>

1. Edy Priyono “Sebuah Tinjauan atas Singkatan di Advertorial Kementerian RI”
2. 舟田京子 「マレーシアにおける独立前後のマレー語の立場」
3. 野村 亨 「インドネシアの鉄道事情；現状と将来」
4. 大形里美 「『近代派』イスラム組織ムハマディヤーの伝統と現代インドネシア・イスラム社会」
5. 相武知里 「第二言語習得理論を応用したインドネシア語教材について」

<特別講演>

Dr. David Hill “Pengajaran Bahasa Indonesia di Universitas Australia: Situasi Sekarang dan Strategi Masa De-pan”

第 42 回〔2011 年 11 月 12 日（土）・13 日（日） 京都産業大学〕

<テーマ発表>「日本のインドネシア語教育の活性化のために」

趣旨説明・発表（森山幹弘；降幡正志；原 真由子）

<自由研究発表>

1. Andi Irma Sarjani 「インドネシア語の受動態と日本語の受身との対照」
2. Ari Santoso “‘Nama saya Sazae. Ini keluarga Saya.’: Penerapan Pembelajaran Aktif di Kelas Bahasa Indo-nesia untuk Pemula”
3. 長南一豪 「インドネシア語の名詞句内の語順について」
4. 三宅良美 「インドネシアの英語借用語——雑誌の人生相談をケース・スタディーにして——」
5. 野村 亨 「蘭領東インド期の鉄道 1867—1941」
6. 大形里美 「インドネシアにおける女子割礼をめぐる状況～女子割礼をめぐる言説とその実践～」
7. Rakhmat Soleh “embelajaran Sastra Bandingan Indonesia-Jepang: Sebuah Pengalaman Mengajar Bahasa dan Sastra Indonesia di TUFS”
8. Suyoto “olaborasi ‘Dual System’ dalam Penyelenggaraan Program BIPA: Model Kerja Sama Program Indo-nesia-Jepang”
9. Totok Suhardijanto “Tesaurus Daring Bahasa Indonesia: Sistem Penyajian dan Pengembangan Ivan Lanin bangannya, serta Upaya Penentuan Relasi Makna Antonimi”

第 43 回〔2012 年 11 月 17 日（土）・18 日（日） 慶應大学〕

1. 長南 一豪 「OSV 言語としてのインドネシア語」
2. 内海 敦子 「インドネシア語マナド方言の書記方法」
3. 原 真由子 「バリ語山地方言使用地域における社会言語学的様相——ブダワ村の面談調査に基づいて——」
4. 安田 和彦 「補文の含意について」
5. Edy Priyono “Sebuah Model Pembelajaran Aktif di Kuliah Kebudayaan Indonesia”
6. 荒木 亮 「移動と宗教実践の可変性を巡る知識人類学的考察——日本に住むインドネシア人ムスリムの宗教実践を事例に——」
7. 大形 里美 「インドネシアにおけるイスラム新興ビジネスとイスラム思想——ムスリマ専用サロンとイスラム教義——」
8. 豊田 和規 「『スラット・チュンポレット』に見られるジャワの宮廷詩人ロンゴワルシトのメッセージ」
9. 三宅 良美 「インドネシア映画とジェンダー問題」
10. 竹下 愛 「星空映画上映会・ラヤール・タンチャップ」

第 44 回〔2013 年 11 月 9 日・10 日 摂南大学〕

<テーマ発表>

「インドネシア語の会話の授業について——ネイティブ教員の報告を手がかりとして——」

趣旨説明・発表（森山幹弘；降幡正志；原 真由子）

<自由研究発表>

1. Edy Priyono “Penggunaan Foto dalam Pembelajaran Percakapan”
2. Suyoto “Upaya Mempertahankan Minat Belajar Bahasa Indonesia Mahasiswa Tingkat 3 dan 4 di Kanda Univer-sity of International Studies”
3. 野村亨 「インドネシア語の接辞 meN と五十音図」
4. 三宅良美 「インドネシア語の流行語再考」
5. 大形里美 「インドネシアにおけるイスラム新興ビジネスの担い手たちのイスラム教義解釈とその実践」
6. 野中葉 「インドネシアにおけるイスラーム短編小説の広がりと女性たちのイスラーム覚醒」
7. エリザベス・エスター・フィブラ・シマルマタ
「現代ジャワ若者におけるジャワ語の敬語使用の現状」
8. 安田和彦 「インドネシア語の補文の含意について」
9. 長南一豪 「インドネシア語の引用句倒置構文」
10. アリ・アルタディ 「インドネシア語の条件形式の用法と主節のモダリティについて」
11. 山口真佐夫 「セレベス上位語群と南スラウェシ語群の関係」

第 45 回〔2014 年 11 月 15 日・16 日 神田外語大学〕

<講演>

Prof. Dr. Mahsun, M. S.

（Ketua Badan Pengembangan dan Pembinaan Bahasa, Kementerian Pendidikan dan Kebudayaan, Republik Indonesia: インドネシア共和国教育文化省言語開発育成庁長官）

<自由研究発表>

1. 原 真由子 「バリ語山地方言における人称詞と呼称に見られる敬語表現」
2. Edy Priyono 「2014 年の総選挙で使われた頭辞語と略語についての一分析」
3. アリ・アルタディ、長南一豪 「日本語とインドネシア語の終助詞について」
4. 三宅良美 “Reconsidering discourse particles in colloquial Indonesian”
5. 大形里美 「インドネシアにおけるイスラム新興ビジネスの動態」
6. 荒木亮 「ジルブupp (jilboobs) 言説の広まりからみるイスラームのオブジェクト化」
7. Sri Budi Lestari 「佐賀県におけるハラール対応の実態調査」
8. 内海敦子 「北スラウェシ州の民話の分類」
9. 山口裕子 「ブトン島チア・チア語へのハングル導入の社会、歴史的背景と行方」

第 46 回〔2015 年 11 月 14 日・15 日 京都外国語専門学校〕

<自由研究発表>

1. 山口真佐夫 「マカッサル語、ブギス語再考」
2. 原真由子 「バリ語-インドネシア語コード混在会話におけるバリ語の particle が果たす機能」
3. Petrus Ari Santoso “Pembelajaran aktif dalam kegiatan membaca (Active learning in reading activity)”
4. 長南一豪、アリ・アルタディ 「インドネシアの大学の日本語学科における言語学科目指導法の開発と実践」
5. 三宅良美 「インドネシア異文化体験ジョークのメタ・プラグマティクス
Meta-pragmatics of Indonesian jokes: when Indonesia meets West」
6. 織田康孝 「日本軍政下のジャワ島における朝日新聞社の役割」
7. Ariestyani Wahyu Perwita Sari 「インドネシア語における『連結動詞』をめぐって」
8. Tiwuk Ikhtiari 「インドネシア語におけるリンカー “yang” について」
9. 稲垣和也 「インドネシア語の所有構文」

<講演>

John Bowden (東京外国語大 AA 研フェロー) Toward a history of Indonesian slang

第 47 回〔2016 年 11 月 19 日・20 日 愛知県立大学〕

1. Liliana Muliastuti (Ketua Umum Afiliasi Pengajar dan Pegiat BIPA)
“Peran APPBIPA dalam upaya standardisasi pengajar BIPA”
2. 森山幹弘、原真由子、降幡正志共同発表 (南山大学、大阪大学、東京外国語大学)
「インドネシア語基本文法の記述：教材作成のための共同研究からの報告」
3. Edi Priyono “Penggunaan Ponsel Cerdas dalam Pembelajaran Percakapan” (スマートフォンを使った会話の授業)
4. 浦野崇央、Cicilia Tantri Suryawati (Universitas Dr.Soetomo, Surabaya)
「留学に際する教育カリキュラム統合の可能性
——摂南大学生によるストモ博士大学での学修を事例として」
5. 長南一豪 「インドネシア人に多い日本語の誤りの分析」
6. 大形里美 「イスラム新興ビジネスの担い手: Hijabers Community メンバーたちの
イスラム教義理解と実践のあり方～実証研究の成果から見てきたこと～」
7. Ariestyani Wahyu Perwita Sari 「インドネシア語における描写述語とその周辺」
8. 稲垣和也 「インドネシア語オノマトペ研究序説」
9. Tiwuk Ikhtiari 「インドネシア語における『指定文』及び『指定文』について」
10. 澤井志保 「香港で働くインドネシア人の家事労働者のイスラーム文学創作グループに見られるインターセクショナルリー」
11. 工藤尚子 「宮武正道とインドネシア語研究－軍事郵便を中心として－」

第 48 回〔2017 年 11 月 11 日・12 日 天理大学〕

<講演>

Dadang Sunendar 「Badan Bahasa とインドネシア語の現状」

<自由研究発表>

1. 浦野崇央、Cicilia Tantri Suryawati 「日本人留学生の問題関心: ストモ博士大学における摂南大学留学生を事例として」
2. Petrus Ari Santoso “Students’ beliefs on Indonesian language learning: utilizing BALLI in Japan”
3. 末延俊生 「日本人学生のインドネシア語作文における前置詞使用について」
4. Liliana Muliastuti “Budaya Indonesia dalam Pengajaran BIPA”
5. Ifan Iskandar “Kesulitan Siswa dalam Belajar Bahasa Inggris dan Kesulitan Guru dalam Melaksanakan Penelitian Tindakan Kelas”
6. Ida Bagus Ketut Sudiasa “Budaya dan seni (Tari dan Musik) Tradisi Indonesia Menuju Industri”
7. 長南一豪 「インドネシア人のための日本語作文発表の教授法について」
8. 大形里美 「インドネシアにおける性的マイノリティを取り巻く状況」
9. 三宅良美 「経験を語るナラティブの研究: インドネシアにおける悲劇的体験を例にして」
10. 山口裕子 「集団的暴力が語られる時: 1960 年代末以降の東南スラウェシでの経験から」
11. 野中葉 「インドネシア語学習者のプロフィールと意識: 慶應義塾大学湘南藤沢キャンパスにおける履修者へのアンケートより」
12. 稲垣和也 「インドネシア語における母音交替重複オノマトペの記述的研究」
13. アリエスティアニ・ワハユ・ペルウィタサリ 「インドネシア語の移動動詞」
14. 松田浩子 「蘭印統治期のジャワにおけるオランダ人による「bandjir」の認識」
15. Fitriana Puspita Dewi 「林芙美子とジャワ: 『南の田園』における作家の文化的アプローチを巡って」

第 49 回〔2018 年 11 月 17 日・18 日 南山大学〕

<講演>

Dadang Sunendar “Laporan dari Kongres Bahasa Indonesia XI”

Dora Amalia (Kepala Bidang Pengembangan, Pusat Pengembangan dan Pelindungan, Badan Pengembangan dan Pembinaan Bahasa)

“Penyusunan dan Pemanfaatan KBBI Daring dan UKBI Daring”

<自由研究発表>

1. 山口裕子 「1960 年代末の東南スラウェシ地方の集団的暴力の経験: 語りの遷移と不変性に注目して」
2. 三宅良美 “A Lingo-cultural Observation on Savanajaya in Buru Island”
3. I Wayan Pastika “Peran Konteks dalam Penentuan Makna Tersirat Teks: Kasus Tiga Teks Forensik Bahasa Indonesia”

4. 織田康孝 「戦後日本・インドネシア関係史における民間団体の役割」
5. Andina Misana “Wacana Masyarakat Indonesia mengenai Bencana Higashi Nihon Daishinsai”
6. 笹本ひろ子 「バンドン工科大学の年間と教育プログラムに見るインドネシアの初期工学教育 1920– 1941」
7. 大形里美 「インドネシアにおける婚姻法改革をめぐる状況 —異教徒間結婚についての議論—」
8. 深谷拓未、齊藤喬 「現代インドネシア女性のヒジャブ・ファッションの現状と、宗教・ジェンダーの再考」
9. Suyoto, Imelda Coutrier dan Petrus Ari Santoso
“Setahun Pendirian APPBIPA Cabang Jepang”

第 50 回〔2019 年 11 月 9 日・10 日 大阪大学〕

<創立 50 周年記念座談会～50 年を振り返って>

佐々木重次、クトゥット・スディアルタ、(司会：舟田京子)

<招待講演>

Dadang Sunendar, (Badan Pengembangan Bahasa dan Perbukuan)

“Kebijakan Pelindungan Bahasa Daerah di Indonesia”

Dora Amalia (Badan Pengembangan Bahasa dan Perbukuan)

“Sumbangan kosakata Daerah dalam Kamus Besar Bahasa Indonesia”

<自由研究発表>

1. 東海林恵子 「ワリソングからワリピトゥへ——バリ島におけるイスラム聖者廟の隆盛——」
2. 上石景子 「ジャワ文学におけるガトーカチャーシュラヤ (Ghaṭotkacāśraya) に関する考察」
3. 西島薫 「ダヤック人エリートの形成過程——西カリマンタン州・クタパン県の事例から」
4. 大形里美 「インドネシアにおける女子割礼—政策の変化と現状」
5. 佐近優太 「インドネシア語の能動文的 ter 派生動詞」
6. 藤崎拓海 「インドネシア語会話における gitu の談話的機能」
7. Diess Alwi Tutiarta 「インドネシア語における他動詞化形式素としての共接辞 meN-kan」
8. Dewi Ariantini Yudhasari
“Menjayakan Bahasa Indonesia melalui Peningkatan Kompetensi Berbahasa Indonesia: Studi Kasus Rencana Pengembangan Kemampuan Bahasa Indonesia di STBA LIA”
9. Totok Suhardijanto “Peran APPBIPA dalam Pembangunan Sumber Daya Pengajaran Bahasa Indonesia”
10. Atin Fitriana “Kesadaran Metalinguistik dalam Pengajaran BIPA”
11. Dwi Puspitorini “Bahasa Indonesia di Media Sosial dalam Pengajaran Bahasa Indonesia sebagai Bahasa Asing”

12. Pujiharto “Focalizer Jawa-Islam tentang Kematian dalam Fungsi Kepengarangan Danarto”
13. Novi Siti Kussuji Indrastuti
“Konstruksi Hegemonic Masculinity dalam Cerita Rakyat Indonesia”
14. Edy Priyono “Singkatan, Akronim, dan Politik”
15. 森山幹弘（南山大学）、降幡正志（東京外国語大学）、原真由子（大阪大学）
「インドネシア語応用教材に関する共同研究からの報告」

50 年のあゆみを作成するにあたり、資料を提供してくださった佐々木重次先生、関昌也先生、左藤正範先生のご息女 愛様に感謝いたします。

Strategi Optimalisasi Pengembangan dan Pembinaan Bahasa Indonesia, Pelindungan Bahasa Daerah, dan Penguasaan Bahasa Asing インドネシア語の発展育成、地方語の保護、外国語修得の最適化戦略

Dadang Sunendar (Universitas Pendidikan Indonesia)
ダダン・スネンダル (インドネシア教育大学)

1. Pengantar

Bagi bangsa Indonesia, Sumpah Pemuda pada tahun 1928 merupakan momentum amat penting karena menghasilkan tiga sumpah sakral yang menyatukan suara hati bangsa, yaitu berbangsa satu, Bangsa Indonesia, bertanah air satu, Tanah Air Indonesia, dan menjunjung Bahasa Persatuan, Bahasa Indonesia. Bahasa Indonesia sudah terbukti mampu menyatukan rakyat di seluruh negeri, menjadi ruh kolektif bangsa, dan perekat utama kebinekaan Indonesia. Jika menilai peristiwa-peristiwa fenomenal yang terjadi di tanah air sejak masa prakemerdekaan sampai era kemerdekaan, kesepakatan menjadikan bahasa Indonesia sebagai bahasa negara di antara ratusan bahasa daerah di Indonesia, merupakan salah satunya.

Indonesia adalah negara kedua terbesar di dunia yang memiliki jumlah bahasa paling banyak. Badan Pengembangan dan Pembinaan Bahasa Kementerian Pendidikan dan kebudayaan mencatat 718 bahasa daerah di tanah air (Badan Pengembangan Bahasa dan Perbukuan, 2019). Sebagai bangsa majemuk yang memiliki banyak bahasa, Indonesia memerlukan strategi optimalisasi dalam perencanaan, pengembangan, pembinaan, dan pelindungan bahasa yang tepat.

2. Analisis SWOT

Kekuatan (Strengths) bahasa Indonesia sebagai bahasa negara terjaga melalui peraturan perundangan yang sangat kokoh, mulai dari Undang-Undang Dasar 1945 sampai Peraturan Menteri. Politik bahasa di dalam negeri juga menampilkan kedaulatan bahasa negara dalam bidang pendidikan melalui pelajaran bahasa Indonesia sejak sekolah dasar hingga sekolah menengah, bahkan ada mata kuliah bahasa Indonesia di perguruan tinggi. Kesepakatan Sumpah Pemuda pada tahun 1928 menjadi kekuatan utama kebijakan bahasa negara. Hampir semua lapisan masyarakat menggunakan bahasa Indonesia sebagai bahasa percakapan sehari-hari, di samping penggunaan bahasa daerah, dan bahasa Indonesia sudah dijadikan sebagai bahasa di lingkungan kantor, dan di tempat lainnya. Tidak ada resistensi kedaulatan bahasa Indonesia sebagai bahasa persatuan. Artinya, politik kebijakan tentang posisi bahasa Indonesia sudah final di Indonesia. Keberadaan 718 bahasa daerah yang sudah teridentifikasi telah menjadi identitas kebinekaan Indonesia. Toleransi di Indonesia sudah diinisiasi oleh para pemuda Indonesia dalam ikrar Sumpah Pemuda; seluruh suku bangsa di Indonesia yang masing-masing memiliki bahasa daerah menyepakati sebuah bahasa negara di atas bahasa-bahasa lainnya, yaitu bahasa Indonesia.

Pengajaran dan minat belajar masyarakat Indonesia terhadap bahasa asing di Indonesia cukup tinggi, baik di lembaga pendidikan formal maupun informal. Penguasaan ranah ketiga bahasa di Indonesia ini akan semakin meningkatkan daya saing di tingkat internasional dalam berbagai bidang.

Kelemahan (Weaknesses) umum pemahaman bahasa negara terletak pada pengembangan dan pembinaan kepada masyarakat yang perlu memperoleh informasi utuh tentang keberadaan bahasa Indonesia. Sebagian masyarakat belum memahami filosofi mengapa bahasa negara perlu ada dan menjadi salah satu

simbol negara Indonesia. Sebagian besar masyarakat baru memahami bahwa bahasa Indonesia hanya berfungsi sebagai alat komunikasi. Padahal bahasa negara adalah jati diri bangsa, kebanggaan nasional, dan alat pemersatu bangsa yang utama. Dari sisi pengembangan, jumlah lema maupun leksem bahasa Indonesia masih sangat kurang. Lema bahasa Indonesia sekarang berjumlah 111.569, masih jauh bila dibandingkan dengan bahasa Inggris yang sudah lebih dari 700.000 lema. Target penambahan lema perlu dilakukan melalui penambahan kosakata, di antaranya melalui penambahan lema dari bahasa-bahasa daerah, kamus bidang ilmu, dan pepadanan kosakata bahasa-bahasa asing.

Pelindungan bahasa-bahasa daerah masih memerlukan keseriusan Pemerintah Daerah di seluruh tanah air, terutama daerah-daerah yang memiliki banyak bahasa seperti di Papua dan Papua Barat yang berjumlah 428 bahasa.

Penguasaan bahasa asing masih berfokus pada bahasa Inggris yang menjadi bahasa komunikasi internasional. Masyarakat Indonesia perlu juga dimotivasi untuk menguasai bahasa-bahasa internasional lainnya untuk lebih mempersiapkan sumber daya manusia yang lebih komprehensif.

Peluang (Opportunities) berkembangnya bahasa Indonesia sangat besar. Bahasa Indonesia masuk kategori bahasa yang masih muda, namun memiliki potensi sangat besar untuk menjadi salah satu bahasa internasional. Bahasa negara hampir memiliki semua kriteria menjadi sebuah bahasa internasional.

Peluang bahasa-bahasa daerah untuk tetap terlindungi sangat kuat karena dijamin oleh Undang-Undang Dasar 1945, pasal 32 ayat (2) tentang pemeliharaan dan penghormatan negara terhadap keberadaan bahasa-bahasa daerah di Indonesia.

Keberadaan pengajaran tujuh bahasa asing dalam kurikulum pendidikan dasar dan menengah, yaitu bahasa Inggris, Prancis, Arab, Jepang, Mandari, Spanyol, dan Korea memberi peluang generasi muda Indonesia untuk bersaing di tingkat global.

Ancaman (Threats) terhadap politik trigatra bahasa di Indonesia masih tetap ada. Sebagian masyarakat Indonesia ada yang belum memahami makna keberadaan bahasa Indonesia sebagai bahasa negara dan bahasa persatuan. Oleh karena itu, sebagian ruang publik, terutama di kota-kota besar, masih dipenuhi oleh iklan, publikasi, papan nama, spanduk, kain rentang, dan bentuk komunikasi lain yang menggunakan bahasa asing. Kondisi ini tidak sesuai dengan amanat Undang-Undang Nomor 24 Tahun 2009 pasal 36 tentang kewajiban penggunaan bahasa negara. Negara wajib hadir di ruang publik, salah satunya melalui bahasa negara. Penggunaan bahasa asing diperbolehkan, tapi tetap harus ada bahasa negaranya.

Ancaman kepunahan bahasa-bahasa daerah tetap nyata berdasarkan kajian tingkat daya hidup bahasa-bahasa daerah yang dilakukan oleh Badan Pengembangan dan Pembinaan Bahasa Kemendikbud. Pelindungan bahasa dan sastra daerah harus menjadi salah satu fokus perhatian program kerja para pimpinan daerah yang bekerja sama dengan Badan Pengembangan dan Pembinaan Bahasa.

Sebagian pengajaran bahasa asing di sekolah masih terjebak pada model pengajaran gramatikal yang kurang disukai peserta didik. Pendekatan teks dan pendekatan komunikatif serta beberapa pendekatan inovatif perlu dilakukan para guru untuk lebih menggairahkan peserta didik dalam belajar bahasa asing.

3. Strategi Kebijakan Pengembangan Bahasa dan Sastra

3.1. Pengembangan dan Pembinaan Bahasa Negara

Kebijakan bahasa di Indonesia bersandar pada ikrar Sumpah Pemuda yang ketiga tentang penghormatan dan penetapan bahasa Indonesia sebagai bahasa negara dan bahasa persatuan bangsa. Ikrar ini diwujudkan dalam Undang-Undang Dasar Negara Kesatuan Republik Indonesia Tahun 1945 pasal 36 yang berbunyi “ Bahasa Negara ialah Bahasa Indonesia”. Implementasi pengembangan dan pembinaan bahasa negara diperkuat melalui Undang-Undang Nomor 24 Tahun 2009 tentang Bendera, Bahasa, dan Lambang Negara, serta Lagu Kebangsaan. Secara jelas Undang-Undang ini menetapkan tiga ranah kebijakan bahasa di Indonesia, yaitu bahasa Indonesia, bahasa daerah, dan bahasa asing, yang sekaligus menegaskan urutan prioritasnya. Penetapan ranah ini sesuai dengan kondisi yang hidup di bumi Indonesia. Daya hidup ketiga ranah bahasa ini bisa dikatakan baik dan berkembang, meskipun ranah bahasa asing mencoba menyeruak melewati dua ranah sebelumnya, terutama di ruang publik. Sesuatu yang menjadi tantangan terbesar penegakan peraturan perundangan bahasa di tanah air.

Dengan kata lain, kebijakan kebahasaan dan kesastraan di Indonesia secara jelas ditunjukkan melalui Undang-Undang Nomor 24 Tahun 2009 yang merupakan rujukan sah politik bahasa dan sastra di Indonesia yang mengakomodasi kondisi kebahasaan dan kesastraan.

Pengembangan bahasa Indonesia terus dilakukan melalui beragam strategi, mulai dari penambahan lema, leksem, makna, submakna, penelitian, pembakuan, dan kodifikasi kaidah bahasa, penyusunan bahan ajar, penyusunan alat uji kemahiran berbahasa, penerjemahan dan lain-lain. Abad XXI ditandai dengan pesatnya kemajuan teknologi dan komunikasi yang turut mewarnai pengembangan dan pembinaan bahasa Indonesia. Peluncuran KBBI V daring (*online*) dan luring (*offline*) dengan alamat www.kbbi.kemdikbud.go.id memberikan banyak kemudahan kepada banyak pihak untuk lebih mudah mengakses informasi kebahasaan; para pengguna telepon seluler dapat mengunduh setiap waktu kebutuhan pencarian makna kosakata. Masyarakat yang masih kesulitan mengakses secara daring dapat memanfaatkan KBBI luring yang sederhana dan dapat dibawa kemana-mana. Aplikasi-aplikasi gratis yang ditawarkan seakan menjadikan semua pengguna menjadi seorang pekamus, karena mereka dapat mengusulkan atau mengkritisi sebuah makna.

Amanat Undang-Undang Nomor 24 Tahun 2009 dalam pengembangan bahasa bisa dikatakan telah dilaksanakan meskipun masih banyak catatan untuk pengembangannya. Catatan utama diberikan pada penegakan aturan yang berlaku dan mengikat masyarakat tentang penggunaan bahasa Indonesia di ruang publik. Lebih dari sepuluh tahun Undang-Undang ini dilaksanakan, namun belum mampu mengubah persepsi sebagian masyarakat untuk lebih bangga menggunakan bahasa negara. Ukuran paling mudah yang dilakukan adalah dengan memotret ruang publik; ruang yang menjadi milik seluruh warga, ruang tempat pembuktian keperkasaan sebuah simbol bangsa, yaitu bahasa Indonesia. Terbitnya Peraturan Presiden Nomor 63 Tahun 2019 tentang Penggunaan Bahasa Indonesia diharapkan mampu menegakkan kedaulatan bahasa negara di tanah air, terutama di ruang publik.

Ketidakadaan sanksi dan denda dalam Undang-Undang Bahasa seharusnya tidak boleh menjadi alasan pengingkaran penggunaan bahasa negara, karena fungsi bahasa negara sudah jelas, yaitu sebagai pengungkap jati diri bangsa, kebanggaan nasional, sarana pemersatu berbagai suku bangsa, dan sarana

komunikasi antardaerah dan antarbudaya daerah. Kesadaran dan kebanggaan terhadap simbol negara harus mendahului aturan yang mengikutinya. Tentu saja hal ini berbeda bila kita membandingkan dengan hal lain yang peringkatnya tidak sama dengan simbol negara. Salah satu fenomena yang hidup di sebuah negara berkembang tampak pada sebagian masyarakatnya yang dengan mudah berkelit dari sebuah kewajiban, meskipun kewajiban itu nyata dan hadir, serta mengalir dalam kehidupan sehari-hari. Jika sanksi dan denda itupun ada, tidak ada jaminan bahwa semua permasalahan akan diatasi, terlebih bila sanksi dan denda berupa sanksi administratif.

Pembinaan bahasa menjadi salah satu tolok ukur hasil pengembangan yang dilakukan. Pemasyarakatan dan penyuluhan bahasa, pelajaran dan perkuliahan bahasa Indonesia sebagai mata kuliah umum maupun sebagai mata kuliah utama, dan jenis pembinaan lainnya, menggambarkan riuhnya masyarakat belajar bahasa Indonesia. Muara dari hasil pembelajaran itu salah satunya harus tergambar dalam ruang-ruang masyarakat yang disebut ruang publik; kedaulatan bahasa negara belum sepenuhnya berjaya di rumahnya sendiri.

Pengembangan bahasa Indonesia bagi penutur asing (BIPA) yang juga menjadi amanat Undang-Undang Nomor 24 Tahun 2009 perlu terus diperkuat melalui penyusunan bahan-bahan ajar cetak dan daring, jurnal dan laboratorium kebipaan, melibatkan semua pegiat BIPA di tanah air dan perwakilan Indonesia di luar negeri, serta diaspora Indonesia di seluruh dunia. Saat ini ada 45 negara di dunia yang mengajarkan bahasa Indonesia melalui 355 lembaga pendidikan.

3.2. Perencanaan Bahasa

Kaplan dan Baldauf Jr (1997) mengatakan bahwa usia perencanaan bahasa kemungkinan sama tuanya dengan sejarah umat manusia. Mereka menyebut perencanaan bahasa sebagai sebuah batang tubuh pemikiran, perundangan dan regulasi, aturan-aturan perubahan, keyakinan, dan praktik yang ditujukan untuk mencapai perubahan yang direncanakan dalam penggunaan bahasa oleh seseorang atau komunitas. Perencanaan bahasa dan sastra Indonesia dilakukan melalui berbagai proses pengembangan untuk memantapkan kedudukan dan fungsi bahasa Indonesia sebagai bahasa nasional dan bahasa resmi negara. Penelitian kebahasaan, pengayaan kosakata, pembakuan dan kodifikasi kaidah bahasa, penyusunan bahan ajar dan uji kemahiran berbahasa, penerjemahan, dan publikasi merupakan langkah-langkah pengembangan yang menjadi bagian tidak terpisahkan dari perencanaan bahasa Indonesia. Hal sama untuk sastra Indonesia yang dilakukan untuk menegaskan kekayaan budaya dan pengungkap budaya daerah serta memperkuat posisi sastra Indonesia sebagai bagian tidak terpisahkan dari sastra dunia.

Perencanaan bahasa Indonesia tidak terlepas dari konteks upaya peningkatan literasi masyarakat. Narasi literasi yang bergemuruh di tanah air menyusul informasi masih belum kuatnya minat baca masyarakat memperoleh dukungan langsung melalui penguasaan bahasa sebagai elemen utama literasi. Pendidikan dan literasi menjadi dua fondasi dalam satu tarikan nafas yang sama. Pengembangan bahasa Indonesia pada intinya harus mempermudah akses masyarakat dalam meningkatkan kapasitas dan kecakapan diri. Literasi dan subliterasi lainnya perlu memperoleh jembatan pemahaman melalui kosakata yang tersedia.

Politik bahasa dalam sektor pendidikan memberi peran dan kedudukan istimewa pada bahasa Indonesia. Keistimewaan kedudukan bahasa Indonesia yang tidak terbantahkan sejak sekolah dasar sampai perguruan tinggi masih memerlukan perencanaan yang matang dalam praktik pembelajarannya. Fungsi dan tujuan pengajaran

bahasa Indonesia di setiap jenjang tentu memiliki konsekuensi perencanaan yang baik untuk mengimbangi privilese yang sudah diberikan.

3.3. Pelindungan Bahasa dan Sastra Daerah

Perencanaan bahasa dan sastra daerah pada pokoknya untuk memberikan tempat yang penting bagi bahasa-bahasa daerah di tanah air yang menjadi bagian dari kekayaan budaya Indonesia dan sebagai elemen utama kebinekaan bangsa. Amanat Undang-Undang Dasar 1945 menegaskan kewajiban negara untuk memelihara dan melindungi bahasa daerah. Pemertahanan bahasa daerah dapat dilihat dari jumlah penutur muda bahasa ibu. Pewarisan bahasa ibu dari orang tua kepada anak-anaknya di ruang keluarga, implementasi muatan lokal maupun ruang komunitas untuk wilayah-wilayah tertentu yang memiliki banyak bahasa daerah harus memperoleh pengawalan yang ketat dari pemerintah daerah sebagai pemegang kewajiban pengembangan, pembinaan, dan pelindungan bahasa dan sastra daerah.

Undang-Undang Nomor 24 Tahun 2009 pasal 42 ayat (2) menegaskan bahwa Pemerintah Daerah wajib mengembangkan, membina, dan melindungi bahasa dan sastra daerah. Sedangkan pada ayat (3) disebutkan bahwa pelaksanaan ayat (2) di atas dikoordinasikan oleh lembaga kebahasaan. Koordinasi yang selama ini sudah terjalin cukup baik, namun masih memerlukan penguatan program. Dengan demikian, pelindungan bahasa daerah dapat terwujud apabila pemerintah daerah memberikan sikap positif kepada masyarakat (baca: keluarga), melalui berbagai fasilitasi penggunaan bahasa daerah. Pewarisan bahasa daerah dari para orang tua kepada anak-anak mereka bisa terwujud secara alamiah bila ruang bahasa daerah sudah terjaga. Penciptaan suasana kondusif harus diberlakukan juga untuk sastra daerah. Penerbitan buku-buku berbahasa daerah oleh pemerintah daerah akan mampu menjaga pemertahanan bahasa dan sastra di daerah. Selain itu, pemberlakuan muatan lokal bahasa daerah menjadi pilihan utama sebagian pemerintah daerah.

Tugas Pemerintah daerah dan lembaga kebahasaan adalah merawat bahasa dan sastra daerah agar daya hidupnya bertahan. Fenomena menyusutnya penutur muda bahasa daerah yang berujung pada ancaman kepunahan bahasa daerah selalu menjadi titik perhatian utama pelindungan bahasa dan sastra. Jika sebuah bahasa daerah punah, maka sastra daerahnya ikut terancam punah pula.

3.4. Penguasaan Bahasa Asing

Undang-Undang Nomor 24 Tahun 2009 menegaskan bahwa penguasaan bahasa asing warga negara Indonesia untuk meningkatkan daya saing bangsa. Keberadaan bahasa asing di tanah air secara resmi diakui melalui proses belajar di sekolah menengah atas atau sekolah menengah kejuruan. Perubahan beberapa kurikulum mempengaruhi posisi bahasa asing. Jumlah jam belajar yang belum memadai dan sumber belajar yang masih terbatas seringkali menjadi catatan pengajaran bahasa asing di sekolah menengah. Bertambah atau berkurangnya peserta didik yang belajar bahasa asing masih banyak ditentukan oleh kebijakan pimpinan sekolah maupun kecakapan guru pengajar di sekolah. Di sisi lain, jumlah lulusan Lembaga Pendidikan Tenaga Kependidikan (LPTK) yang lebih banyak dibandingkan dengan lowongan pekerjaan sebagai pengajar bahasa asing menyebabkan banyaknya lulusan di bidang ini memilih bekerja di luar bidangnya. Padahal tujuan pemerintah memfasilitasi pengajaran bahasa asing adalah untuk memberikan kompetensi kepada masyarakat dalam rangka peningkatan daya saing bangsa. Artinya, para peserta didik disiapkan sejak dini di sekolah menengah dan melanjutkan lebih intensif bagi mereka yang memilih profesi masa depan

sebagai pengajar atau ahli dalam bahasa asing tertentu. Aspek perencanaan yang memerlukan kajian lebih lanjut mengingat kompleksitas jumlah tenaga yang tersedia dengan lapangan pekerjaan yang masih terbatas.

Terbukanya pasar ASEAN melalui Masyarakat Ekonomi Asean (MEA) harus memaksa kita mengubah perencanaan bahasa asing. Penguasaan bahasa anggota Asean menjadi pertimbangan kebijakan ekonomi yang terbuka. Bahasa Indonesia, di samping bahasa Inggris, terus mengupayakan dirinya menjadi salah satu bahasa komunikasi di Asean paling dominan mengingat jumlah penutur, potensi, dan juga politik kebahasaan yang telah digariskan. Peluasan diplomasi bahasa negara ke seluruh dunia harus diikuti juga oleh berbagai upaya penguasaan beberapa bahasa asing, termasuk bahasa yang ada di ASEAN.

4. Simpulan

Politik bahasa di Indonesia tecermin dalam Undang-Undang Nomor 24 Tahun 2009 yang intisarinya membagi tiga ranah bahasa, yaitu bahasa Indonesia, bahasa Daerah, dan bahasa Asing. Trigatra bahasa ini juga merupakan urutan yang tidak boleh dipertukarkan yang satu dengan yang lainnya di wilayah Negara Kesatuan Republik Indonesia (NKRI). Sebagai negara majemuk yang memiliki bahasa dan sastra yang sangat banyak, pemerintah melalui Kementerian Pendidikan dan Kebudayaan perlu memiliki strategi perencanaan, pengembangan, pembinaan, dan perlindungan yang baik dan tepat.

Daftar Pustaka

- Ferguson, Gibson (2006) *Language Planning and Education*. Edinburg : Edinburg University Press Ltd.
- Kaplan, Robert B, and Richard B. Baldauf Jr (1997) *Language Planning : from practice to theory*. Clevedon, Philadelphia, Toronto, Sydney, Johannesburg : Multilingual Matters Ltd.
- Peraturan Pemerintah Republik Indonesia Nomor 57 Tahun 2014 tentang Pengembangan, Pembinaan, Pelindungan Bahasa dan Sastra, Serta Peningkatan Fungsi Bahasa Indonesia. Lembaran Negara Republik Indonesia*. No. 157, 2014.
- Peraturan Menteri Pendidikan Republik Indonesia Nomor 70 Tahun 2016 tentang Standar Kemahiran Berbahasa Indonesia. Berita Negara Republik Indonesia*. No.1966, 2016.
- Peraturan Menteri Pendidikan Republik Indonesia Nomor 42 Tahun 2018 tentang Kebijakan Nasional Kebahasaan dan Kesastraan. Berita Negara Republik Indonesia*. No.1696, 2018.
- Peraturan Presiden Republik Indonesia Nomor 63 Tahun 2019 tentang Penggunaan Bahasa Indonesia. Lembaran Negara Republik Indonesia*. No 180, 2019.
- Iskandarwassid . Sunendar, Dadang. (2008) *Strategi Pembelajaran Bahasa*. Bandung : Rosda Karya.
- Sunendar, Dadang (2010) *Analisis Prosa Fiksi : Kiat Praktis Menganalisis*. Bandung : Rizky.
- Undang-Undang Republik Indonesia Nomor 24 Tahun 2009 tentang Bendera, Bahasa, Dan Lambang Negara, Serta Lagu Kebangsaan. Lembaran Negara Republik Indonesia*. No 109, 2009.

転写された聖者廟空間
ーインドネシア・バリ島におけるイスラム聖者廟ワリピトゥー
**WALI PITU, The Transcribed Shrine-Space:
Pilgrimage to Islamic saint graves in Bali, Indonesia.**

東海林恵子（東海大学大学院博士課程後期）
SHOJI Keiko
(Doctoral course, Tokai University Graduate School)

Abstract

In the Islamic society of Indonesia, the pilgrimage to the Muslim holy shrines and holy tombs is called *Ziarah* and has been practiced since early 20th century. In particular, the Muslim saints worship in Java has been widely accepted among the population. Especially the graves of *WaliSongo* (nine saints / *Tis'atul Awliya'*), who spread Islam in Indonesia around 15th century, are filled with pilgrims. Even in Bali, where 90% of the population are Hindus, there are seven Islamic saints called *WaliPitu* (seven saints / *Sab'atul Awliya'*) and an increasing number of Muslim pilgrims from Java and other islands has been observed in recent years. This paper clarifies the creation process of Islamic holy places in Bali, where Hindus are the majority, and considers the meaning of the pilgrimage to Islamic saint graves and the related religious tourism as a phenomenon of modern religious practice.

キーワード：バリ、イスラム聖者廟ワリピトゥ、転写、マイノリティー・マジョリティー

1. はじめに

インドネシア・イスラム社会においてムスリム聖廟（聖墓）巡礼はジアラ（ziarah）¹とよばれ古くから実践されてきた。墓の被葬者は14世紀頃、ジャワにイスラムを広めた（またはジャワのイスラム受容に重要な役割をなした）とされる9人のイスラム聖人ワリソング（Wali Songo : Wali=聖人、Songo=9）であり、墓は東部・中部ジャワを中心に9つ点在し、聖地と見なされている。イスラム教が多数派を占めるジャワ島でイスラム聖人崇拜や聖廟巡礼が盛んに行われることは、理解に難しいことではないだろう。しかしヒンドゥー教が約80%を占めるバリ島にも同様に7人のイスラム聖人ワリピトゥ（Wali Pitu : Wali=聖人、Pitu=7、'Saba'tul Awliya'）が存在するということは、あまり知られてはいない。ヒンドゥー教がマジョリティーのバリ島でこのイスラム聖者廟が1992年に「発見」されて以来、ジャワ島を中心に多くのムスリムが巡礼のためバリ島へ訪れるようになった。ワリソングはジャワ系ムスリムにとって誰もが知る、いわば「英雄」といっても過言ではない存在だが、同様にバリ島にも7人のイスラム聖人ワリピトゥが存在し、14世紀頃からバリ島ムスリム社会において重要な役割を果たしてきたのだ。そして彼らの聖廟がバリ島内に7カ所存在する。ただし、このことはバリ島研究者の間でさえもあまり注目はされてこなかった。

ジャワとバリにそれぞれ9つと7つの聖なる地が配置されており、二つの相同の巡礼空間が並

¹ 本稿では、特別な意味を持たせた言葉、用語、民俗語彙は現地語（インドネシア語、バリ語、ジャワ語）を併記した。

置されているように見てとれる。これは偶然ではなく、ジャワのワリソンゴ廟のシステムがいわば縮小されてバリに転写されたと考えられる。転写を行ったのが **Zaen Arfin Assegaf**（以下、アリフィン）というイスラム指導者キアイ (kyai) と彼の弟子たちである。巡礼空間の転写は、アリフィンとその弟子たちによって 2 段階で行われた。そこには、それぞれの段階で転写を可能にしたシナリオが存在した。アリフィンのシナリオを理解するに欠かせないのは、神からの啓示と彼の著作である。弟子たちのシナリオに重要な影響を及ぼしたのは、インドネシアの政治・経済・観光の動向である。これらのシナリオに沿って行われた転写により、バリ島に新たな聖墓巡礼空間“**Makam Wali Pitu Bali**”が「創造」され、発展を続けることになった。

本研究では、ジャワからバリへの巡礼空間の転写がどのように行われ、バリにおいて、いかなる意味をもつか、とりわけムスリムとヒンドゥーの異教徒関係においてどのような意味と機能を持つかを論じた。

2. 社会背景と先行研究概観

世界最大のイスラム人口を有するインドネシア共和国において、バリ島は唯一ヒンドゥー教が多数派を占め、「バリ島民＝ヒンドゥー教徒」と、同義に捉えられることが多い。しかし、実際には古くから、あるいは近年においてもジャワや外島²からムスリムが多く移住し定着してきた。こうしたなか起きた 2002 年、2005 年のジェマ・イスラミア³による爆弾テロ事件は、バリの人々にアイデンティティの再構築を迫るものであった。このテロを契機に、ヒンドゥー社会の中に固有の慣習を重視する風潮が呼び起こされ、「イスラム」に対する意識を刺激するようになった⁴。また、バリ州政府は、少数派ムスリムコミュニティへバリ文化を強制的に取り入れさせるといった介入・操作の動きもみせている⁵。バリ島内のイスラム教を差異化し、それらを統制しようとするバリ社会の近年の動きは多方面へ影響を及ぼし、今後宗教紛争の発端になり得る事案へと発展しないとも限らない。しかし、このような異教徒を排除する動きと並行して真逆ともいえる大きな現象が起きている。それはバリ島にあるイスラム聖者廟参詣の隆盛である。ヒンドゥー系住民には広く知られていないことであるが、バリにあるイスラム聖廟ワリピトゥへ巡礼のため、ジャワ島及び外島から多くのイスラム教徒がバリを訪れるという宗教観光が大きな社会現象となっている。

Slama (2014)は、イスラム聖者崇拜及び聖者巡礼 (ziarah wali) は現代のインドネシア経済・政治・観光が合流した形で現れていて、異教徒間の橋渡しの存在であると述べている。また世界のイスラム社会を見ても、イラク、イラン、エジプトなどのイスラム地域社会において一巡礼・聖者の定義に若干の違いがあるにせよシーア派・スンナ派といった宗派を問わず、イスラム聖

² ジャワ島以外の島々を一括して外島 (other islands) と呼ぶ。

³ 犯行はインドネシア国内のイスラム過激派ジェマ・イスラミア (Jemaah Islamiyah、通称 JI) によるものとされている。

⁴ 例えば、倉沢 (2009: 89) は、実際に両コミュニティ間においてちょっとした小競り合いが時折、生じており緊張関係が持ち込まれつつあると示唆している。

⁵ **Lomba Desa** (共和国政府主催の村落コンテスト) または **Lomba Desa Adat** (州政府主催の慣習村コンテスト) のためにムスリム村にチャンディーブントル (バリヒンドゥーの割れ門) を建てられてしまったという報告もある (スティア 1994:409)。

者崇拜及び聖者巡礼がさかんに行われている。大稔（2018）は、エジプトの広漠たる墓地区「死者の街」におけるムスリムの聖墓参詣について、その慣行から当該期の聖者自体とその奇跡譚・逸話、および参詣書の考察や墓地区のカイロにおける社会的機能など詳細に述べている。エジプトにおける聖者廟の役割または社会における位置づけは、必ずしも宗教的融和の象徴だけではないが、そのように捉えられる部分も多い。

一方、川野（2009、2010、2017）は南インド・ケララにおけるイスラム聖廟、ジャーラム⁶における人々の宗教的実践について分析し、他の宗教との融合という点で南インド・ケララでの特徴を文化人類学的研究で明らかにしている。以上のことから、世界に多数存在するムスリム集住都市において聖者（聖墓）巡礼が実践され、社会における重要性が示されてきたことがわかる。本稿の主題とするイスラム聖者廟ワリピトゥは、当該の地がヒンドゥーマジョリティーでありながらイスラム聖廟が生成したという、一見すると矛盾とも言えるその背景に言及する。また、多文化が共生しているといわれるバリ島において、ワリピトゥの存在は、マイノリティー・マジョリティー関係や民族的・宗教的関係を超越する関係性を示すものとして、バリ社会における両者の関係を考察するうえでは欠かせないものである。

本研究は、まずイスラム世界における聖者崇拜・巡礼と、ジャワにおけるそれについて言及する。次いで、バリにおけるイスラム聖者廟の生成過程と、その機能・役割を明らかにし、現代における宗教実践の現象として聖者巡礼・聖人崇拜、それに起因する宗教と観光の接合がどのようなものであるか検討する。

3. ジャワにおける聖者廟巡礼ーワリソンゴー

3.1. ジャワイスラムにおける巡礼・ジアラー

一般的にみて、イスラム世界における巡礼、または宗教実践としての参詣とは、メッカへの巡礼を対象とする傾向が強かった。ムスリムにとって信仰の根幹である五行六信の五行（信仰告白・礼拝・断食・喜捨・巡礼）のうちの一行に数えられるものである通り、巡礼の位置付けは確固たるものである。しかしながら、歴史的に見てもメッカ巡礼と同様に世界のムスリム社会では、古くから聖者・聖墓・聖廟への巡礼・参詣が実践されてきた。ムスリムが多く住む国や地域には何らかの墓ーそれが聖廟、墓廟、円蓋付墓廟なのかといった形状・呼び名の違いや被葬者が聖人、非聖人であるといった違いがあるにせよーが建てられ多くの人々が身近な墓へ巡礼・参詣を行ってきた。またそれは、アラビア語で墓への巡礼・参詣は一般的にズィヤーラ（ziyārah）と呼ばれ、メッカ大巡礼であるハッジ（haji）とは区別されて実践されていると考えられる。大稔（2018:30-31）は、イスラムにおけるハッジとズィヤーラに類する区分が他の宗教にはみられないことから、この弁別をイスラムの特徴の一つであると述べている。またメッカ巡礼が何らかの理由で叶わぬ者が、その代替としてメッカ巡礼を祖型にしつつ、ローカルな墓へズィヤーラを行ったと指摘している。

ジャワのイスラム社会における聖墓・聖廟巡礼は、インドネシア語でジアラー（ziarah：語源はアラビア語のズィヤーラ ziyārah）と呼ばれ、やはり古くから実践されてきた。他のイスラム世界

⁶ イスラムのスーフィー・聖者や殉職者の墓を指してケララで用いられるアラビア語起源の言葉である（川野2017:3）。

との大きな違いは、ジャワにおける聖者廟（墓）の被葬者が15世紀頃にジャワにおけるイスラムの受容に重要な役割を果たしたとされる9人の聖人たちということである。彼らはワリソンゴと呼ばれ、インドネシア人であれば誰もが知る存在であり、ジャワでは、現在も崇拝の対象とされている聖人である。彼らの墓は、聖者ワリソンゴの墓（Makam Wali Songa）として呼ばれ東ジャワ・中部ジャワを中心に点在し（図1）、また聖地とみなされ巡礼者で溢れている。

聖者廟巡礼・聖者崇拝は、新秩序体制（orde baru）とよばれるスハルト政権時代（1968～1998年）に基盤が作られたとされているが（Slama 2014）、それ以前からもインドネシアの人々にとっては墓参詣が身近にあった。一般にラマダン（断食月）入りの前には親族の墓参りが慣習となっているからだ。1999年にアブドゥル・ラフマン・ワヒドが大統領に就任したあと、それまでの単なる墓への参詣であったものが聖者廟巡礼として拡大し、新たな現象として確立されていくこととなる。ワヒドは大統領期間中、幾度となくワリソンゴ廟への巡礼を繰り返し、自らこれは政治活動ではなくイスラムの実践だと主張し、国民からは「生きた人間（国民）より死者（聖者）と対話する時間のほうが多い」と揶揄されたほどであったという（Slama 2014）。国家権威者による聖者廟への巡礼により、イスラムとして問題のないものとして正当性を与えたと考えられる。その後、国家権力者から庶民まで巡礼者が幅広く拡大していった。

近年では特にマウリッド月（ムハンマド生誕月）やムハッラム月（4つの神聖な月のうちの1つ）などのヒジュラ暦の祝祭日の際に巡礼者が急増するという。あまりの混雑のため、参拝時間を「6分間まで」と制限されている聖者廟もあるほどだという（Chambert 2002）。インフラの改善とともに巡礼者は増加し、成長を続けている。現在では、人々は村でバスを貸し切り、聖廟へジアラールを行うのが一般的である。このことに対しChambert（2002）やFox（2002）は、新しい形状の集団移動として注目している。つまり、ジアラール実践に多くのジャワ人が日常的に関わるようになり、自分の村でさえ、出たことの無かった村人たちが、ガイドを伴い巡礼・参拝のため聖者廟へと向かう、または移動することになったという事実は、現代インドネシアを語る上で欠かせないものといえよう。

また、インドネシア最大のイスラム組織であるナフダトゥール・ウラマー（Nahdlatul Ulama, NU）が、これらのジアラール実践を後押ししている⁷、ということも人々が巡礼に向かっていったという大きな要因をなしているといえるだろう。とは言うものの、インドネシアに限らず世界に多数存在するムスリム聖墓への参詣・巡礼はスンナ派、シーア派といった宗派を問わず実践されている一方で、すべての学派から避難の対象ともなっている。いわゆるイスラム主義者といわれる学識者は聖者巡礼および聖人崇拝をイスラムからの逸脱行為ビドア（bid'a）、または偶像崇拝・多神教シルク（shirk）だとして強い批判の色を示している。同様にインドネシアにおいてもワリソンゴ崇拝や聖廟巡礼について、国内規模第二位のイスラム組織ムハマディヤー（Muhammadiyah）の中からも一神教の教義（tauhid）を重視する立場からジアラール実践を違法なものとして非難が沸き起こるに至った。しかしながらインドネシア国内において、暴力における聖廟への攻撃は一切行われてこなかったことには注目してよい。

⁷ Slama（2014：114）によると、NUによってワリソンゴ巡礼ツアーがしばしば企画されていたという。

3.2. 聖廟ワリソングへの巡礼

ジャワのイスラム受容に重要な役割をなした聖人ワリソングは、一般的に以下の9人が示されている⁸。Maulana Malik Ibrahim (Sunan Gresik)、Raden Rahmat (Sunan Ampel)、Raden Makhdum (Sunan Bonang)、Raden Qasim (Sunan Drajat)、Ja'far Shadiq (Sunan Kudus)、Raden Paku (Sunan Giri)、Raden Sahid (Sunan Kalijaga)、Raden Umar Said (Sunan Muria)、Syarif Hidayatullah (Sunan Gunung Jati) (括弧内は称号)。彼らはジャワ伝統芸能や慣習 (adat) の要素を取り入れながらイスラムを広めたとされる。そのためジャワの人々がイスラム教を受け入れやすかったとも言われている。(彼らの伝記的物語は本稿の内容とは外れるため省略する)。彼らの活躍は15世紀頃とされているが、時を経た現代においても、ジャワにおいては、イスラム学校は言うまでもなく、公立学校においても授業内に導入されている。またテレビドラマ化されている、などということからも、ジャワムスリムにとって生きた歴史となっている。彼らをジャワの歴史と社会を作った重要な人物として人々は記憶しているのだ。

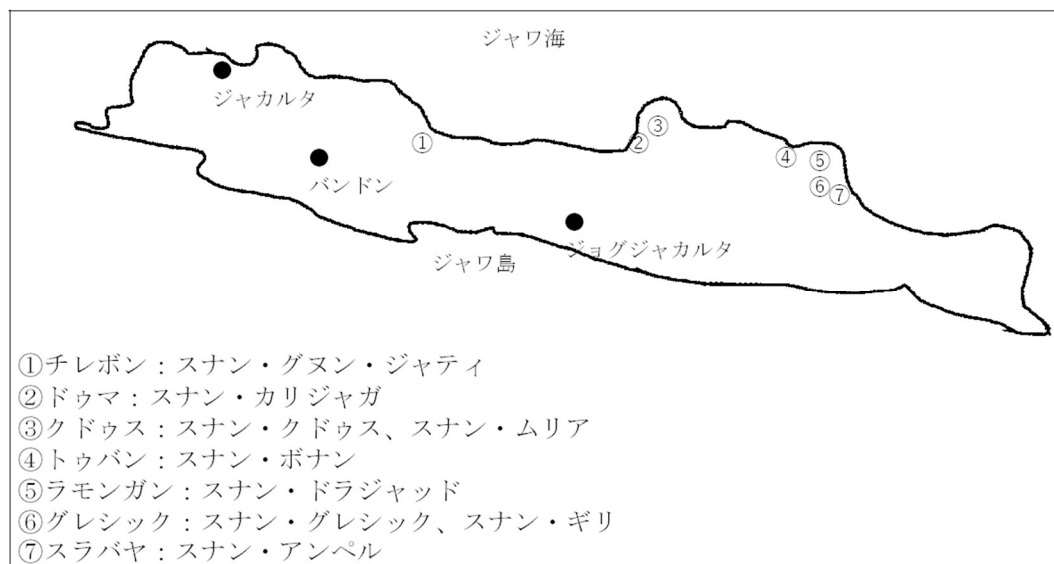


図 1. ワリソング廟のロケーション

ワリソング廟への巡礼・参詣は年々、増加傾向にある。聖墓の周辺は駐車場、食堂、簡易宿泊施設、シャワールーム、土産店などが軒を連ね、門前町の様相を呈し、レジャー化が進んでいる。このような発展は、巡礼者数から明確に見ることができる。2014年ワリソング廟全体で1,220万人の巡礼者が訪れている。そのうちの3,000人は外国人であるという (agr 2018)⁹。一番多くの巡

⁸ジャワ国縁記 “*Babad Tanah Jawi*” にもとづき上記の9人の聖人が一般にワリソングであるとされている (今永 1987:2-3、弘末 2013:228-229)。しかし誰をワリソングに含めるかに関して情報に一貫性がなく、史料によっては9人以上の聖者がワリソングとしているものもあるということから、実際に何人いたか、誰がワリソングであるかということよりも「9聖人」と名付けることのほうが重要であったのではないかという指摘もある (新井 2011:162-166)。

⁹ “Bulan Ramadan Waktu Tepat Wisata Ziarah Walisongo,” CNN Indonesia, 17 Mei 2018.

<https://www.cnnindonesia.com/gaya-hidup/20180517125745-269-298934/bulan-ramadan-waktu-tepat-wisata-ziarah->

礼者が訪れた聖廟は、スラバヤにあるスナン・アンペル (Raden Rahmat) 廟で約 190 万人、次いでドゥマツにあるスナン・カリジャガ (Raden Sahid) で 160 万人である。またこれらワリソング廟全体における経済効果は 2014 年だけで 3.6 兆ルピアに達したと推定されている (agr 2018) ¹⁰。聖者廟巡礼は、単にイスラムとしての宗教的な精神性を高めるだけでなく、聖地での文化的経験と伝統を獲得できる観光的要素をも備えたものと理解されはじめ、巡礼者が増加する要因をなしていると考えられる。ワリソング廟への巡礼が、多くのジャワムスリムにとって宗教的、社会的、政治的生活の一側面となり、日常的に行われている事が数字からも読み取れる。

4. バリ島におけるイスラム聖者廟ワリピトゥの歴史—転写のシナリオを中心に—

4.1. ワリピトゥの「発見」

上記のとおり、ジャワムスリムにとってワリソングは現在でも崇敬される存在である事が分かる。同様にバリにも 7 人のイスラム聖人が存在し、彼らの墓がバリ島内に 7 カ所存在する。ジャワとバリにそれぞれ 9 つと 7 つの聖なる地が配置されており、2 つの相同の巡礼空間が並置されているように見て取れる。このことからバリのワリピトゥ廟はジャワのワリソング廟と強い連関をもつことは想像に難くない。これは偶然そうだったのではなく、ジャワのワリソング廟のシステムがいわば縮小されてバリに転写されたと考えられる。このことは単なる比喩ではない。以下で見る通り、実際に東ジャワ・シドアルジョ出身のイスラム指導者であるアリフィンと、彼の弟子たちがその転写をおこなったのである。

いつ、どのようにバリで聖者廟が発見されたのか。そのプロセスは 1992 年 (ヒジュラ暦 1412 年) にアリフィンが夢による啓示¹¹を受けたことから始まる。

アリフィンの著書 *Sejarah Wujudnya Makam Sab'atul Aulia WALI PITU di BALI* (バリにおける 7 聖人 Sab'atul Aulia の出現の歴史) (2012:26-27) によると、1992 年 (ヒジュラ暦 1412 年、ムハッラム月 Muharram)、アリフィンは *metafisika eksakta*¹² と呼ばれる手法で深い瞑想状態に入り、夢を呼び起こしたところ、ムハンマドに対する啓示のような「神の声」がジャワ語で微か (静か) に聞こえてきたという。その啓示は段階的にアリフィンに伝えられ、以下の 4 つのメッセージで示された。

第一の啓示

“Wis kaporo nyoto ing telatah Bali iku kawengku dening pitu piro-piro Wali. Cubo wujudno.”

バリに 7 人の聖人が存在することは明白である。目に見える形で表せ。(拙訳。以下同様)

walisongo (最終閲覧 2020 年 3 月 20 日)

¹⁰ 同上

¹¹ 古代のアラブ地域における聖廟の発見にはこのような夢による「お告げ」からなされるものは一般的である。「夢」に出現する聖なる人 (主にムハンマド) の発言は大変意味を持つものであり、「夢」が大きな役割をなしていた。これにより発見された墓は一般に夢聖廟 と呼ばれる。世界に点在する聖廟はこれ以外に頭聖廟 (頭骨の発見)、聖遺物廟 (御物の発見) などの種類がある (大稔 2018:92-100)。

¹² 深い瞑想状態に入る *metafisika eksakta* の他、聖廟の探索に *petunjuk bathiniya* と呼ばれるインスピレーションも使用したとしている。

第二の啓示

“Ono sawijining pepundhen dumunung ono ing telatah susunaning siti sasandingan pamujaan agung kang manggon sak duwuring tirta kang kadarbeni dining suwitaning pandita ojo sumelang.”

水を見下ろす大きなヒンドゥー教寺院のそばにある高台に聖地がある。そこでヒンドゥー教司祭がこの場所を管理している。躊躇するな。

第三の啓示

“Waspadakno pitu iku kaperang dadi papat.”

この7聖人は4つのかたまりに分かれていることに注意せよ。

第四の啓示

“Pitu kaperang dadi papat iku pangertene, kapisan wis kaparo nyoto, kapindo istijrot wujude kembar, kaping telu wis lair ning durung wujud, kaping papat, liyo bangso.”

7人を4つの手段（かたまり）に分ける。一つ目はすでに明らかになっている。二つ目は双子の墓がある奇跡的な場所である。三つ目は、彼は生まれてはいるが墓は現れていない。四つ目は、他国の者である。

上記の啓示内容について現地調査で行ったジュルクンチ (Juru Kunci) と呼ばれる墓の世話人（墓守）へのインタビューデータをもとに以下に考察する。

第一の啓示で、「バリに聖人が存在することは確かであるから、それを目に見える形にせよ」とは、墓として具現化せよ (*wujudno/wujudkan*) ということであろう。次に第二の啓示では墓の具体的な場所を示している。その墓は水際にある偉大なヒンドゥー寺院にあり、その司祭がジュルクンチとして存在していることを示している。この墓は1992年に最初に発見された Ratu Mas Sepuh¹³の墓のことを示している。第三の啓示では、7つの墓が4つの地域に区分されていることが示唆されている。第四の啓示では探索の方法を示している。一つ目（の墓）とは前述した Ratu Mas Sepuh の墓を指し、二つ目（の墓）とは、カラングッサム県の双子の聖人 Habibi Ali Abu Bakar Al Hamid と Sye Maliana Yubuf Al Baghdn Al Maghiribu の墓を示している。三つ目（の墓）とは、Sayid Ali Bin Umar Bafaqi を指しているが、アリフィンが啓示を受けた1992年当時、この聖人 Sayid

表 1.7 聖人と埋葬地

聖墓名	被葬者（聖者名）	場所
Makam Keramat Pantai Seseh	Syeh Achmad Chamdun Choirussoleh / Pangeran Mas Sepuh	Mengwi
Makam Keramat Bedugul	Chabib Umar Bin Maulama Yusuf Al Maghribi	Tabanan
Makam Keramat Kusamba	Chabib Ali Bin Abu Bakar Bin Umar Bin Agil Al Khamid	Klungkung
Makam Keramat Kembar	Syeh Maluana Yusuf Al Baghdi Al- Maghribi	Karangasem
Makam Keramat Kembar	Chabib Ali Bin Zainul Abidin Al Idrus	Karangasem
Makam Keramat Rupit	Syeh Abdul Qodir Muhammad / The Kwan Lie	Buleleng
Makama Keramata Loloan	Chabib Ali Bin Abu Bakar Bafaqid	Negara

（出典：Alifin（2012）をもとに筆者作成）

¹³ 別名 Syeh Acmad Chamdun Choirussholeh/Raden Amangkuningrat.

Ali Bin Umar Bafaqi はまだ生きる聖者として存在していたため「墓は現れていない」と語られている。その後、1999 年に 117 歳で死去し埋葬された後、アリフィンが墓を発見したと述べている。四つ目（の墓）とは、中国出身の Syeh Abdul Oqdir Muhammad¹⁴の墓を示している。啓示では 5 人の聖墓のみに言及しているが、実際には 1992 年に最初の墓を発見したあと、アリフィンは 1999 年までに 7 つの墓を発見したのである。

4.2. ワリピトゥの「開発」と「創造」

1999 年に最後の墓が発見され、それ以降、巡礼地として成功して、発展を続けることになるのだが、そこには 2 つのシナリオが存在する。それは、アリフィンがおこなったワリソングの宗教的空間をワリピトゥへと転写するシナリオと、アリフィンの死後、彼の弟子たちが行った観光的空間の転写のシナリオである。まずはアリフィンのシナリオから述べていく。

アリフィンは「後にワリソング巡礼者はワリピトゥにも興味を持つことになると考えた」(Alifin 2001:58) と述べている。つまり、彼はワリソング巡礼をモデルにしてワリピトゥ探索をしていたと解釈できる。なぜなら、1992 年にワリピトゥを探索し始めたとき、前述したとおり、ワリソング巡礼はすでに正当性をもつ確立した存在となり、聖地および聖廟として成功¹⁵していた。そのため、その巡礼空間をワリピトゥに関連付けながら配置することで、ワリピトゥもまた、正当的なものとして確実になると考えていたと思われる。加えて、アリフィンはワリピトゥを「発見」という言葉で表現しているが、同時にそれは「創造」でもあった。Barth (1993 : 178-179) は、ワリソングの子孫や弟子たちが改宗のため北部バリにいたという歴史や、その伝承について言及している。したがって、ワリピトゥが発見される前からバリにはイスラム聖人ワリが存在したことになる。しかし当時、バリの聖人はまだワリソングのような崇拜対象として形作られてはいなかった。それをアリフィンがワリピトゥとして組織化したと考えられるのである。つまり彼は、意図的に系譜を結びつけて、ワリソングとワリピトゥ 2 つの聖地の関連性を強調し、ワリピトゥを「創造」したのだ。具体的には、バリの聖人をワリソングの弟子や子孫として系譜を置き換えたり、またはハドラーミサイドであるとしてワリソングに近づけさせた (Slama 2014) という。ハドラーミサイドであるということはワリピトゥにおいて重要な構成要素であり、ワリソングとワリピトゥを関連付けることでワリピトゥの正当性を主張したと言ってよい¹⁶。

ワリソングとワリピトゥは相同関係にある一方で、ワリピトゥだけの特性もある。この特性こそ、バリヒンドゥー社会におけるワリピトゥの存在意義と考えられる重要な要素であろう。それはまず、ヒンドゥー社会にあるという墓のロケーションに見出すことができる。しかし最も大きな特色となるワリソングとの違いは、ワリピトゥの存在が「差異性」へ開かれている、ということだ。つまり寛容性や多様性を示す象徴となっているということである。この点は、各ワリピトゥ

¹⁴ 中国名 The Kwan Lie。

¹⁵ 大稔 (2018) によると、聖墓・聖者は必ずしも支持されるものとは限らず、発見主体がいがわしいものや、墓主（被葬者）の匿名性を理由に宗教的価値へ接続できなかった場合などは聖墓・聖者の創出は失敗に終わるといふ。夢に出てきたから聖墓だと主張しても聖者を特定し、そこに「物語」が展開されなければ聖墓・聖者創出はなされない。

¹⁶ 聖人たちの歴史的逸話はアリフィンの著作と、現地での伝承では差異があるのだが、そのことは別稿で言及したい。

廟において、様々な形で確認することができる。以下に具体的な事例をいくつか紹介したい。

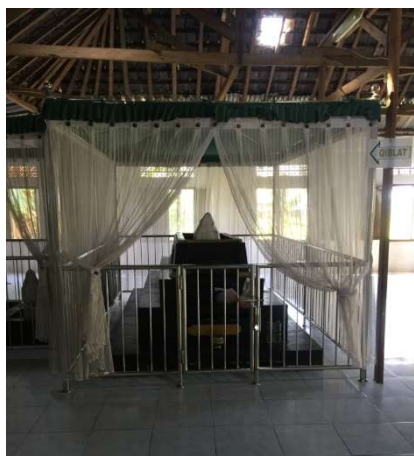


図 2 クワン・リーの墓 (遠景)
(筆者撮影)



図 3. クワン・リーの墓 (近景)
(筆者撮影)



図 4. ヒンドゥー寺院の割れ門の入口
(筆者撮影)



図 5. 墓とジュールクンチの司祭
(筆者撮影)



図 6. 墓名表示 (筆者撮影)



図 7. ポスターに描かれた 7 聖人と 2 つの聖地
(モスクとヒンドゥー寺院) (筆者撮影)

4.2.1. The Kwan Lie (Syeh Abdul Oqdir Muhammad)の墓 (墓名 : Makam Keramat Rupit)

中国出身である聖人クワン・リーは北部バリにおいてバリ人ムスリムだけでなくヒンドゥー教徒にも支持をされていた人物とされている。そのためムスリム以外にもヒンドゥーの巡礼者も多い。加えて仏教徒の中華系インドネシア人やシンガポールなどからも多くの巡礼者が訪れている。そのため墓前には香炉が備えられている (図 3)。墓は中国とイスラムの融合形態となっている。また以前は、墓の入り口にはイスラム世界における一般的な挨拶であるアッサラーム・アライクム (assalamu 'alaikum) と、バリ語で出迎えの言葉であるラハジェン・ラウ (rahajeng rawuh) と書かれたポスターが貼られて巡礼者を出迎えていたという。(現在は新しく作り替えられ立派な看板に変わっている)。

4.2.2. Syeh Acmad Chamdun Choirussholeh の墓 (墓名 : Makam Keramat Pantai Seseh)

墓はヒンドゥー寺院の中にあり、ジュルクンチ¹⁷はヒンドゥー司祭 (pemangku) である。墓の前にはヒンドゥーの神の世界と人間界を分けているとされる、割れ門 (candi bentar) がある (図 4)。建物もヒンドゥー様式で作られている。

注意深く墓を見てみると様々な形でイスラムとヒンドゥーの同居が見られる。まず、墓廟の後部にはヒンドゥー儀礼で使用される祭具の傘、テドオン (Tedung) が置かれている。テドオンは、ヒンドゥーの儀礼において使用され神を降臨させるものの象徴であり通常、赤がブラフマ神、黒がヴィシヌ神、白と黄色がシヴァ神を意味する。しかしここではイスラムの聖なる色である緑色で作られている。またヒンドゥー男性が儀礼の際に身につける頭飾り (udeng) が墓の中で聖人が横たわっている頭部 (墓石の頭部) に着けられている (図 5)。

また、墓前にある墓廟名の表示は「Pura Keramat」と書かれている (図 6)。Pura はヒンドゥー寺院、Keramat は聖なる地を意味し、転じてイスラムの墓という意味になる。直訳するならば「イスラム聖者の墓のヒンドゥー寺院」である。先述した傘 (テドゥン) や頭飾り (ウダン) は象徴的なもので両宗教の同居、「PuraKeramat」の墓名表示は言語的に両宗教の空間的共生を示している。これらは、象徴的なものと言語的なもの、両方で同一の思想を表現している。

4.2.2. それ以外のすべての墓

すべてのワリピトゥ廟で7聖人が描かれたポスターが貼られている (図 7)。そのポスターには聖人の背後にモスクとヒンドゥー寺院の割れ門チャンディーブンタルの両方が描かれていることに注目したい。このことは、イスラムの聖域であるモスクと、ヒンドゥーの聖域である寺院のふたつの役割をなしていることの強調である

4.3. バリ社会におけるワリピトゥの役割

以上のことからムスリム側は異教徒を受け入れ、特にバリヒンドゥーに対し融和的姿勢を取っていることが分かる。また、そのことを巡礼者にも提示している。聖地には様々な地域から巡礼者が集まる。ムスリムにとって聖地 (巡礼地) とは、イスラム教が広く信奉されているものとする機能を持っているといっていよう。特にワリピトゥはこの事に加え、多様な地域からジヤ

¹⁷ 全6カ所の墓のうち、5カ所は古くからバリに移住した人ムスリムがジュルクンチをしている。上記 (Syeh Acmad Chamdun Choirussholeh) の墓のみヒンズー教のバリ人司祭がジュルクンチをしている。

ラーに來たインドネシア人に、異なる宗教が共存・融和関係にあることを主張する役割をなしているのだ。

2002 年、2005 年のバリにおける爆弾テロ事件後、バリ社会は排他的な風潮が強まり、バリ文化を保持しよう、「本来」のバリらしさを取り戻そう、というバリアイデンティティの主張が高まっている。その現れとして、例えば奉納舞踊ルジャン（Tari Rejang）などのバリ古典舞踊の復興・再編成¹⁸や、儀礼で寺院に入る際の正装の見直し、またはバリの伝統保持を主張するアジェッグ・バリ（Ajeg Bali）¹⁹にもそれを見ることができる。しかし、ワリピトゥ廟がヒンドゥーと同居している事実は宗教間の融和を主張したいムスリム側にその根拠を与えている。

神の啓示によりアリフィン（Arief Rahman）はワリピトゥ廟をバリで探しだし、ワリソンゴ廟のシステムをバリに転写した。両者の間には強い関連性や相同性があるが、ジャワとバリのそれはイスラムの実践において相反する点も存在する。アリフィンはなぜ異教徒が多数派を占める地にワリソンゴを転写しようとしたのだろうか。もっとも明確な動機は神の啓示を受けたからであり、したがってそれはアリフィン自身の意思ではなかった。それは絶対的な命令であり、アリフィンはすでにそこに存在するものを「発見」すればよいだけだった。しかし、その背後にはアリフィン自身の意思が働いていた。つまり、ワリソンゴをモデルとしたワリピトゥを「創造」し、それをヒンドゥー社会に配置することで、イスラムの敬虔さへと一極化しない適度な方法でイスラムを表現し、イスラムの寛容を象徴するものを平和的な方法で創り出したかったと言えるのではないか。なぜなら、アリフィンは著作で次の言葉を用いて、ひとつの章の見出しとしている。*”Toleransi dan akulturasi Islam di Bali”*（2012:22-24.）（バリにおけるイスラムの寛容と文化変容）。その大要は「バリ島のイスラム教徒は、バリ人と常に団結し協力し、そして敬意を払って生活している。我々は多数派コミュニティの中で寛容である」という主張である。その中でアリフィンは、バンリ県にある Pura Langgar²⁰という寺院（pura=ヒンドゥー寺院、Langgar=イスラムの礼拝所）にも言及している。ここはワリピトゥ廟ではないが、ヒンドゥーの儀礼とイスラムの礼拝が同一の空間で行われる場所であり、アリフィンは両宗教の融和を語る上でこの寺院を、イスラムの寛容と文化変容の美しさをまさに象徴している場所として、ワリピトゥとの類似性を詳述している。アリフィンはイスラムの寛容性やヒンドゥーとの融和を「美しいもの」と述べていることは注目したい。

直接、啓示を受けたアリフィンのワリソンゴ転写は以上のような目的をもった創造であり、それは宗教的試みといってよいだろう。しかし転写はこれで完結したのではなく、アリフィンの死後（2001 年）、ワリピトゥ廟は政治・経済、観光といった社会的な文脈に取り込まれることで変容されていくこととなる。ここから、弟子たちによるワリソンゴの転写のシナリオが始まる。以下に弟子たちによるシナリオを述べる。

弟子たちはアリフィンの死後、アリフィンの財団 Al-JAMALI（財団の名前の由来は所属メンバーの出身地である Jawa・Madura・Bali からそれぞれの文字を取ったもの）をバリとジャワに設立し、

¹⁸ 様々な種類のあるルジャンだが（Rejang）、ルジャンレンテン（Rejang Renteng）として再編成され、以降バリ各地で奉納舞踊として踊られるようになった。

¹⁹ バリの伝統保持を主張する運動であったがテロ事件後はバリのセキュリティを高めるためにジャワや他島から来るインドネシア人を統制するかのような運動へと変わってきている。

²⁰ ヒンドゥーの寺院としては、シヴァ神を祀るプラ・ダラム（Pura Dalam：死者の寺）である。両宗教の儀礼・祝日などが日程的に重なった場合はヒンドゥー・イスラム合同で行う。

ワリピトゥ巡礼をプロモートしていった。それは、ワリソングの観光的空間の転写と、宗教実践を包含する観光を新たに「創造」をしたことである。そこには、政府が導入した宗教観光、ウィサタレリジー (Wisata Religi) というコンセプトが大きく影響していると考えられる。Slama (2012) によると、2006 年、聖者巡礼に市場価値を見出した観光省はプロジェクトを立ち上げ、インフラなどの調整を行った。そして宗教実践を伴う観光として宗教観光ウィサタレリジーを公式的なものとして導入したという。そこで観光の意味合いをも含むジアラは、イスラムの精神的な宗教実践として位置付けられ、合理的に市場化されたと考えられる。つまり、政府によるウィサタレリジーの推進により、宗教実践の側面も持ちながらも観光・レジャーという側面をもったジアラは新たな宗教的实践として形を表すこととなったのである。

2000 年代、Al-JAMALI 財団は「ジアラの新しい姿、“ワリピトゥ”」(Fenomena baru ziarah Wali Pitu) としてジャワや外島へプロモーション活動をし、ワリピトゥの開発を続けている。観光と宗教を接合させることでヒンドゥーの島であるバリ島への宗教実践的観光を促進したのだ。この時、すでにジャワではワリソング巡礼が経済的市場価値を見出しており、バリのワリピトゥでもそれにならう形でモデル化された。聖廟前には、バリの名産品 (果物や郷土料理、銀細工) やバリの民間伝承薬ジャムウ (jamu)、聖人・巡礼関連グッズ (聖人のポスターや缶バッジ、T シャツ、DVD など) を販売したり、巡礼者専用の宿舎を安価で用意し、ジャワや外島から来た巡礼者を単なる巡礼者としてだけでなく、国内観光客としてもてなしている。ワリピトゥ巡礼とワリソング巡礼との違いは一それがワリピトゥ巡礼のおおきな特徴でもあるが、巡礼とビーチリゾートや、南部繁華街のクタ市内観光などがセットになったものが商品化されておりレジャーの感覚が強く押し出されている点である。また、ジャワや外島のムスリムはバリを「海外のお客様」の観光地と捉えることも多い。イスラムにとってヒンドゥーのバリは非日常的な場所であり、礼拝所の確保に心配する場合もある。しかしそのような心配もなく、聖者との対話 (巡礼) で低予算でムスリム世界とは違う景色をみることができるとは魅力的であろう。国際的観光地であるバリ島へジャワや外島のインドネシア人が宗教的、金銭的な問題を解決し、国内のムスリムがヒンドゥーの島に足を踏み入れられるようになった。以上が弟子たちによるワリピトゥ「創造」「転写」のシナリオである。

また、ワリピトゥ廟が成功した要因のもう 1 つの理由に、アリフィンの出自が関係していると考えられる。ワリピトゥを正当なものと機能させ、発展させるためにはワリピトゥを発見した人物の出自は重要であったため、Al-JAMALI 財団は、アリフィンをムハンマドの子孫サイドであるとして、特別な意味を持つ人物に創り上げた。2006 年、財団は彼の名前を Toyib Zean Arifin から Habib Toyib Zean Arifin Assegaf に改名し、神格化したのである²¹。聖人ではないアリフィンの墓もジアラの 1 つとして多くの巡礼者が訪れている。

5. おわりに

アリフィンはワリソングの「宗教的空間」をバリに転写した。アリフィンの死後、弟子たちはワリソングの「観光的空間」を転写した。これがジャワからバリへ巡礼空間の転写・創造を実現

²¹ しかし、アリフィンの著作において本人は自らの系譜には言及していない。また、アリフィンの死後、彼の著作は第 4 版まで発行されており、弟子たちによる加筆・修正が加えられている。しかし内容に関しては本稿の趣旨と外れるため本稿では言及しない。

させた2つの筋道である。本稿ではこの道筋を「シナリオ」と表現し、2つの視点からの言及をした。これらのシナリオに沿った転写により、ヒンドゥー・マジョリティーの地にイスラム聖者廟・巡礼空間が新たに「創造」されたということである。純粋な宗教実践の場でしかなかったものに、市場原理が大きな力を持って入り込み、宗教的意味をも持つ商品へと創造・転換されたのだ。宗教実践であるということと同時にレジャー（観光）であることは現代の文化において強力なファクターである。

宗教的要求と、レジャー的要求の2つが同時に満たされるバリのこの聖墓巡礼空間“Makam Wali Pitu Bali”は、現代インドネシアにおいて、新たなムスリムツーリズム、ハラルツーリズムの発展に大きな貢献をしようだろう。

これまでバリ島におけるヒンドゥー・イスラム関係は調和的（融和的）共存関係にあると考えられてきた。本稿の主題とするイスラム聖者廟ワリピトゥの検討を通じて、その「共存」とはマイノリティであるムスリム側のヒンドゥー社会への融合の努力、あるいは文化変容を通して実現されてきた、ということが明らかになった。バリムスリム自らもバリ社会の一員であることを主張し、バリ社会への歩み寄りをしている点は、ワリピトゥ廟、およびワリピトゥ巡礼からみてとれる。

加えてワリピトゥが果たす異宗教間における融和的關係は、墓のロケーションにあるとワリソングの弟子の子孫、またはジュルクンチたちは言う。例えば墓はヒンドゥー教徒だけで構成されている村や、イスラム・ヒンドゥー混合村に見出されている。ワリピトゥ全7か所の内2か所だけがムスリム居住区にあり、それ以外はバリ社会との関りをもって運営されている。これらことは、マジョリティーであるバリヒンドゥーと共存している事実の根拠となるであろう。またこのことは、国内で進むイスラム化に対し、バリ社会でワリピトゥが受け入れられているという事実を巡礼に訪れたジャワ及び外島のイスラム教徒へのアピールする機能も持つだろう。近年、インドネシアでは、社会全体の宗教的保守化が進み、社会の不寛容化をどのように止められるかが注目されている。現在のところ、ワリソング巡礼にくらべ、ワリピトゥ巡礼はまだ規模が小さい。しかし今後、ワリピトゥ巡礼がますます拡大した場合、寛容と多様性を表現するものとして急進派イスラムに対して対抗的な力を持ちうるものになるのか、または、反対にバリ社会から見れば、聖者廟巡礼の拡大はイスラムの拡大であるとして警戒するものと捉え、バリアイデンティティをさらに高めることになるのか、これらの点に関しては今後の課題としたい。

参考文献

- 新井和広（2011）「東南アジアにイスラムをもたらしたのは誰か？—ワリソングの起源をめぐる問題とアラブ系住民—」永原陽子編『生まれる歴史・創られる歴史』153-179、刀水書房。
- 今永清二（1987）「ジャワのイスラム化に関する一試論」『史学研究』177: 1-26.
- 大稔哲也（2018）『エジプト死者の街と聖墓参詣』山川出版社。
- 川野美砂子（2009）「南インド・ケララにおける宗教的多元性 —マーピラ・ムスリムの聖者信仰を中心として—」『東海大学総合教育センター紀要』29: 59-86.
- （2010）「集合記憶装置としてのジャーラム（1）—南インド・ケララのイスラム教徒マーピラ聖廟をめぐる宗教的実践—」『東海大学紀要海洋学部 海—自然と文化』8(3): 11-23.
- （2017）「アラビア海を渡ってきたイスラーム —ケララの宗教的調和と対抗的記憶—」

- 『東海大学海洋研究所研究報告』 38: 1-15.
- 倉沢愛子 (2009) 「ヒンドゥーとイスラムの調和的共存」 倉沢愛子、吉原直樹編『変わるバリ・
変わらないバリ』 69-88、誠出版.
- スティア、プトゥ (1994) 『プトゥ・スティアのバリ案内』 鏡味治也・中村潔訳、木犀社.
- 弘末雅士 (2013) 「九聖人 (ワリ・ソング) の聖墓参詣とジャワ世界」 愛媛大学「四国遍路と世
界の巡礼」研究会編『巡礼の歴史と現在』 227-244、岩田書院.
- Arifin, Toyyib Zaen. (2001) *Walipitu di Bali. Sejarah Penelitian Perkembangan dan Pengembangan*.
Denpasar: PPAL-Khoiriyah.
- Arifin, KH Toyyib Zaen. A (2012) *Sejarah Wujudnya Makam Sab'atul Aulia WALI PITU di BALI*,
Denpasar: Yayasan Pesat AL-JAMALI.
- agr (2018) Bulan Ramadan Waktu Tepat Wisata Ziarah Walisongo. *CNN Indonesia*, 17 Mei 2018.
[https://www.cnnindonesia.com/gaya-hidup/20180517125745-269-298934/bulan-ramadan-waktu-
tepat-wisata-ziarah-walisongo](https://www.cnnindonesia.com/gaya-hidup/20180517125745-269-298934/bulan-ramadan-waktu-tepat-wisata-ziarah-walisongo) [2019 年 10 月 15 日アクセス].
- Barth, Fredrik. (1993) *Balinese Worlds*. Chicago: The University of Chicago Press
- Chambert-Loir, Henri. (2002) Saints and Ancestors: the cult of Muslim saints in Java. In: Henri Chambert-
Loir and Anthony Reid (eds.) *The potent Dead: Ancestors, Saints and Heroes in Contemporary
Indonesia*, 132-141. Crows Nest: Allen & Unwin.
- Fox, James J. (2002) Interpreting the Historical Significance of Tombs and Chronicles in Contemporary
Jawa. In: Henri Chambert-Loir and Anthony Reid (eds.) *The potent Dead: Ancestors, Saints and
Heroes in Contemporary Indonesia*, 160-172. Crows Nest: Allen & Unwin.
- Quinn, George. (2019) *Bandit Saints of Jawa*. Burough on the Hill, UK: Monsoon Books.
- Slama, Martin. (2014) From Wali Songo to Wali Pitu: The Travelling of Islamic Saint Veneration to Bali. In:
Brigitta Hauser-Schaubin and David D. Harnish (eds.) *Between Harmony and
Discrimination: Negotiating Religious Identities within Majority-Minority Relationships in Bali and
Lombok*, 112-143. Leoden : Brill.

古ジャワ文学における『ガトートカチャーシュラヤ・カカウイン
(Ghaṭotkacāśraya Kakawin)』に関する一考察
Suatu Pengkajian mengenai Kakawin Ghaṭotkacāśraya
dalam Sastra Jawa Kuno

上石景子（南山大学大学院博士後期課程）
KAMIISHI Keiko (Doctoral course, Universitas Nanzan)

Abstrak

Kakawin Ghaṭotkacāśraya adalah suatu teks berupa puisi di dalam sastra Jawa kuno yang dikarang oleh pujangga Mpu Panuluh di paruh kedua abad kedua belas. Pada penelitian ini, saya membaca transliterasi dan terjemahan versi S. Robson, kemudian saya mencoba untuk menafsirkan deskripsi perasaan para tokoh yang muncul. Di dalam kisahnya, pencarian dan kerinduan akan keindahan digambarkan secara nyata melalui percintaan para tokoh. Namun, pada akhirnya saya berpendapat bahwa perasaan para tokoh itu berubah, menjadi suatu kondisi mental yang ambivalen.

はじめに

『ガトートカチャーシュラヤ・カカウイン』(*Ghaṭotkacāśraya Kakawin*、以下 GK) とは、インドの二代叙事詩の 1 つであるマハーバーラタの物語から着想を得た古ジャワ文学テキストであり、カカウインで書かれている¹。カカウインとは、古代ジャワの代表的な文学テキストのジャンルのひとつで、サンスクリット文学の韻律を用いて古ジャワ語で表現された韻文の形式を指す。『ラーマーヤナ・カカウイン』(*Rāmāyaṇa Kakawin*)、『バーラタユッダ・カカウイン』(*Bhāratayuddha Kakawin*) などの有名なテキストの属するカカウインは、古ジャワ文学の代表的なジャンルといえるだろう。また、ここでの古ジャワ文学テキストとは、最古の古ジャワ文学テキストである『ラーマーヤナ・カカウイン』が書かれたと推測される 10 世紀頃から、マジャパヒト王国が衰退していく 15 世紀頃までの間に、主に宮廷での文学活動において生み出された古ジャワ語によるテキストのことを指している。

GK の成立年代は、12 世紀後半とされている。他の古ジャワ文学テキストとともに、イスラーム化以前にインド文明を受容してジャワ独自の形で発展させた「ヒンドゥー・ジャワ」文化の中で生み出されたテキストであり、作者はクディリ王国時代の宮廷詩人ムプ²・パヌルであるとされている (Robson 2016: 1) ³。

¹ 本論では、特定のテキストは二重括弧(英字の場合には斜体)で示し、ラーマーヤナやマハーバーラタのように、口承・文学を問わず複数のテキストにより語り継がれてきた物語群についてはそのまま記載することとする。

² ムプとは、宮廷詩人の名前の前につけられる敬称である。

³ 929 年頃に王位に就いたシンドク王の治世期以降の約 300 年間をクディリ王国時代(広義のクディリ王国)と呼ぶことが多いが、ここでのクディリ王国とは、1019 年から始まったアイルランガ王の治世期から 1222 年にシנגサリ王国が台頭するまでの王国、つまり狭義のクディリ王国を指す。

古代ジャワにおける文学活動の主な担い手は、文学テキストを創作する宮廷詩人とそれを筆記し保存する宮廷書記であった。宮廷詩人とは、ジャワ語でカウィ (kawi) と呼ばれる人々のことである。古ジャワ文学のテキストの作者である宮廷詩人は、宮廷に住んではいたが、王族や貴族の出身ではなく、彼らは支配者を取りまく役人であり、彼らの多くがおそらく宗教的役割を持っていたものと考えられる (Zoetmulder 1974: 154-7)。そして宮廷詩人によって生み出されたテキストを後代に継承していくために不可欠であったのが宮廷書記である。古代のジャワにおいては文学テキストの多くは、ロンタール (貝葉) という記録媒体に刻まれていた。しかしながらロンタールは、虫食いや風化などの理由で 1 世紀を超える保存には耐えられないため、後代に残していくためには何回も写し続ける必要があり、つまりは写本を作成し続けなければならなかった。この保存の過程で重要な役割を担ったのが宮廷書記だったのである。

また、このように宮廷書記が保存したテキストを一般に利用可能にするためには、文献学者による作業が必要である。まずテキストの写本を収集し、次にそのテキストを文献学的に分析してオリジナルの写本を突きとめ、多くの場合ローマ字へ翻字されたものが刊行される。さらに注釈、あるいはオランダ語、英語、インドネシア語などへ翻訳される場合もある。1 つのテキストに対して、別の学者が異なる翻字や翻訳を行い、新たな改訂版を刊行することもある (Uhlenbeck 1964; Zoetmulder 1974: 51-2)。本論で扱う S. ロブソンによる GK の翻字・英訳本も文献学的研究の成果であるといえる。このように古ジャワ文学は、第一に作者、第二に宮廷書記、第三に文献学者という、複数の手が加えられうるものとして存在しているので、現在我々が利用可能なテキストは、錯綜した複合体であるといえる。このような古ジャワ文学の錯綜性を鑑みると、その創作物は、絶対的な作者が想定される「作品」というよりも、様々な要素が入り組んだ「テキスト」と捉えるのが適切であろう⁴。

古ジャワ文学テキストには様々な人々、つまり作者 (宮廷詩人)、宮廷書記、文献学研究を行う学者が影響を与えているが、テキストの生成に誰がどのような影響を与えたのかという議論はここでは行わない。本論の目的は、GK の S. ロブソン版という特定の文献を扱い、その考察を試みることである。

本論の 1 では、先行研究において議論されている GK の先駆性やそういった要素の起源について取り上げる。2 では作者のムプ・パヌルについて、2.1 においてテキストの属する古韻文期の特徴と宮廷詩人の存在を扱い、2.2 において作者の GK 以外の創作活動として 2 つのテキストを挙げる。3 では、テキストの一考察を行いたい。3.1 ではマハーバーラタの関連付けられた物語の構造とその概要を述べる。3.2 では、ラングーという古ジャワ文学における「美」の観念と、人間の両価性について述べ、結論に代えたい。

1. 先行研究

まずは GK の先行研究について触れておきたい⁵。古ジャワ文学の多くのテキストの概説書を書

⁴ 文学理論において「作品」とは、作者=生産者、読者=消費者という枠組みの中で創造され受容されるものを指し、作者により一度構築された「作品」は変容することのない安定したものとなる。一方で「テキスト」とは、多様な要素により作りだされ、先行・同時代のテキストの照射されたものであり、読者との対話によって変容していく流動的な場を指している (小森 1998: 5-6)。

⁵ ここで取り上げている先行研究は主として英語で書かれたものであり、インドネシア語による著作や研究論文

いたプルボチャロコ、ピジョーは、GK の先駆性を指摘している⁶。その先駆性とは、主人公に護衛や従者として付き添い、道化者や指導者としての役割を果たす召使い、すなわちパナカワンの登場である。ピジョーは、GK はパナカワンのような人物像が登場する初めてのジャワ文学テキストであり、このような登場人物の起源はジャワ土着の神話であると推測し、作者のムプ・パヌルはインド神話の中にジャワの要素を融合させた詩人であると考察している⁷。ピジョーはパナカワンの登場について、テキストが書かれた当時の説話からムプ・パヌルが着想を得たのではないかと推測している (Pigeaud 1967: 184-6)。一方でファン・ステイン・カレンフェルスは当時存在していたワヤンから影響を受けたものと推測している⁸ (Callenfels 1925: 170-1)。さらにウィーリンハは、パナカワンの登場がムプ・パヌルによるものであるという前提に立つ 2 人の説には疑問を呈しており、写本を写した後代の宮廷書記による書き入れの可能性を指摘している (Wieringa 2000: 247)。このように GK は従来、ジャワ土着の要素としてのパナカワンの登場や、その起源に焦点を当てて論じられてきたといえる。

2. 作者ムプ・パヌルについて

2.1. 作者の生きた時代＝古韻文期の特徴

古ジャワ文学の書かれた時代は、古散文期、古韻文期、新期に分けられる (Poerbatjaraka 1952; 崎山 1974: 118; 青山 1986: 4-5)。その時代区分の中で GK は古韻文期に属するテキストである。古韻文期は、1019 年に即位したアイルランガ王の治世期からシンガサリ王国が台頭するまでに書かれたテキストが属する時代であり、狭義のクディリ王国時代に相当する。先の時代と比較すると、古散文期には、『ラーマーヤナ・カカウイン』などを除いてほとんどのテキストが散文であり、また、各テキストの作者の名前や成立年、パトロンである王についての言及が欠けていることが多い。これに対し、古韻文期にはカカウイン、つまり韻文形式のテキストが書かれるようになり、

には現段階で十分にアプローチできていない。

⁶ 古ジャワ文学の概要及び各テキストの要約を書いた人物は 3 名挙げられる。すなわち、プルボチャロコ (Poerbatjaraka 1952)、ピジョー (Pigeaud 1967)、ズットムルダー (Zoetmulder 1974) である。最初の概説書を書いたプルボチャロコはインドネシア人の学者であり、彼はテキストをほぼ時系列に配列し、特に古ジャワ文学史を古散文期、古韻文期、新期の 3 つの時代に区分した (Poerbatjaraka 1952)。オランダ人学者ピジョーは、扱うテキストを著名なテキストのみに限定せず非常に広範なテキストを取り扱い、その多種雑多なテキストの中でも宗教や倫理に関するテキストを最重要視した。ズットムルダーは、ジャワの宮廷詩人や詩の技巧に着目し、概説書の中では作者ごとに章を設け、カカウインなどの韻文を中心に扱っている (Zoetmulder 1974)。

⁷ 同作者の創作した別のテキスト、『ハリワンジャ・カカウイン』 (*Hariwangsa kakawin*) にもまた、マハーバータの原典とは逸脱した要素が見られ、パーンダワ兄弟とクリシュナの戦いという原典には存在しないエピソードが挿入されている。同時代に別の作者により創作された『クリシュナヤーナ・カカウイン』 (*Kṛṣṇayāna kakawin*) は原典に忠実に書かれているという事実を踏まえると、ムプ・パヌルが独創性に富んだ宮廷詩人であったことが推測される。

⁸ 西暦 907 年の日付を持つ刻文には、修道院の所有権を認められた村の式典において、『ビーマ・クマーラ』 (*Bhīma Kumāra*) のワヤンが行われたと記されている (Zoetmulder 1974: 208-9)。この刻文は、10 世紀のジャワにおいてワヤンが存在していたことを示唆している。

また、作者の名前や成立年、パトロンである王の記述が残されるようになる。これは、王を讃える頌詩としての性質がテキストに色濃く表れるようになり、宮廷詩人のパトロンである王の名前とともに、作者や成立年などの情報も明確に記録されるようになったことを示唆している (Pigeaud 1967: 178-9)。

カカウインが王への頌詩として捧げられる古韻文期という時代の中で、GK においてもまた、主人公の良き指導者として登場するクリシュナと、当時の王と考えられるジャヤークリタ王が結びつけられている⁹。GK では当時の王は、ウィシュヌ神がクリシュナに転生して、さらに当時のジャワに人間として生まれた存在であると説明されている。GK の主人公はアビマニュであるにも関わらず、物語の中で最も注目すべき人物はクリシュナであると述べられており、クリシュナの生まれ変わりであるジャヤークリタ王の偉大さが暗示されている。このように GK は古韻文期の時代的特徴をよく反映し、王に対する頌詩としての役割を果たしているといえる。

2.2. 作者の創作活動

ムプ・パヌルは GK を書く前に 2 つのテキストを手掛けている。すなわち、『ハリワンシャ・カカウイン』(以下 HW) と『バーラタユッタ・カカウイン』(以下 BY) の後半部分である。どちらもムプ・パヌルの若年期に書かれたものと推測されている。

HW の主人公はクリシュナであり、彼がルクミニという女性と駆け落ちして結婚する物語である。一方で BY はパーンダワ兄弟とコーラワ兄弟の最終決戦を描いた物語であり、その中では、GK の主人公であるアビマニュと登場人物であるガトートカチャの戦死が語られている。このカカウインは、前半部分をムプ・スダという宮廷詩人が担当し、後半部分をムプ・パヌルが担当するという形で、2 人の宮廷詩人により書かれた作品である¹⁰。

ムプ・パヌルの老年期に、彼による 3 番目のテキストとして書かれた GK は、前作の HW と BY という 2 つのテキストのテーマを引き継いでいると考えられる¹¹。第一に、HW のテーマとの共通点は、いとこどうしの略奪婚を描いているということである。HW では前述のようにクリシュナがいとこのルクミニを略奪するが、GK ではクリシュナの甥であるアビマニュがクリシュナの娘であるクシティ・スンドリーの略奪を試み、クリシュナは彼に理解を示すという展開になっている¹²。HW と GK には、いとこどうしの結婚であり略奪婚であること、そしてクリシュナをめぐ

⁹ 同時代の刻文の記録にジャヤークリタ王という名前は出てこないが、1194 年にクディリ王国に在位したクリタジャヤ王と同一人物ではないかと推測されている (Zoetmulder 1974: 276-8)。

¹⁰ 2 人の宮廷詩人が作者とされているテキストは古ジャワ文学テキストの中で BY のみである。なぜ作者が途中で交代したのかという理由については定かではない。ズットムルダーは、ムプ・パヌルが BY のエピローグにおいてムプ・スダを賛美していることを理由に、ムプ・スダが当時の王の怒りを買って死刑となったというジャワにおける通説を否定している (Zoetmulder 1974: 271)。

¹¹ ズットムルダーは、HW、BY、GK に言及される王の名前から各テキストが書かれた時代を推測し、BY の後半及び HW を書いた人物と、GK を書いた人物が異なる可能性を指摘しているが、最終的にはその可能性を考慮する必要はないと結論づけている (Zoetmulder 1974: 276-8)。

¹² いとこ婚のモチーフは、HW、『クリシュナヤーナ・カカウイン』、『スタソーマ・カカウイン』(Sutasoma Kakawin、別名 *Puruṣādaśānta Kakawin*)、『スマナサーンタカ・カカウイン』(*Sumanasāntaka Kakawin*)といった他の古ジャワ文学テキストにも見られる (Creese 2004: 120-132)。また、アビマニュの父アルジュナと母スバドラーも

る物語展開であるという共通のテーマがある。さらに、ヒロインの態度や侍女の働きといった、より細かい設定においても類似点が見られる。しかしながら、後に述べるように GK では HW と結末が異なるところに新たな創意がある。

第二に BY とも関連が見られる。ムプ・パヌルの創作活動としては、前述したように、まず BY が書かれ、その後に GK が書かれたという順序である。しかしながら、マハーバーラタの物語中においては、GK で語られる内容が起こった後に BY で語られる内容が起こるという構造になっている。すなわち GK は、若年期に BY を手掛け、そのパーンダワ兄弟とコーラワ兄弟の最終決戦、そしてアビマニュやガトートカチャの死という内容を熟知したムプ・パヌルが、老年期に BY の直前に起こる物語を描いたテキストであるといえる。したがって、パーンダワ兄弟とコーラワ兄弟の対立を予期させる内容となっている。

GK におけるパーンダワ派とコーラワ派の対立に関しては、参考資料の相関図を参照されたい。第一に、パーンダワ兄弟の三男アルジュナの息子であるアビマニュと、コーラワ兄弟の長男スョーダナの息子であるラクシャナクマーラの、クシティ・スンドリーをめぐる王子どうしの対立がある。第二に、ドワーラワティー国におけるクリシュナとバラデーワの対立が挙げられる。両者は兄弟でドワーラワティー国を治める 2 人の王であるが、クリシュナがパーンダワ兄弟に信頼を寄せる一方で、バラデーワはコーラワ兄弟のスョーダナと親密な関係を持っており、兄弟間でも意見の食い違いが生じている。第三に、パーンダワ兄弟の次男ビーマの息子であり、アビマニュのいとこにあたるガトートカチャと、ビーマに自らの父を殺されたバジュラダントというラクシャサとの間の対立が挙げられる。バジュラダントはビーマの息子であるガトートカチャに恨みを抱き、スョーダナに仕え、ガトートカチャと一騎打ちをすることとなる。つまり、王子、王、ラクシャサがそれぞれパーンダワ派とコーラワ派に分かれて対峙していると捉えることができる。このように GK、HW、BY の内容は相互に関連性を持っている。

3. テキストの考察

3.1. テキストの構造と概要

GK の物語は、その起点と終点がマハーバーラタにより決められている中で展開していく。マハーバーラタにおいては、パーンダワ兄弟の長男ユディシュティラがサイコロ賭博でコーラワ兄弟に負け、兄弟たちや妻ドローパディーとともに 12 年間追放されるが、GK の物語の起点はこの追放期間の終盤である。GK の時代設定はこのようにマハーバーラタの物語の中に包含されており、テキスト中でこの物語はマハーバーラタの外伝として位置付けられている。また、マハーバーラタでは、アビマニュはウッターリーという女性と結婚し、彼女との間に、後にパーンダワ兄弟の王位を継ぐ子どもをもうけることになっているが、GK ではアビマニュとウッターリーとの結婚が物語の終点となる。

このような構造を確認した上で、下記に GK の概要を見ていく。ここでは物語をいくつかの場面に分け、それぞれの場面にタイトルを付し、括弧内には詩章と詩節を記している。なお、詩章 1 及び 50 は話の筋とは関係のない内容なので省略する。

いとこの関係にあり、アルジュナもアビマニュも母方の兄弟の娘と結婚している。

(1) アビマニュの生い立ち (2.1-8)

アルジュナ（パーンダワ兄弟の三男）には妻スバドラーとの間に息子がおり、その名をアビマニュという。アビマニュは父アルジュナの追放期間中、ドワーラワティーという王国に預けられている。そこは、スバドラーの兄、クリシュナとバラデーワが2人で統治する王国であり、クリシュナは氏族ヤドゥ、バラデーワは氏族ウリシュニを率いている。アビマニュは縁故により、伯父であるクリシュナのもとで育てられることとなった。今、アビマニュは12歳に成長し、大変優秀で、英雄の素質を備え、外見は美しい。

(2) クリシュナへの献身 (2.9 - 3.6)

アビマニュはクリシュナに従順であったため、クリシュナから大変可愛がられ、教えを授かっていた。また、アビマニュには、貴族の若者で構成される親衛隊が護衛を司っていた。クリシュナは密かに、美しく成長した自身の娘、クシティ・スンドリー姫とアビマニュが結ばれてもよいと考えていたが、その結婚はアビマニュが自らの行動により勝ち取るべきだという考えから、何も言わずにいた。

(3) 郊外への遊山 (4.1 - 13.16)

さて、クシティ・スンドリーは、宮廷を出て自然を愛でたいという願望を侍女たちに漏らした。それが、王であり、彼女の父であるクリシュナに伝えられると、彼は同意し、宮廷総出で遊山へ出かけることとなった。旅の途中、アビマニュとクシティ・スンドリーは森の中で出くわし、お互いに一目惚れする。彼らはいとこでありながら話したことは一度もなかった。

一行が海岸に到着すると、アビマニュとクシティ・スンドリーは再び海岸沿いの洞窟で遭遇し、2人の気持ちに気づいた侍女のスダルパナーは、アビマニュにクシティ・スンドリーの気持ちを伝え、彼女の気持ちを受けとめるように懇願する。一方でクシティ・スンドリーは恋の病を患い、心配したクリシュナは一行ともども王国へ戻ることにする。

(4) 逢瀬の計画 (14.1 - 27.21)

クシティ・スンドリーの病状は悪化し、力のない蔓のように弱々しくなり、檳榔子を噛みながら、ぼんやりとしていた。憂慮した侍女スダルパナーは2人にカカウインの詩のやりとりと逢引を進言する。また、スダルパナーはアビマニュに、クシティ・スンドリーがコーラワ兄弟の長男であるスヨーダナの息子、ラクシャナクマーラと婚約させられたという知らせを伝えた。アビマニュは、クシティ・スンドリーに好意を寄せることは、クリシュナへの敬意に背くことだと悩んでいたが、クシティ・スンドリーへの気持ちを止められないことを悟り、彼女と逢うことを決意する。一方でクリシュナは、神のご加護を得るために山深くに瞑想に出かけていた。その後、アビマニュの夢に両性具有の神（愛の神スマラと女神ラティが一体になった姿）が現れ、アビマニュが女神ラティに敬意を払い損ねると、一体となった者と引き離されるという呪詛を受ける。翌日、アビマニュとクシティ・スンドリーはついに逢瀬を果たす。

(5) 追放されたアビマニュ (27. 22 - 30. 5)

しかし、2 人ではいるところを庭師によって目撃されてしまう。宮廷中に噂が広がり、クシティ・スンドリーとラクシャナクマーラの婚約をとりもったバラデーワ（クリシュナの兄）は激怒した。そしてクリシュナの不在を良いことに、スヨーダナに働きかけ、ラクシャナクマーラとの結婚を強引に推し進めようとした。アビマニュは宮廷を去るほかなく、従者のジュルディヤを伴い、行くあてのない旅に出た。彼らが森を進んでいくと、浄化の泉にたどり着き、そこでヨーガの行を通してシワ神と合一する。すると女神ドゥルガーへの生贄を探し歩くラクシャサに襲われるが、応戦してそのラクシャサを屈服させる。そしてアビマニュは自身を生贄として捧げることを条件にドゥルガーのもとへ連れていくようにラクシャサに申し出て、ラクシャサはアビマニュと従者ジュルディヤを伴い、空を飛んでドゥルガーのもとへ向かう。

(6) ドゥルガーへの帰依 (30. 6 - 32. 3)

ドゥルガーの住処に着くと、ドゥルガーは興奮し、どう猛な姿でアビマニュを食べようと手を伸ばした。しかし、アビマニュは前夜のヨーガを通じたシワ神との合一によりマントラを心得ていたので、その完璧なマントラを唱えると、ドゥルガーは感服する。ドゥルガーは穏やかな姿になり、アビマニュに、ガトートカチャ（パーンダワ兄弟の次男であるビーマの息子で、アビマニュのいここにあたる）のもとへ行くようにと伝える。

(7) ガトートカチャとの出会い (32. 4 - 39. 2)

アビマニュは再びラクシャサに連れられ、空を飛んでガトートカチャのもとへ向かう。ガトートカチャはアビマニュを見るなり、彼がアルジュナの息子であることを見抜き、いここに会えた喜びから、アビマニュに協力することを約束する。そして三日三晩、あらゆるもてなしでアビマニュを歓迎するが、アビマニュが笑顔を見せることはなかった。ガトートカチャはアビマニュのクシティ・スンドリーへの深い思慕に感じ入り、翌朝には、ラクシャサの軍勢を引き連れて、ドワーラワティー国に向けて出発する。ドワーラワティー国に着くと、今にも自害しそうなクシティ・スンドリーを見つけ、ガトートカチャはアビマニュに、彼女とともに戦車に戻るように伝える。ガトートカチャ自身は、クシティ・スンドリーを装い、花嫁として結婚式に潜入するつもりであった。

(8) ガトートカチャとバジュラダントとの因縁の戦い (39. 3 - 16)

一方、バジュラダントというラクシャサがいた。彼は自らの父親をビーマ（ガトートカチャの父）に殺されたため、ガトートカチャに恨みを抱いていた。バジュラダントはガトートカチャの結婚式潜入の企みを知り、ラクシャナクマーラに密告し、彼は父であるスヨーダナに相談する。スヨーダナはバジュラダントに、花婿、つまりラクシャナクマーラを装いガトートカチャに近づいて殺すように命じ、コーラワや配下の王たちの軍を招集する。スヨーダナの目的は、ヤドゥ族を攻撃し、ドワーラワティー国を破壊することであった。

盛大な結婚式が終わり、ラクシャナクマーラを装ったバジュラダントと、クシティ・スンドリーを装ったガトートカチャが 2 人きりになると、バジュラダントはとうとう正体をあら

わす。両者は接近戦で戦い始め、やがて建物を大破するほどの大乱闘になる。ガトートカチャはついにバジュラダントを倒し、空を飛んで消え去っていった。

(9) ヤドゥ族とスヨーダナ軍との戦い (39. 17 - 44. 11)

憤怒したスヨーダナは、配下の軍を率いてヤドゥ族を攻撃する。ヤドゥ族は驚いて、ガトートカチャを呼び戻して軍を挙げて抗戦し、戦いは非常に激しくなった。ガトートカチャやアビマニュの参戦により、スヨーダナは劣勢を認めざるを得なくなる。するとスヨーダナはバラデーワにすぎるように許しを求める。バラデーワはヤドゥ族やガトートカチャをなだめようとしたが、彼らが反抗的な態度を取るので怒り狂い、恐ろしい姿になる。それを見ていたナーラダ仙（偉大な苦行者、聖仙）が隠遁中のクリシュナを呼びに行き、クリシュナが戻ってきて、バラデーワに敬意を示し跪きながら仲裁に入る。するとバラデーワは再び穏やかになり、スヨーダナは去っていく。

(10) ウィラータ国への招待 (45. 1 - 48. 2)

平和が戻り、アビマニュとクシティ・スンドリーは一緒にいられる幸せを噛みしめ、日夜愛し合っていた。そこにパーンダワ兄弟から使者が送られてきて、クリシュナにウィラータ国へ来るように伝える（パーンダワ兄弟はウィラータ国に身を隠している）。アビマニュもクリシュナに同行するように指示される。アビマニュはクシティ・スンドリーと離れたくないので気が乗らなかったが、クリシュナを恐れ、しぶしぶ同行することにする。

(11) ナーラダ仙の呪詛 (48.3 - 5)

クリシュナとアビマニュが出発した後、ナーラダ仙がクシティ・スンドリーのもとへやって来た。クシティ・スンドリーの結婚を祝福するためであった。しかし、クシティ・スンドリーはアビマニュを待ち焦がれてナーラダ仙の訪問を忘れ、出迎えなかったので、ナーラダ仙は彼女に、アビマニュの唯一の妻となれない呪詛をかける。

(12) ウッターリーとの結婚 (48. 6 - 16)

一方、クリシュナとアビマニュはウィラータ国に到着し、5人のパーンダワ兄弟とウィラータ国の王マーツヤパティ、クリシュナの間で協議が開かれた。その中で、アビマニュの結婚が話題に上り、アルジュナは、アビマニュは既に、マーツヤパティの娘、ウッターリーと結婚させる取り決めがされたことを告げる。そしてクリシュナは、ナーラダ仙の呪詛の力によって、これに従うことを約束する。ウッターリーは、アビマニュを自身の娘と結婚させたいというクリシュナの意思に背くことを恐れながら、クリシュナに手紙をしたため、アビマニュに子どもが生まれることがあれば、その子どもがクリシュナに似るように願っていることを伝える。

(13) パーンダワの後継者 (49. 1 - 4)

かくしてアビマニュは2人の妻を持つこととなった。パーンダワ兄弟が昇天した後、長男ユディシュティラの跡を継いだのは、アビマニュとウッターリーの間に生まれた息子、パリク

シットであった。そして王位はパルクシットからジャナメージャヤに受け継がれたのである。

3.2. ラングーをめぐるテキストの考察

テキストのプロローグからは、次のような創作の目的を読み取ることができる。第一に、前述のように、パトロンの王への頌詩とすることである。第二の目的は、作者自身が死後、愛の神カーマのもとへ帰する手段とすることである。そして第三の目的は、読者もしくは聞き手にテキストを通して恍惚の感覚を与えることである。本論では、この中でも特に第三の目的に着目して考察を試みたい。

ここでの恍惚の感覚とは、古ジャワ文学においてしばしば言及されるラングーという語によって説明することができる。ラングーとは、ズットムルダールの古ジャワ語の辞書によれば、「1. [主観的には]（美や愛によって生じる）思慕や恍惚の感覚、美の経験、ロマンティックな感情、愛の歓び」「2. [客観的には]上記のようなラングーを引き起こすもの：美しい、もしくは愛らしい全てのもの、美しさ、特に詩的な美しさ、詩」と説明されている（Zoetmulder 1982: 976-7）。このようなラングーの感覚は、GKにおいては、クシティ・スンドリーの人物像及び、アビマニュとの関係性に如実に表現されている。

クシティ・スンドリーの人物像は、美しく、弱々しく、もの哀しい存在として描かれている。その美しさについては、髪の毛の匂い、眉毛、目、唇、歯、胸、腰といった身体の部位がそれぞれ植物に喩えられ、かつ、植物たちが彼女の美しさに当惑している様子が描かれている。また、腕輪や髪飾りといった装飾品の数々に彩られた豪華さや彼女が本来持つ高貴さも美の要素として重要である。その1つの例を見てみよう。

美しい庭は、彼女が着飾ると、彼女の魅力に困惑してしまう。

蔓に咲いた花々は、彼女の髪の毛の芳香に使われてしまうのではないかとおそれ、心配している。

センダンの木の葉たちは、彼女の眉毛が彼らを傷つけるのではないかと、身を固くしている。

蓮さえも、彼女の目を見ると（その美しさに嫉妬し）気が狂ってしまうかもしれないと思い、しおれてしまう¹³。

一方で彼女の弱々しさは、アビマニュに出会ったことで病に冒され、物思いにふけっている様子により表現されている。その病は物語中でアビマニュにしか治すことができないとされていること、そしてラクシャナクマーラと結婚しなければならない状況から救い出すようにアビマニュに助けを求めることからアビマニュへの依存性を読み取ることができる。例えば、

彼女は弱々しく震えながら、侍女に会おうと外に出た。

¹³ この引用は S. ロブソンの英訳を参考にした。原文は次の通りである（引用符内の数字は詩章と詩節、「//」は改行を示す）。“（3.4）arēs lēngēng i rāmya ning taman i rūm nira ri huwus irāhyas angligā// sēkarnya manguṅg rurū prihatin epw awēdi pamapasa mrik ing gēlung// katon arēngu ron ing imba niki nāgata ri halis irāhyun amranga// tēkēng sarasijālume tēngi- tēngin kagalakana tuminghal ing mata”。

茫然として、敷布を引きずり、
彼女の髪の毛は乱れるにまかせ、くしも入れられていない。
彼女は力のない蔓のように、自らの歩みを数えるかのように（ゆっくり）歩いた。
疲れたので檳榔樹の実を噛み、ぼんやりとかなたの空を見つめていた¹⁴。

という描写がある。さらに、彼女がアビマニュを恋い慕うようになってからは、彼女の不機嫌さや涙の描写が繰り返されるようになる。また、彼女がアビマニュとカカウインの哀歌のやり取りをする場面もある。このような情景において、もの哀しさが描かれているといえる。

最後に、2人の関係には、アビマニュにとっては導師であり、クシティ・スندگانリーにとっては父であるクリシュナに対する罪悪感が常につきまとうことになる。アビマニュはクシティ・スندگانリーへの手紙の中で、いどこでありながら彼女と関係を持つことに対する抵抗感を吐露している¹⁵。このように、周囲に公然と認められる以前の2人の関係性には罪の意識が存在している。アビマニュの葛藤を示す2つの箇所を下記に引用する。

「これが、どうしてもあなたと関係を持ちたくない理由です。
——家族になることには惹かれないから。
ムクドリをペットとして飼うこと以上に幸せなことはない。
——「お兄さん」と呼ばれる喜びを抱きながら世話をすることができればいいのに。」
(アビマニュがクシティ・スندگانリーにあてたカカウインの哀歌の一部)¹⁶

しかしアビマニュはとても混乱し、当惑していた。
彼女に逢うことは彼のこの上ない願いであったが、
それは王（クリシュナ）に対する敬意に反することになるだろう¹⁷。

以上では、GKにおいてはクシティ・スندگانリーを通じて、弱々しく可憐な女性像、そして依存的であり刹那の感情に身を任せる関係性が描かれていることを見てきた。主人公であるアビマニュの視点に立つならば、クシティ・スندگانリーは、このような「美」のあり方を求める自身の心の投影であり、彼女との恋愛はまさに「美」の経験であると捉えることができるだろう。

しかしながら、前述したように物語の結末においてクシティ・スندگانリーは呪詛の力により、

¹⁴ 同上。“(14.6)marma nirân wijil tumuturëriyānglih akētër// lëngëng umîr hulës nira gëlunġ lukar tan iniwö” “(14.7)lwîr amilang tapak lari nirân sasinwam alume// tan saralâanginang lali tuminghal ing tawang adoh” .

¹⁵ ジャワの宮廷社会においていとこ婚は望ましいものとされていたようである (Creese 2004: 120-132)。しかしながら、GKの中ではアビマニュはいとこ婚に対して抵抗感を抱いているようにも捉えられ、他の古ジャワ文学テキストとは相違が見られる。

¹⁶ 注13に同じ。“(17.1)matangpun ing parâtra tak atön jamura wiphala raśmi ning pakadangan// sukha ng angiwö manuk syung amërën palarën asëdëpa n panënggaha kaka” .

¹⁷ 同上。“(21.1)putus katëmw iki kaharşa ning manah// tuhun minge ri twang irë nareśwara” .

アビマニュの唯一の妻になることができず、世継ぎを産むこともできないという結末が待っている。この結末は、ウッターリーがアビマニュと結婚して世継ぎを産むというマハーバーラタ上で定められた着地点であると考えられる。つまり、クシティ・スンドリーがアビマニュの第二の妻となり彼の子どもを産むこともないという結末が想定された上で、彼女の人物像やアビマニュとの恋愛が描かれているともいえる。

ここで、仮に、クシティ・スンドリーの人物像や彼女とアビマニュとの関係性を通して描かれる心理的状況を A とすると、A は次ページの表のように、華美、弱々しさ、病、ものの哀しさ、依存関係、罪悪感、退廃的といった言葉で表現することができる。一方で、彼女が得られなかった正妻としての地位や、世継ぎの出産を A と対置させるとするならば、B のような心理が A の裏面のようによび上がってくるだろう。ここでは自然の美しさや健全、生命力、自立、順法、建設的という言葉で表現している。新しい命を生み出し、そして命を繋いでいくような力強さが A と対置されるポイントであるといえる。

つまり GK では、A を如実に描きながら、その A が迎える結末によって、B という心理が影のように見え隠れするように読者や聞き手に感じさせているのではないかと考えることができる¹⁸。GK はこのように、主人公の視点を通して読者や聞き手にラングーの感覚を体感させながら、両個性という人間の本质を描き出しているテキストだと解釈することができるのではないか。

表：GK における心理の変遷

A	B
華美	自然の美しさ
弱々しさ・病・ ものの哀しさ	健全・生命力
依存関係	自立
罪悪感	順法
退廃的	建設的
↓	↑
呪詛	正妻・世継ぎ

(筆者作成)

¹⁸ GK の冒頭では、「あなたの耳に外伝を届けよう」という一節があり、このテキストが朗唱され、聞かれることを前提としていたことが分かる(Robson 2016: 31)。つまり、GK は書かれた文書として読まれ、同時にパフォーマンスとして聞かれていた。したがってテキストの受容者には読者と聞き手が存在すると推測される。

[illegible]

(筆者作成)

参考文献

《外国語文献》

- Callenfels, P. V. van Stein (1925) *De Sudamala in de Hindu-Javaansche Kunst*, 's Hague: Martinus Nijhoff; Batavia: Albrecht & Co.
- Creese, Helen (2004) *Women of the Kakawin World: Marriage and Sexuality in the Indic Courts of Java and Bali*. Armonk, New York; London, England: M. E. Sharpe
- Pigeaud, Th. G. Th. (1967) *Literature of Java: Volume I: Synopsis of Javanese Literature 900-1900 A.D.*, Hague: Martinus Nijhoff.
- Poerbatjaraka, R. M. Ng. and Tardjan Hadidjaja (1952) *Kepustakaan Djawa*, Jakarta: Djambatan. [プルボチャロコ, R. M. Ng. 著 青山亨・増井美佳訳. 2015-2017. 「プルボチャロコ著『古典ジャワ文学史入門』(1)」『東京外大東南アジア学』20: 79-118, 「プルボチャロコ著『古典ジャワ文学史入門』(2)」『東京外大東南アジア学』21: 72-102, 「プルボチャロコ著『古典ジャワ文学史入門』(3)」『東京外大東南アジア学』22: 48-72].
- Robson, Stuart (2016) *The Kakawin Ghaṭotkacāśraya by Mpu Panuluh*. Tokyo: Research Institute for Language and Culture of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies.
- Uhlenbeck, E.M. (1964) *A Critical Survey of Studies on the Languages of Java and Madura*. 's-Gravenhage: Martinus Nijhoff.
- Wieringa, Edwin (2000) Mpu Panuluh's Puzzling *Panakawans*: Do Clown-Servants Feature in the Old Javanese *Kakawin Ghaṭotkacāśraya*? *Bulletin of the School of Oriental and African Studies*. 3(2): 246-260.
- Zoetmulder, Petrus Josephus (1974) *Kalangwan: A Survey of Old Javanese Literature*, Hague: Martinus Nijhoff.
- Zoetmulder, Petrus Josephus, with the collaboration of Stuart Owen Robson (1982) *Old Javanese-English Dictionary*. KITLV. 's-Gravenhage: Martinus Nijhoff.

《日本語文献》

- 青山亨 (1986) 「古ジャワ文学におけるスタソーマ物語の受容と変容」『東南アジア研究』24 (1): 3-17.
- (1994) 「叙事詩, 年代記, 予言: 古典ジャワ文学にみられる伝統的歴史観」『東南アジア研究』32 (1): 34-65.
- (2001) 「東ジャワの統一王権—アイルランガ政権からクディリ王国へ」池端雪浦他編『東南アジア古代国家の成立と展開』141-167. 東京: 岩波書店.
- ギアツ, C. (1989) 『文化の解釈学 I』(吉田禎吾他訳) 東京: 岩波書店.
- 小森陽一 (1998) 「テキスト」石原千秋他『読むための理論—文学・思想・批評』4-11. 横浜: 世織書房.
- 崎山理 (1974) 『南島語研究の諸問題』東京: 弘文堂.

インドネシア語における非意図性を表す「接頭辞 *ter-* + 自動詞」¹ “Prefix *ter-* + Intransitive Verb” Denoting Accidental in Indonesian

佐近 優太（東京外国語大学大学院博士後期課程）
SAKON Yuta
(Doctoral course, Tokyo University of Foreign Studies)

Abstract

The prefix *ter-* in Indonesian assigns the meaning of “accidental” to an intransitive verb. However, there are many examples that cannot be explained by such an abstract definition. This paper describes “*ter-* + intransitive verb” using corpus, showing that “*ter-* + intransitive verb” represents not only “accidental actions,” but also “states continuing unintentionally,” and “speaker’s attitudes, emotions, and judgments toward actions or states.” Additionally, these meanings are not mutually exclusive but can be related by the notion of “subjectivity.”

キーワード：インドネシア語、認知言語学、接頭辞 *ter-*、Subjectivity、モダリティ

1. はじめに

インドネシア語において、接頭辞 *ter-*によって形成された動詞²は基本的に受動文か自動詞文を形成する。これまで *ter-*派生動詞に関しては多くの研究が行われてきたといえるが、その多くは受動文に関するものである。これは *ter-*派生動詞の研究が主に「中心の意味は何か」という問題に焦点を当ててきたためである。詳しくは後述するが受動文を形成する *ter-*派生動詞は「結果状態」「非意図」「可能」の3つの意味を持つ。一方で、自動詞文の場合は「非意図」の意味を認める立場が一般的である。そのため受動文の場合は3つの意味の中にプロトタイプを定めるという主張(Rizki 2014, 湯浅 2002, 2004)や、さらに上位スキーマを設定する主張(佐々木 1982)などが盛んに提示されたが、自動詞文の場合には意味が一義に定まっているためにそうした議論があまり行われてこなかった。同時に細かに用例を観察するという試みも行われていない。このような背景から「非意図」というラベルで *ter-*派生自動詞文のすべての現象を説明できるのかという疑問が生じる。

本稿ではコーパス及びウェブ上の用例を調査することによって、「非意図」と定義するだけでは説明できない現象が多くみられることを指摘し、そうした現象は認知言語学における Subjectivity「主体性・主観性」(Langacker 1991, Lyons 1982, Traugott 2010)によって説明できることを示す。

本稿の構成は以下の通りである。第2節ではインドネシア語の接頭辞 *ter-*についての先行研究を概観する。第3節は調査方法を説明し、第4節で調査結果を見る。続く第5節で主体化・主観

¹ 本稿は、日本インドネシア学会第50回研究大会（2019年11月9日・10日、於大阪大学）で発表した内容に基づいている。

² 以下、接辞 X によって形成される動詞を「X 派生動詞」と、またその派生動詞を含む文を「X 派生動詞文」と呼ぶ。特に、接頭辞 *ter-*と自動詞の組み合わせによって派生される語を *ter-*派生自動詞、それによって形成される文を *ter-*派生自動詞文と呼ぶ。

化を用いて意味拡張の説明を試みる。第6節はまとめと今後の課題である。

2. 接頭辞 ter-

2.1. 接頭辞 ter-の概略

接頭辞 ter-は名詞・形容詞・動詞を形成する機能をもつ。今回はこのうち接頭辞 ter-によって形成される動詞について扱う。接頭辞 ter-による動詞派生は、語基が他動詞的意味を持つ場合と、自動詞的意味を持つ場合とでふるまいが異なる。他動詞的意味を持つ語基につく場合、接頭辞 ter-は受動態標識³と定義できる(Tampubolon 1977: 272)。ここでインドネシア語の一般的な態交替について述べる。インドネシア語では基本的に接頭辞 meN-によって能動態を、接頭辞 di-によって受動態を形成する(Sneddon et al. 2010: 72)。次の(1a)と(1b)はそれぞれ meN-能動文、di-受動文の例である。(1a)で主語の位置を占める Ibu「母」は(1b)では oleh 句をとり、一方で(1a)で目的語であった piring itu「その皿」は(1b)では主語となっている。

- (1) a. Ibu men-cuci piring itu.
 mother MEN⁴-wash dish that
 母はその皿を洗った。
- b. Piring itu di-cuci oleh ibu.
 dish that DI-wash by mother
 その皿は母によって洗われた。

(ルシアナワティ 1998: 91)

以上を踏まえて次の(2)を見る。ここでも被行為者を表す要素が主語になり、行為者を表す要素は oleh 句によって表されている。つまり(2)も(1a)に対応する受動文であるといえる。

- (2) Piring itu ter-cuci oleh ibu.
 dish that TER-wash by mother
 その皿は母によって洗われた。

(ルシアナワティ 1998: 91)

³ ter-makan「ter+食べる」ter-kena「ter+当たる」など、特定の語基を持つ ter-派生動詞は能動態をとることが指摘されている(Nomoto & Kartini 2011: 14)。しかし本稿は自動詞を語基とする ter-派生動詞に焦点を当てるものであるため、こうした態の問題については扱わない。

⁴ 接頭辞 meN-及び di-は本文中のように態標識と捉えられるほか、それぞれ「行為者焦点(agent-focus)」「被行為者焦点(undergoer-focus)」と呼ばれる場合もある。本稿ではこのような議論に立ち入らずそれぞれ MEN、DI とグロスを表記する。接頭辞 meN-の N-の部分は語基の冒頭音に応じて m-, n-, ng, ny-, nge-の形で現れる。これらは語基にそのまま接続する場合と、冒頭音と置き換わる場合がある。本稿では、前者は(i)のように形態素境界を設け、後者は(ii)のように一語として表記する。

- (i) mem-bawa (ii) memukul [meN- + (p)ukul]
 MEN-take MEN.hit

しかし、ter-派生動詞は意味の面で di-派生動詞にはない特徴を有する。一般に ter-派生動詞は「結果状態」「可能」「非意図」の意味を帯びるとされる(Arka & Manning 1998, Grangé 2013, Alwi et al. 1998, Sneddon et al. 2010, Nomoto & Kartini 2011, Tampubolon 1977)⁵。(3a)では「書く」という動作の結果が残存しているという点から結果状態といえる。(3b)は行為者である私が意図せずペンを持って行ってしまったという非意図の意味を表している。(3c)は可能の例であるが、この場合「聞こえない」というように否定辞がついて不可能の意味が現れている。

- (3) a. Surat itu ter-tulis dalam bahasa Inggris.
 letter that TER-write in language English
 この手紙は英語で書かれている。

(Sneddon et al. 2010: 117)

- b. Maaf, pena=mu ter-pakai oleh saya.
 sorry pen=2SG TER-use by 1SG
 すみません、あなたのペンは私が使ってしまいました。

(Sneddon et al. 2010: 119)

- c. Suara dosen tidak ter-dengar dari sini.
 voice teacher NEG TER-hear from here
 先生の声はここから聞こえなかった。

(Sneddon et al. 2010: 121)

一方で自動詞に接頭辞 ter-が付与された場合は、構造上の変化は生じない (Verhaar 1984: 10)。次の(4a)と(4b)を見ると、両方において Latif は主語の位置を占めている。つまり ter-派生動詞と接辞を伴わない形式とが同じ構文をとっている。また意味の面では非意図を帯びるとされる。(4a)では Latif が授業中に寝たという事実が示されている一方、(4b)は「寝るつもりがないのに寝てしまった」という非意図性を読み込むことができる。本稿の研究対象はこの(4b)のような文ということになる。

- (4) a. Latif tidur di kelas.
 Latif sleep in class
 Latif は授業中に寝た。

(作例)

- b. Latif ter-tidur di kelas.
 Latif TER-sleep in class
 Latif は授業中に寝てしまった。

(Sneddon et al. 2010: 118)

2.2. ter-派生自動詞

ここでは ter-派生自動詞について、特にその「非意図」の意味の定義について検討を行う。先行研究における「非意図」の ter-派生自動詞の特徴は「主語がその意志とは無関係に、または外部か

⁵ 先行研究によっては非意図を「自発」と呼ぶもの(ルシアナワティ 1998)や、「自発」を別カテゴリーとして認めるもの(湯浅 2002)があり、完全に分類や用語の統一が図られているわけではない。

らの働きかけによって、ある状態を経験した」、または「その状態の生起は多くの場合突然であり、予期しなかったものである」という2点にまとめることができる(ルシアナワティ 1998: 98, Sneddon et al. 2010: 118, Tampubolon 1977: 279, Wolff 1986: 184)。

(4)を例にとって考えると、主語である *Latif* は授業中に寝るという状態を経験したが、その事態は *Latif* の意志とは無関係、もしくは意志に反して起こったことであると説明できる。しかしこれらの先行研究の記述には問題点が2つある。一点目は主語が無生物など意志を持たないものである場合である。例えば以下の(5)の場合、主語は木材であるため意志性は無関係である。つまりもともと主語に意志性がないために、先行研究の「意志とは無関係」という説明だけでは接頭辞 *ter-*を用いる動機を説明することが出来ない。

- (5) Saat kejadian, rantai penahan kayu putus, dan batang-batang kayu ter-jatuh.
when incident chain barrier wood cut and stick.REDUP wood TER-fall
それが起こったとき、木材を抑えておくチェーンが切れ、木材が落ちてしまった。

二点目は *ter-*派生自動詞が「状態継続」を表す場合を踏まえていないことである。*ter-*派生自動詞は非意図に加えて動作の完了の意味を含意するため、基本的に未完了相のマーカーである *sedang* とは共起しない(ルシアナワティ 1998: 99, Grangé 2013: 70)。しかし(6)のように *ter-*派生自動詞が *sedang* と共起することができる場合がある。この場合、*ter-*派生自動詞は状態の継続を表しているといえる。

- (6) Kita juga dapat menemukan=nya sedang ter-tidur di ruang rapat.
1PL.INC also can MEN.find=3 PROG TER-sleep in room meeting
我々は会議室で彼が寝ているところを発見した。

ここでも接頭辞 *ter-*が用いられている動機が問題となる。会議室に入った時点ですでに当人が寝ているということは、この文の話者にとっては彼が意図的に寝たのか非意図的に寝たのかについては不明である。そのため、先行研究に則れば=nyaによって表されている「彼」が本人の意志とは関係なく寝てしまったことを表すといえるが、この例の場合それは必ずしも適切な説明とはならない。

本稿は一点目の問題に対して、主語が三人称の場合の *ter-*派生自動詞は「話者の感情や予測」を表していることを示す。さらに二点目の状態継続的解釈においては、主語が一人称の場合は状態が主語の意図に関わらず続くことを、主語が三人称の場合は非意図的動作によって当該の状態になった、または行為者の意図に反してある状態が続いているという「話者の予測」を含意すると主張する。また状態継続的解釈の *ter-*派生自動詞に関しては先行研究でほとんど例が挙げられておらず、実際にどの程度用いられているかの調査も合わせて行う。

なお同様の指摘はルシアナワティ(1998)にも見られる。ルシアナワティ(1998: 99)は非意図の意味を表す *ter-*派生動詞が日本語の「～してしまう」と重なる部分があることを指摘している。「～してしまう」は完了の aspek の意味を持つ表現であるが、転じて「元の状態には戻れない」や「好ましくない結果になって残念だ」という話者の感情・評価を表す。つまりインドネシア語の *ter-*派生動詞が表す「非意図」とは、単なる主語の意図性に言及するだけでなく、話者の感情・

評価にも関わるモダリティ表現であると主張する。ただし具体例は挙げておらず、またどのような場合にモダリティ的意味が生じるかについては言及していない。そのため本稿は **ter**-派生自動詞のモダリティの意味が、特に主語が三人称の場合や動詞が状態継続的解釈を持つ場合に顕在化することを示すという点で、ルシアナワティ(1998)の主張を発展させるという意義も持つ。

3. 調査方法

調査対象の選出には Sneddon et al. (2010: 118)の挙げるリストを用いる(表 1)。

表 1 Sneddon et al. (2010: 118)による **ter**-派生自動詞のリスト

Indonesian ter -verb	English translation
tertidur	fall asleep
tergelincir	slip
terbangun	wake suddenly
terdiam	fall silent
terkejut	be startled
tertegun	stop suddenly
terlompat	jump suddenly
terbakar	catch fire
terpekik	scream suddenly
tersandung	stumble

ここから頻度を基に調査対象を決めるが、頻度調査にはインドネシア語ウェブコンコーダンスシステムである MALINDO Conc を用いた。これは Leipzig Corpora Collection (Goldhahn, Eckhart & Quasthoff 2012)にある 3 つのサブコーパスをもとに作られており、各サブコーパスは 30 万文、約 550 万語からなる。引用元はブログなどのウェブページ・ニュース・ウィキペディアであり、ジャンルによる偏りは少ない。さらに以上のサブコーパスは形態的なアノテーションが付されており、接辞や重複といった形態論的側面から検索可能であるという点を特徴とする(Nomoto, Akasegawa & Shiohara 2018)。また今回は補足としてその他のウェブサイトからも引用を行う。次の表 2 は MALINDO Conc 内の頻度順に表 1 の動詞を並び替えたものである。

表 2 **ter**-派生自動詞の頻度

Ter-Verb	token size
terkejut	686
terbakar	508
terbangun	360
tertidur	337
terjatuh	271

terdiam	180
tertegun	77
tergelincir	73
tersandung	40
terduduk	38
terpekik	12
terlompat	0

このうち *terbakar* と *terkejut* は頻度の高さに関わらず調査対象外としている。まず *terkejut* は「感情系」という文法化が進んだ別カテゴリーに認定される場合があるため、対象から除外した。次に *terbakar* であるが、これは語基の *bakar* が他動詞ともみなすことが出来るためである。(7)では動詞 *bakar* は Pemrotes di Irak 「イラクの抗議者」を主語に、rumah tiga anggota Parlemen 「三人の国会議員の家」を目的語にとっているため、*bakar* は他動詞である。そのため *terbakar* は必ずしも *ter-*派生自動詞には属するとはいえず、本稿の対象からは外れる。

(7) Pemrotes di Irak bakar rumah tiga anggota Parlemen.

protester in Irak fire house three member parliament

イラクの抗議者は三人の国会議員の家を燃やした

[ANTARANEWS]

以上より本稿ではまず *terbangun*, *tertudur*, *terjatuh* の3つを調査対象とする。さらにここに加え、動作完了的解釈と状態継続的解釈の両方が観察できると予想される *terduduk* も調査対象に含めることとする。最終的にこれらの4つの動詞を MALINDO Conc で検索し、エクセルにコピーしたのち、動詞の解釈を基準にラベル付けを行った。

ラベル付けは以下のように行った。本稿では(8)のような文を動作完了的、(9)を状態継続的であるとする。また(10)のような進行アスペクト標識が共起する場合も、ある一定の幅を持った動作の一点を指している文と解釈して、その動作自体は状態継続的であるとみなす。

(8) (Selain kepandaian yang disebutkan sebelumnya,)

ia gemar tidur dan mampu ter-tidur lebih cepat daripada orang lain.

3SG like sleep and can TER-sleep more fast than person other

(前述の能力の他に)、彼は寝るのが好きで、だれよりも早く寝ることができる。

(9) Ia mengalami sebuah kecelakaan dan ter-tidur selama 15 tahun.

3SG MEN-experience CLF accident and TER-sleep for 15 year

彼は事故にあって、15年間眠ってしまっていた。

(10) Ia melakukan itu, karena ia tahu bahwa tetangga=nya sedang ter-tidur lelap.

3SG MEN-do that because 3SG know CONJ neighbor=3 PROG TER-sleep sleep

彼はそれを実行した。なぜなら隣人がぐっすり寝ていることを知っていたからだ。

また、形式的指標に基づいて判定を行える場合と、文脈から判断しなければならない場合がある。(9)のように *selama* 「～の間」がある場合、共起する動詞は状態継続的解釈へと分類することができる。同じように *sedang* 「～している」、*masih* 「まだ～している」、*tengah* 「～している途中である」などの語と共起した場合は状態継続的解釈へと分類される。一方で *langsung* 「すぐに～した」、*tiba-tiba* 「突然」などの語と共起した場合は動作完了的解釈へと分類する。しかしすべてが共起語を基に判断できるわけではなく、文脈から判断しなければならない場合が大半を占める。この文脈的判断は基本的に筆者が行った。さらにどちらの解釈も可能である(11)のような例は *ambiguous* という別カテゴリーに分類している。

(11) *Penjual topi itu ter-duduk*

staff hat that TER-sit

(*dan berpikir keras bagaimana caranya ia bisa mendapatkan kembali topi-topi dagangannya*)

その帽子屋の店員は[座り込んでしまって/座り込んでいる状態で]、(どうすれば売り物のあの帽子を取り返せるか真剣に考えた。)

4. 調査結果

4.1. コーパス調査

調査結果は以下のようにまとめられる。

表3 *ter*-派生自動詞と語彙アスペクト

	<i>terbangun</i>		<i>tertudur</i>		<i>terjatuh</i>		<i>terduduk</i>	
動作完了的	342	(95.3%)	145	(43.9%)	250	(92.3%)	16	(43.2%)
状態継続的	9	(2.5%)	158	(47.9%)	8	(3.0%)	17	(45.9%)
<i>ambiguous</i>	8	(2.2%)	27	(8.2%)	13	(4.7%)	4	(10.8%)
<i>all</i>	359		330		271		37	

以上の表から、*ter* 派生自動詞には状態継続的解釈も数多く存在することがわかる。確かに *terbangun* と *terjatuh* では90%以上が動作完了的な解釈であるが、*tertudur* と *terduduk* では両解釈の数は均衡している。つまり状態継続的解釈の内実を詳しく見なければ、*ter*-派生自動詞を記述したとはいえない。

以下ではコーパスで得られた例文及び、ウェブサイトからの引用を用いて記述を行う。記述にあたっては2.2.で述べた先行研究の問題点を考慮し、人称と動詞のアスペクト解釈に基づいて、一人称主語・動作完了的解釈(4.2)、一人称主語・状態継続的解釈(4.3)、三人称主語・動作完了的解釈(4.4)、三人称主語・状態継続的解釈(4.5)の4つに分類した。

4.2. 一人称主語・動作完了的解釈

最初に主語が一人称であり、*ter*-派生自動詞が動作完了的解釈を持つ場合を見る。

(12)は *tertudur* の例であり、「私」が意図しないにもかかわらず寝てしまったことを表している。

また先行研究でルシアナワティ(1998)が述べているように、寝る意図がないにも関わらず寝てしまったことへ対する嘆きや後悔の気持ちも読み取ることが出来る。

- (12) Karena kelelahan **aku ter-tidur** di muka komputer.
because tired 1SG TER-sleep in surface computer
疲れから、私はパソコンの前で寝てしまった。

terbangun, terjatuh, terduduk についても同じことがいえる。(13)では10分という短い時間で起きていることから、起きるという行為が意図しないものであったことがわかる。(14)もカブがあまりにも大きかったために、勢い余って意図に反して転んでしまったことが読み取れる。(15)では力が抜けて、意図せずイスなどに尻もちをついてしまったという状況が想定できる。

- (13) Kurang lebih sepuluh menit kemudian **aku ter-bangun**.
less more ten minute then 1SG TER-wake
それからだいたい10分で私は起きてしまった。

- (14) Saya berusaha keras meng-ambil lobak itu tapi lobak itu terlalu besar
1SG manage hard MEN-take turnip that but turnip that so big
dan **saya ter-jatuh**.
and 1SG TER-fall
私はそのカブを抜こうとしたが、そのカブはあまりにも大きくて、私は転んでしまった。

- (15) (Siang itu seperti ada yang dicabut dari tubuh saya,)
yang mem-buat **saya ter-duduk** lemas di depan komputer.
REL MEN-make 1SG TER-sit tired in front computer
(その日のお昼は体から何かが抜けたみたいで)、そのせいでパソコンの前で力が抜けて座り込んでしまった。

以上より一人称主語・動作完了的解釈の場合、接頭辞 **ter-**は動作が話者の意図に反して行われたことやその動作に対する驚きや後悔を表すという機能をもつといえる。

4.3. 一人称主語・状態継続的解釈

次に一人称主語かつ状態継続的解釈の場合を見る。ただし MALINDO Conc の範囲では **tertidur** のみで用例が確認された。

- (16) Aku cukup senang menempati kamar itu,
1SG sufficient happy MEN.occupy room that
karena **aku langsung ter-tidur** sampai sore hari.
because 1SG immediately TER-sleep until evening day

(Ketika bangun aku segera mandi, lalu berganti pakaian.)

私はその部屋に十分満足した(といえる)。なぜなら私はすぐに夕方まで寝てしまったからだ。(起きたとき私はすぐにシャワーを浴び、服を着替えた。)

この例は langsung 「すぐに」という語からも推測できるように、寝るという行為が非意図的に行われたことを表している。しかし同時に「夕方まで寝てしまった」というように、寝ているという状態が思いがけず伸びてしまったことも含意する。加えて後続する文章からは話者の焦りなどの感情も読み取ることが出来る。ここから tertidur は動作の非意図性だけでなく、状態継続の非意図性も表すことがわかる。さらに状態継続の非意図性を表す場合、行為の始点が非意図的か意図的かは明確に区別できないことがある。(17)はブログからの引用である。この場合、話者は予定ではより早い時間に起きるつもりであったが、5 時半まで寝てしまったという非意図的な状態継続を表している。しかしアラームを消した後の「寝入る」という行為は意図的に行ったとも非意図的に行ったとも解釈可能である。

(17) (seperti biasa.. saya dibangun kan oleh Alarm, saya mematikan alarm dan)

tidur lagi pada akhirnya saya ter-tidur sampai jam 5.30 pagi.
sleep again on finally 1SG TER-sleep until time 5.30 morning.

(dalam sikap malas-malasan saya paksa untuk bangun)

(いつものように、私はアラームに起こされて、アラームを消し)、また寝て、結局 5 時半まで寝ていた。(そしてだるそうに無理やり起きた。)

[Faza]

以下の例は命令文の例であるが、状態継続的解釈の tertidur において、寝るという行為自体は意図的である場合も存在することを示している。(18)の「昼寝」は意図的にする行為を指しており、(19)では日頃の行う睡眠について言及をしている。どちらの例も「寝る」という行為自体は明らかに意識的に行っている。

(18) “Tidur siang pada hari minggu sesekali diperlukan, itu tidak masalah. Hanya tidur sebelum jam sore.)

dan jangan ter-tidur selama lebih dari 30 menit
and must.not TER-sleep for more from 30 minute

(,” ujar Dr Sabra Abbott, MD, neurologist and sleep medicine physician di north western Memorial Hospital di Chicago)

(「日曜日、必要な時の昼寝は問題ない。それが夕方前なら)、そして 30 分以上寝てしまってもいけない」(とシカゴにある North Western Memorial Hospital の神経・睡眠医学科医の Sabra Abbott 博士は述べた。

[detikhealth]

(19) Bahkan jika Anda ter-tidur selama 10 jam,
contrary if 2SG TER-sleep for 10 hour

(jika kita itu tidak sesuai dengan ritme biologis, Anda dapat terlihat seperti orang yang kekurangan tidur,” kata Salas.)

それどころか、もし 10 時間以上寝てしまえば、(もしそれが我々の生態学的リズムとあってなかったら、睡眠不足の人に見えることだってある。)

[BBC]

以上より tertidur の一人称主語・状態継続的解釈の場合は、「動作の非意図性」だけでは説明が不十分であり、「寝るという状況が予定の時間より長引く」という状況、加えてそのことに対する

後悔(ルシアナワティ 1998)をも表しているといえる⁶。

次に terbangun について、ウェブから引用した例を見る。(20)では、本来は寝たいという気持ちがあったものの、予定などによって彼女の意図に反して起きているという状態が継続していたことを表している。加えて、断食中の夜明け前にとる食事であるサフルを摂るために起きていることから、起きるという行為自体は意図的であったといえる。

(20) Pernah **aku ter-bangun** sampai pukul sebelas siang setelah makan sahur,” kata=nya.

PERF 1SG TER-wake until time eleven evening after eat sahur say=3

「サフルの食事の後、昼の 11 時まで起きていたこともある」と彼女は言った。 [kompas]

このように一人称主語・状態継続的解釈の場合、terbangun も tertidur と同じ特徴を持っているといえるが、用例数は非常に少ない。terjatuh, terduduk にこのカテゴリーの用例がみられないことも踏まえると、tertidur 以外の動詞に関しては今後アンケート調査を用いて容認度を確かめる必要がある。

4.4. 三人称主語・動作完了的解釈

続いて三人称主語・動作完了的解釈の例を見る。次の例のように物語などであれば terbangun は主語の非意図を表しているといえる。

(21) Sekali lagi **Phil, Stu, dan Alan ter-bangun** di tempat asing
once again Phil Stu and Alan TER-wake in place strange
tanpa ingat apapun yang terjadi malam sebelumnya.
without remember what REL happen night beforehand

また、Phil と Stu と Alan は昨晚のことを何も覚えていない状態で、知らない場所で目覚めた。

ただしすべてがこのような客観的な描写であるわけではなく、多くの場合「話者」の主観が入り込む。例(22)の場合に接頭辞 ter-が使われているのは、彼が非意図的に寝たという描写を行うためではなく、話者である私が「彼が非意図的に寝てしまった」と判断したためであると考えられる。

(22) (Aku nggak tahan lagi, aku putuskan untuk menghadapinya)

dan menanyakan soal sebenarnya, tapi **dia langsung ter-tidur.**
and MEN.ask problem really but 3SG immediately TER-sleep

(私はもう耐えられなくなって、彼と向かい合うことに決めた)。そして本当の問題について尋ねたのだが、彼はすぐに寝てしまった。

⁶ 加えて tertidur は以下のように「ぐっすり寝た」という意味を表す。こうした用例が非意図の意味とどのような関係にあるかについての考察は今後の課題とする。

Dan tak lama kemudian aku pun ter-tidur dengan pulasnya.
and NEG long then 1SG also TER-sleep with sleep.soundly
そして間もなく、私もぐっすり寝た

4.1.で、一人称の場合には非意図の意味とともにそうした行為をしてしまったことに対する驚きや後悔といった感情が確認された。しかし三人称主語の場合はその感情が多くの場合「話者」のものであることに注意したい。確かに例(21)の場合、接頭辞 **ter-**によって知らない場所で目覚めたことで「登場人物」が驚いたという感情を表しているともいえる。しかし次の(23)ような例では「話者」の驚きを表していると考えの方が妥当であろう。

- (23) Lima menit kemudian, aku me-lihat **dia ter-bangun**,
 five minute then 1SG MEN-see 3SG TER-wake
 dia tidak kaget sedikitpun atau berteriak.
 3SG NEG be.surprised bit or scream
 5 分後、私は彼が起きたのを見た。彼は少しも驚かなかったし、叫びもしなかった。 [wattpad]

この例では、後続する **tidak kaget sedikitpun** 「少しも驚かなかった」からもわかるように、接頭辞 **ter-**が行為者の驚きを表すために使われているわけではない。ここでは彼が目覚めたことに対する話者の意外性や驚きを表すために接頭辞 **ter-**が使われていると考えられる。

このように接頭辞 **ter-**の使用が話者の感情に動機づけられていることは主語が無生物の場合に一層明らかになる。次の例は **terjatuh** と **terbangun** の例である。

- (24) (Burke melihat tepat pada waktunya untuk menyaksikan)

sebuah **batang kayu** yang **ter-jatuh** melalui kaca depan mobil=nya.
 CLF stick wood REL TER-fall through glass front car=3
 (Bruke が見たちょうどその時)、車のフロントガラスを通して、木材が落ちてしまったのをみた。

- (25) Kejadian **bayi ter-bangun** setelah di-nyatakan meninggal dunia sempat
 event baby TER-wake after DI-declare MEN.leave world chance
 meng-hebohkan publik India.
 MEN-upset public India

すでに死亡宣告を受けた赤ちゃんが目を覚ました出来事は、インド民衆を騒然とさせた。

[TribunMadura.com]

これらの例では主語がそもそも意志性を持たず(例(25)の場合はすでに死んだものとされているために意志性を持たないとみなすことが出来る)、主語が非意図的に行ったことを表すために接頭辞 **ter-**が使われているという説明は適切ではない。非意図的に動作が行われたという話者の予測という説明も同様に十分ではない。ここで顕在化している意味は「その事態がよくないことであるという話者の態度」ないしは「通常起こらないことが起こったことに対する話者の驚き」である。つまり(24)であれば本来落ちるべきではない木材が落ちてしまったことに対する話者の失望などといった態度が現れている。(25)では起き上がるはずのない赤ちゃんが起きたという話者の驚きという態度が現れているといえる。

以上より、三人称主語・動作完了的解釈の場合は主語が行った動作の非意図性を記述することに加え、「非意図的に動作を行った」という話者の判断や、事象に対する話者の驚きなどの感情を

表していることが示された。

4.5. 三人称主語・状態継続的解釈

最後に三人称主語・状態継続的解釈の場合を見る。(26)は *terbangun* の例である。この例では、一見「(母が)非意図的に起きてしまって、その結果状態を見た」という解釈が成り立つと考えられる。しかし *setiap malam* 「毎晩」からわかるように、この場合の *shalat* 「サラート、礼拝」は夜の礼拝を指しており、母が非意図的に起きたという事態を想定することは難しい。そのため、ここで接頭辞 *ter-*が使われる理由は動作の非意図性に言及するためではなく、母が毎晩遅くまで起きているという状態への話者の驚きを表すためと考えられる。

- (26) *Setiap malam aku me-lihat dia ter-bangun untuk shalat yang di-akhiri dengan doa.*
every night 1SG MEN-see 3SG TER-wake to salah REL DI-end with pray
毎晩、私は祈りで終えるサラートのために彼女(母)が起きているのを見た。 [berbagi pengetahuan]

ただし、動作が非意図的に行われたという話者の予測が伴う場合も多い。

- (27) (=6) *Kita juga dapat menemukan=nya sedang ter-tidur di ruang rapat.*
1PL.INC also can MEN.find=3 PROG TER-sleep in room meeting
我々は会議室で彼が寝ているところを発見した。

(27)において、話者は彼が寝た瞬間を見ていない。そのためこの文を「彼が意図的に寝てしまってその結果状態を見た」という解釈することは難しく、接頭辞 *ter-*の使用が非意図的な動作に動機づけられているとは言えない。ここで接頭辞 *ter-*が伝達している意味は、会議室という本来寝る場としてはふさわしくないところで彼が寝ていることに対する、話者の驚きといった感情である。しかし同時にその寝るといった行為はおそらく意図的ではなく、睡眠不足など意図の範囲外のことが原因で寝てしまったのだろうという予測も含意する。

上記の説明は *terjatuh* や *terduduk* にも当てはまる。以下の(28)と(29)の例ではそれぞれ話者が動作の瞬間を見たわけではなく、「おそらく非意図的に動作を行ったのだろう」という予測のもと発話を行っている。(28)の *terjatuh* の例で *tengah* という進行アスペクト標識が用いられているが、これは落下中の状態ではなく、落ちたその結果の状態が進行中であることを表していることに注意したい。

- (28) *Sosok kecil yang tengah ter-jatuh di atas tanah berusaha bangkit.*
person small REL PROG TER-fall in up land manage stand.up
その倒れている子供は、頑張って起き上がろうとした。

- (29) *Ku=lihat bangku depan ayah dan ibu ter-duduk diam tak bergerak.*
1SG=see bench front father and mother TER-sit silent NEG move
私はベンチの前で、両親が動かないでじっと座り込んでしまっているのを見た。

以上、三人称主語・状態継続的解釈の場合は、状態が継続していることに対する話者の感情を表すといえる。同時に、発話者が動作の瞬間を見ていないことから動作が非意図的であったという話者の予測を含意することもある。

本節では **ter**-派生自動詞のふるまいを 4 つのカテゴリーに分けて調査した。結果は表 4 のようにまとめられる。

表 4 **ter**-派生自動詞の意味と主語の人称の関係

	動作完了的	状態継続的
一人称	・ 非意図的動作 ・ 動作に対する驚きなどの感情	・ 非意図的に継続する状態(動作自体の意図性は無関係) ・ 状態継続に対する驚きなどの感情
三人称	・ 非意図的動作であるという話者の判断 ・ 動作に対する驚きなどの話者の感情	・ 非意図的動作によって当該の状態にあるという話者の予測 ・ 状態継続に対する驚きなどの話者の感情

5. 考察

前節では **ter**-派生自動詞には状態継続的解釈も多く存在することを確認し、その状態継続的解釈と、三人称主語の場合の単なる非意図だけでは説明できない用例を観察した。特に三人称主語の場合は先行研究の説明のような「動作の非意図」という定義とは大きく異なるふるまいをみせる。そのためこうした三人称主語の例が動作の非意図を表す用法とどのような関係を持つかを考える必要がある。そこで本節では認知言語学理論の **Subjectivity** という概念を用いて考察を試みる。

Subjectivity は多くの先行研究により説明されており、中でも Lyons (1982)、Traugott (2010)、Langacker (1991) に代表なものである。しかしそれぞれの **Subjectivity** の定義には若干の違いがある(澤田 2011)。まず Lyons (1982) と Traugott (2010) は主に通時的な意味で **Subjectivity** という用語を用い、話者の態度や信念が表出することによって、時間とともにフレーズの持つ意味が変化することに注目する。一方で、Langacker (1991) は通時的にも共時的にも用いられる概念として用いており、あるフレーズに対して **Subjectivity** という事態把握が関係しているか否かを問題とする。本稿は共時的な研究であるため、Langacker の定義に立脚するといえる。日本語においては前者を「主観性」、後者を「主体性」と訳し分けることが多く、本稿では主体性と呼ぶこととする。接頭辞 **ter**-を考察する前に **Subjectivity** が作用する英語の **be going to** を例にとる (Traugott 2010: 7-8, 澤田 2011: xxxiii-xxxiv)。

- (30) a. **I am going to** visit the prisoner. Fare you well.
 b. I ha' forget what **I was going to** say to you.
 c. I am just afraid **there is going to** be such a calm among us, that we must be forced to invent some mock Quarrels. (強調は筆者による)

(30a) の **be going to** は「私が～へ行く」という動作を述べている文である。一方で(30b)では「～するつもりだ」という主語の意志を表している。さらに(30c)のような繰り上げ構文になると **is going to** の主語が「私」でないにも関わらず、「～しそうだ」という話者の意志を表現している。

ここから(30a)は事態の記述のため客観性が高い文、一方で(30c)は形式には現れていない話者の判断が文章内に入り込んでいるため、主体性が大きく作用している文であるといえる。(30b)は話者の意志を表しているため主体性の作用した文であるが、I という言語形式で文内に表示されている分(30c)より主体性は低いといえる。

以下こうした主体性の議論がインドネシア語の *ter*-派生自動詞文にどのように適用されるかを考える。まずは通常の能動文を考える。(31)は彼が落ちたという事態を客観的に述べた文であり、主体性は作用していない。

- (31) Dia jatuh dari kursi itu.
 3SG fall from chair that
 彼は椅子から落ちた。 (作例)

次に主語の非意図を表している場合を考える。以下の(32)の場合(30b)のようなモダリティ的表現に対応する。発話者が *aku*「私」と言語形式として表れていることから完全に主体性表現とはいえず、中程度主体化が作用している文といえる。

- (32) (=12) Karena kelelahan aku ter-tidur di muka komputer.
 because tired 1SG TER-sleep in surface computer
 疲れから、私はパソコンの前で寝てしまった。

最後に *ter*-派生自動詞が状態継続的解釈を持つ場合及び、三人称主語の場合について考える。

- (33) (=28) Sosok kecil yang tengah ter-jatuh di atas tanah berusaha bangkit.
 person small REL PROG TER-fall in up land manage stand.up
 その倒れている子供は、頑張って起き上がろうとした。

- (34) (=25) Kejadian bayi ter-bangun setelah di-nyatakan meninggal dunia sempat
 event baby TER-wake after DI-declare MEN.leave world chance
 meng-hebohkan public India.
 MEN-upset public India
 すでに死亡宣告を受けた赤ちゃんが目を覚ました出来事は、インド民衆を騒然とさせた。

(33)の例は子供が倒れている様子から話者が、「おそらく不慮の事態が起こって子供が倒れてしまったのだろう」という判断・予測を行っている文であった。つまり形式として文の中に表れてはいないが、事態の中に発話者が含まれており、主体化が作用している例といえる。同じように、(34)は「起きるはずのないものが起きた」ことに対する話者の驚きを表す文であった。つまり形式として表示されていない話者が事態に組み込まれている主体性表現である。

以上、*ter* 派生自動詞の様々なふるまいは主体性の程度という観点から統一的な説明が可能であることを示した。

6. まとめと今後の課題

本稿では、先行研究での *ter*-派生自動詞の定義が、その一側面しか捉えていないことを指摘し、用例観察によって従来認められてきた動作の非意図という定義では捉えられない「非意図的な状

態継続」「非意図的に動作が行われたという予測」という用法があることを明らかにした。特に後者に関しては、主体性の概念を用いることで従来認められてきた用法と関係づけられることを示した。

前述のように **ter**-派生動詞の研究はすでに多く行われており、意味分類についても多少の差異はあるものの意見の一致が見られる。しかしそのような一定の了解があるために、一つ一つの用法を慎重に検討するという試みは行われてこなかったように思える。意味の一般化は確かに必要であるが、抽象的な分類に傾倒しては今回指摘したような重要な用例を見逃してしまうことになる。特に重要なのは、ある言語形式を使うために話者が何を知っていなければならないのかという点である(Taylor 2012)。平沢(2019)は英語の前置詞 *by* について、話者は「～までに」や「近接」といった抽象的な知識だけを持っているのではなく、個々の具体的な用法もある程度覚えているということを主張する。インドネシア語の接頭辞 **ter**-にも同じことがいえる。抽象的な「非意図の意味を持つ」という知識があれば **ter**-派生自動詞を過不足なく使うことが出来るのだろうか。本稿はそうした問いに対して、使いこなすことは難しいと答えるものである。少なくとも本稿で主張した用法の知識がなければ正しく使うことはできないと思われる。

こうした考えは接頭辞 **ter**-の他の用法にも適用可能である。特に本稿は **ter**-派生自動詞のみを扱ったが、受動文を形成する **ter**-派生動詞の場合も考える必要があるだろう。さらに他の **ke-an** などの多義的な接辞に関しても詳細な用例観察を行うことで、インドネシア語の接辞に関しての理解が一層深まると考えられる。

用例出典

ウェブサイトからの引用はその都度サイト名を[]で例文中に記載している。記載のないものはすべて MALINDOConc からの引用である。

- (5) https://id.wikipedia.org/wiki/Daftar_karakter_Final_Destination 2019 年 11 月 8 日閲覧
- (6) <http://uniqversity.blogspot.com/2011/07/pr-hati-ala-gus-dur-pr-hati-ala-gus-dur.html> 2019 年 11 月 8 日閲覧
- (7) <https://www.antaranews.com/berita/1149844/pemrotes-di-irak-bakar-rumah-tiga-anggota-parlemen> 2019 年 13 月 3 日閲覧
- (8) <https://frischalamria22.blogspot.com/2014/11/doraemon.html> 2019 年 11 月 8 日閲覧
- (9) http://id.wikipedia.org/wiki/Boku_Dake_ga_Inai_Machi 2019 年 11 月 8 日閲覧
- (10) <http://alvinsutanto.wordpress.com/> 2019 年 11 月 8 日閲覧
- (11) <http://ariswantohs.blogspot.com/2010/06/luchuuuuuuu.html> 2019 年 11 月 8 日閲覧
- (12) <http://aangantengxxx.blogspot.com/> 2019 年 11 月 8 日閲覧
- (13) <http://adikine.wordpress.com/2009/03/20/cerita-asik/> 2019 年 12 月 3 日閲覧
- (14) <http://atamalaubanget.blogspot.com/> 2019 年 11 月 8 日閲覧
- (15) <http://asriat.multiply.com/journal> 2019 年 11 月 8 日閲覧
- (16) <http://ayumau.wordpress.com/> 2020 年 3 月 6 日閲覧
- (17) <http://m-faz.blogspot.com/2013/> 2020 年 3 月 6 日閲覧
- (18) <https://health.detik.com/berita-detikhealth/d-4457048/5-langkah-mudah-membiasakan-diri-bangun-pagi> 2019 年 11 月 8 日閲覧
- (19) <https://www.bbc.com/indonesia/vert-cap-46969600> 2019 年 11 月 8 日閲覧
- (20) <https://regional.kompas.com/read/2012/08/21/10071562/ine.febriyanti.jagoan.puasa> 2020 年 3 月 6 日閲覧
- (21) <http://adeirwansyah.multiply.com/reviews> 2020 年 3 月 6 日閲覧
- (22) <http://adbmcadangan.wordpress.com/buku-IV-10/> 2020 年 3 月 6 日閲覧
- (23) <https://www.wattpad.com/739966273-three-ways-kris/page/2> 2020 年 3 月 6 日閲覧
- (24) http://id.wikipedia.org/wiki/Final_Destination_2 2019 年 11 月 8 日閲覧
- (25) <https://madura.tribunnews.com/2019/06/20/semptat-dinyatakan-meninggal-oleh-dokter-bayi-6-pbulan-terbangun-saat-dimakamkan-keluarga> 2019 年 11 月 8 日閲覧
- (26) <http://abdulbazid.blogspot.com/2012/05/hidup-ku-hanya-untuk-dia.html> 2020 年 3 月 1 日閲覧
- (28) <http://annunaki.me/2010/05/01/arya-penangsang-tamat/> 2019 年 11 月 8 日閲覧
- (29) <http://assyaukani.blogspot.com/> 2019 年 11 月 8 日閲覧

略号一覧

1: first person, 2: second person, 3: third person, CLF: classifier, CONJ: conjunction, DEM: demonstrative, INC: inclusive, NEG: negation, PL: plural, PO: patient-oriented, POSS: possession, O: object, PROG: progressive, REDUP: reduplication, REL: relative, SG: singular, TER: prefix “ter”

参考文献

- Alwi, Hasan, Soenjono Dardjowidjojo, Hans Lapoliwa, dan Anton M. Moeliono (1998) *Tata Bahasa Bahasa Indonesia*. Edisi Ketiga, Jakarta: Balai Pustaka.
- Arka, I Wayang and Christopher D. Manning (1998) Voice and grammatical relations in Indonesian: A new perspective. In Mirriam Butt and Tracy Holloway King (eds). *Proceedings of the LFG98 Conference*. Stanford: CSLI Publications.
- Chung, Siaw-Fong (2011) Uses of ter- in Malay: A corpus-based study. *Journal of Pragmatics* 43: 799-813.
- Davidse, Kristin, Lieven Vandelanotte and Hubert Cuyckens (eds.) (2010) *Subjectification, Intersubjectification and Grammaticalization. Topics in English Linguistics* 66. Berlin, New York: De Gruyter Mouton.
- Grangé, Philippe (2013) Aspect in Indonesian: free markers vs bound markers. In John Bowden (ed.) *Tense, aspect, mood and evidentiality in languages of Indonesia. NUSA: Linguistic Studies of Languages in and around Indonesia* 55: 57-79.
- 平沢慎也 (2019) 『by の意味を知っているとは何を知っていることなのか 多義論から多使用論へ』. 東京: くろしお出版.
- Jarvella, Robert J. & Wolfgang Klein (Eds.) (1982) *Speech, Place, and Action: Studies in deixis and related topics*. Chichester: John Wiley & Sons.
- Langacker, Ronald W. (1991) *Foundations of Cognitive Grammar. Vol 2: Descriptive application*. Stanford: Stanford University Press.
- Lyons, John (1982) “Deixis and Subjectivity: Loquor, ergo sum?” In: Jarvella & Klein (1982), 101-124.
- Nomoto, Hiroki, Shiro Akasegawa and Asako Shiohara (2018). Reclassification of the Leipzig Corpora Collection for Malay and Indonesian. *NUSA: Linguistic Studies of Languages in and around Indonesia* 65: 47-66.
- Nomoto, Hiroki and Kartini Abd. Wahab. (2011) Konstruksi kena dalam bahasa Indonesia: Perbandingan dengan bahasa Melayu. *Linguistik Indonesia*, 29(2): 111-131.
- Rizki, Andini. (2014) 「事態連鎖から見たインドネシア語における ter-構文の働き -受動から外れる「結果状態」をあらわす ter-構文」 博士論文、名古屋大学.
- ルシアナワティ (1998) 「インドネシア語における種々の受身構文について—日本語とインドネシア語の対象研究—」『STUDIUM』大阪外国語大学大学院院生協議会、25: 91-109.
- 佐々木重次 (1982) 「インドネシア語における態の問題」『講座日本語学 10 外国語との対照 I』292-304、東京: 明治書院.
- 澤田治美編 (2011) 『ひつじ意味論講座 第5巻 主観性と主体性』東京: ひつじ書房.
- Sneddon James Neil, K Alexander Adelaar, Dwi N. Djenar, and Michael Ewing (2010). *Indonesian; A comprehensive grammar. 2nd edition*. London: Routledge.
- Tampubolon, D. P. (1977) Verbal Affixations in Indonesian. Doctoral dissertation. Georgetown University.
- Traugott, E C. (2010) (Inter) subjectivity and (Inter) subjectification: A Reassessment. In Davidse et. al. (2010). 29-71.
- Verhaar, John W. M. (1984) Affixation in Contemporary Indonesian. *NUSA: Linguistic Studies of Languages in and around Indonesia* 18: 1-26.
- Wolff, John U. (1986) *Formal Indonesian*. New York: Cornell University Press.

- 湯淺章子 (2002) 「日本語、インドネシア語における態と他動性」 博士論文, 神戸大学.
- (2004) 「'Volitionality' と 'Responsibility' —— インドネシア語における 3 種の受動表現 'di-
' 'ter-' 'ke- an' ——」 『甲南女子大学研究紀要 文学・文化編』 甲南女子大学、40: 85-91.

インドネシア語会話における *gitu* の談話的機能¹

Fungsi Penggunaan ‘*Gitu*’ dalam Percakapan Bahasa Indonesia

藤崎拓海 (大阪大学大学院)
FUJISAKI Takumi (Universitas Osaka)

ABSTRAK

Dalam obrolan santai yang dilakukan dalam bahasa Indonesia, kata *gitu* (berasal dari kata *begitu* yang maknanya adalah ‘seperti itu’) merupakan salah satu kata yang sangat sering digunakan. Meskipun penggunaan kata *gitu* yang diuraikan di dalam tata bahasa baku (Alwi et al. 2003; Sneddon et al. 2010) adalah penggunaan sebagai pronomina dan adverbial, tetapi di dalam obrolan santai, kata *gitu* juga kerap muncul sebagai unsur yang terdapat di luar struktur kalimat. Makalah ini bertujuan untuk menelaah makna pragmatik dari kata tersebut berdasarkan penggunaan kata *gitu* sebagai penanda kutipan (*quotative marker*) yang ciri khasnya tidak menunjukkan siapa penutur aslinya.

Ciri khas tersebut dapat dikaitkan dengan penggunaan kata *gitu* untuk menjelaskan makna pragmatiknya. Ketika ditempatkan pada tuturan yang mendesak lawan tuturnya untuk memahami gagasan tersebut, penanda kutipan *gitu* berfungsi untuk mengemas pernyataan yang diutarakan sebelumnya seolah itu adalah gagasan umum yang pasti telah diketahui oleh lawan tutur. Sementara itu, ketika kalimat yang mendahului *gitu* ditujukan untuk melemparkan tuduhan terhadap lawan tutur, maka penanda kutipan *gitu* dalam kalimat tersebut berfungsi untuk memperhalus tuturan. Hal tersebut tercapai karena penanda kutipan *gitu* di akhir tuturan berfungsi untuk tidak memperjelas siapa mencetuskan tuturan tersebut dan kepada siapa tuturan tersebut ditujukan.

Berbeda dengan fungsi-fungsi yang terkait dengan penggunaan *gitu* sebagai penanda kutipan, analisis ini juga menemukan fungsi penggunaan kata *gitu* ketika penutur tidak dapat menemukan padanan kata yang tepat untuk mengekspresikan maksudnya, sehingga kata *gitu* berfungsi untuk menghindari kejelasan arti kata yang ia tuturkan. Fungsi tersebut berdasarkan makna perumpamaan yang dikandung oleh kata *gitu* sendiri.

1. はじめに

インドネシア語の会話、特に、親しい友人同士の雑談のように口語的な会話には、「そのような」という意味を表す指示詞 *gitu* が非常に頻繁に現れる。これは、同じく「そのような」という比況の意味を表す指示詞 *begitu*²の短縮形である。

インドネシア語の代表的な参照文法書 (Alwi et al. 2003; Sneddon et al. 2010) では、*begitu* は前に

¹ 本稿は、日本インドネシア学会第 50 回大会 (2019 年 11 月 9 日 於 大阪大学) において発表した内容に基づいている。

² *begitu* は、比況の意味を表す前置詞 *bagai* 「～のような」と指示代名詞 *itu* 「それ」から成る前置詞句 *bagai itu* 「そのような」を語源とする語である (Jumariam 2000: 12)。

述べられたことを指す（前方照応）指示代名詞あるいは様態の副詞として扱われている³。例えば下の例(1)⁴では、*begitu* が単独で代名詞として主語 *maksud saya* 「私の意図」に対する述語を構成している。一方その下の事例(2)では、*begitu* が述語の動詞 *dihina* 「侮辱される」のあとに置かれていることにより、述語を修飾する副詞として機能している。

- (1) *Maksud* *saya* *begitu*.
 意図 1SG そのような
 [主語] 述語
 私が言っているのはそういうことです。

- (2) *Mengapa* *mereka* *dihina* *begitu*?
 なぜ 3PL 侮辱される そのような
 疑問詞 主語 [述語]
 なぜ彼らはそのように侮辱されるのか。（Sneddon et al. 2010: 219）

この標準形 *begitu* は、学校や役所などのいわゆるフォーマル（公的）な使用領域で用いられる変種である標準インドネシア語（Standard Indonesian）において頻繁に見受けられる。一方、友人同士の雑談のようにインフォーマル（非公的）な使用領域で用いられる口語インドネシア語（Colloquial Indonesian）では、*begitu* が用いられることは少なく、代わりに短縮形の *gitu* が圧倒的に多く用いられる。

短縮形の *gitu* は、先の *begitu* の例(1) (2)のように述語を構成する句の内部に現れるものに加え、文の義務的構成要素である主語と述語の外に特に頻繁に現れる。例えば次の事例(3)において、*gitu* は直前の述語 *masih nggak ngerti* 「まだわからない」を修飾しているのではなく、文の構成要素の外に現れているとみることができる。このような場合、*gitu* は直前に述べられた内容を指し示している。本稿のデータ（第2章で詳述）に現れる *gitu* の約7割がこの分布を示す。

- (3) *Gue* *juga* *masih* *nggak* *ngerti* *gitu*.
 1SG ~もまた まだ 否定 理解する そのような
 [主語] [述語]
 俺にも未だにわからない（ということ）。[KTRH 09:28]

また、このような事例の中には、*gitu* の直前部分が自己あるいは他者の発言や心情を表していることもあり、その場合、*gitu* は引用標識として機能する。例えば下の例(4)は、交際中であるこ

³ *begitu* はこの他に、節の頭に置かれ「～するとすぐに」という意味を表す接続詞、形容詞の前に置かれ「それほど」という意味を表す強意の副詞として機能することもあるが、短縮形の *gitu* がこれらの用法で用いられることは非常にまれであり、本稿の議論では扱わない。

⁴ これ以降、データの抜粋を提示するにあたって用いるグロス（逐次訳）と書き起こしの記法については、最後のページにまとめて記した。

とを周囲に隠している共通の友人カップル、つまりその場にはいない第三者について参加者同士が意見を述べ合う中で産出されたものである。この事例では *gitu* が、直前部分 *lebih open aja* 「もっとオープンにやれ」がその場にいる聞き手に向けられたものではなく、話題となっている第三者に対する“心の声”を引用したものであることを示している⁵。

- (4) 交際中であることを周囲に隠している友人のカップル（その場にはいない第三者）について
D と N が意見を述べ合う中で。 [DNND 05:04]

N: “*Lebih open aja,*” *gitu* loh.
より オープン だけ そのような particle
「もっとオープンにやれ」 っのよ。

このように *gitu* が引用標識として機能することについては、第3章で改めて取り上げる。

さて、*gitu* が文の構成要素外の要素として現れる現象は、口語インドネシア語に特徴的な要素を記述した Ewing (2005: 249-250) 及び Sneddon (2006: 132) において取り上げられている。これらの研究は、*gitu* が主にイントネーション・ユニット (intonation unit) の末に現れ、ユニットの区切りを示すと述べている点で共通している。特に Sneddon (2006) は、*gitu* が直前の発話に対する「強調 (strength)」を表す談話的な小辞 (discourse particle) のように機能していると指摘している。

しかし Sneddon は、*gitu* がどのような意味の「強調」を表しているのか、またどのようなメカニズムで発話を「強調」するのかについては明らかにしていない。そこで本稿では、上述のように談話辞的なふるまいを示す *gitu* について、上の2つの研究で触れられていなかった *gitu* の引用標識としての用法に着目することで、Sneddon の言う「強調」の意味とメカニズムを明らかにすることを目的とする。

2. 分析の対象となるデータの詳細

本章では、分析に用いるデータについて検討する。第1章で少し触れたように、インドネシア語にはフォーマル（公的）な使用領域で用いられる標準インドネシア語と、インフォーマル（非公的）な使用領域で用いられる口語インドネシア語の2言語変種が使い分けられる現象（ダイグロシア）が認められる（Sneddon 2003）。本稿で対象とするのは、後者の口語インドネシア語に特徴的な現象である。

口語インドネシア語は、標準インドネシア語と異なり標準化された文法体系や正書法を持たず、地域の変異 (regional variation) が認められる。特に都市部以外の地域では、島や地域ごとに異なる地方語を母語とし学校教育でインドネシア語を習得する話者が多く、そうした話者によって話されるインドネシア語は、出身地域の地方語の語彙が入り混じるなど少なからず地方語の影響を受ける。

それに比べて、全国から人口が流入する首都ジャカルタやその周辺地域では地方語を話す機会が少なく、若い世代を中心にインドネシア語を母語とする話者が大多数である。加えて、首都圏の中産階級が日常会話に用いる口語ジャカルタインドネシア語 (Colloquial Jakartan Indonesian) は、都会的で洗練された印象を体現する変種として、他の地域で話される口語インドネシア語に大きな影響を与え、口語インドネシア語のスタンダードとして認識されつつある (Sneddon 2003; 2006)。

⁵ この直前部分の出所については、厳密には別の解釈もあり得る。そのことについては第3章で言及する。

こうしたことを踏まえて本稿では、ジャカルタとその周辺地域出身の話者（いずれも大学(院)生）による、友人同士 2 者間の会話をデータとして選択した。無論、先に述べたような地方語の影響も、インドネシアの言語社会を理解する上で無視できない特徴ではあるが、本稿では、*gitu* そのものあるいは *gitu* と共起する要素に特定の地方語が混じることによる議論の複雑化を避けることを優先した。

分析の対象とする会話は合計 9 ケースである。これらは、2017 年から 2019 年にかけて筆者が大阪及びジャカルタで収集したものである。会話の参加者（合計 17 名）は全員インドネシア語を第一言語とする話者であり、いずれの会話もインドネシア語で行われた。

会話を収録することは前もって知らせ、話題などを指定せずに、10 分程度普段通り話してもらうように依頼した。会話の自然さをできる限り担保するために、会話が行われている間筆者は部屋の外あるいは会話参加者の視界に入らない場所で待機し、終わった時点で呼びに来てもらった。いずれの会話も、IC レコーダーで音声を録音するとともに、音声に現れない聞き手の反応などを確認するためにビデオカメラによる録画も行った。

こうして収集した録音・録画データ及び、それらを文字化したトランスクリプトを分析に用いる。文字化に用いた転写記号は参考文献のあとにまとめた。

以上のようにして収集したデータをもとに、*gitu* が指し示す直前の内容や前後のやりとり、*gitu* と共起する要素などに注目して分析を行った。特に本稿では、会話において *gitu* が引用標識として機能することに着目し、実質的な引用ではない発話に引用標識 *gitu* を置くことがどのような談話的機能をもたらしているかを考察する。

3. 引用標識としての機能と特徴

そこで、今述べた *gitu* の引用標識としての特徴について本章で詳しく論じておく。第 1 章でも触れたが、*gitu* の直前部分が自己あるいは他者の発言や心情を表す場合、*gitu* は引用標識として機能する。Ginanjar (2016) は、インドネシア語の自然会話における引用の特徴を述べる中で、「バーバル引用マーカー」すなわち語句の形で現れる引用標識の中では *gitu* が最も多く現れることを指摘している。

gitu を除くインドネシア語の引用標識は、*bilang, kata* 「言う」、*pikir* 「思う」、*nanya* 「聞く」などの、発言や思考を表す動詞⁶である。これら動詞は、例えば下の事例(5)に見られる *bilang* 「言う」のように引用発話の前に現れる場合と、次ページの事例(6)に見られる *kata* 「言う」のように引用発話の後に現れる場合とがあるが、いずれの場合も動作主とともに現れ、「言う」「思う」などの行為はもちろん、元話者が誰なのかも示される。

(5) 友人と出かけた時のことを語る中で。[JFAR 02:23]

01A: Habis itu gue bilang, “Mau nggak, temenin gue
 尽きる それ 1SG 言う ～したい 否定詞 付き添う 1SG
 02 ke Umeda?”
 へ 地名
 その後俺は言った。「梅田まで一緒に来てくれないか。」

⁶ *kata* については、名詞とする見方もあり得るが、ここでは Ginanjar (2016) にしたがって動詞として扱う。

(6) 卒業式当日の段取りに関する友人との打ち合わせを再現する中で。[SBRG 05:34]

R: “Pagi aja,” kata dia.

朝 だけ 言う 3SG

「朝にして」と彼女は言った。

一方、引用標識として現れる *gitu* は、これら伝達動詞と共起することもあるが、その生起位置は必ず引用発話の後である。さらに *gitu* の特徴として重要なのは、*gitu* だけが引用標識として用いられる場合、元話者が誰なのか、さらには「言った」のか「思った」のかなどの行為も明示することなく直前部分を引用発話として提示できる点である。例として下の(7)（例(4)再掲）を見られたい。この発話における引用部 *lebih open aja* 「もっとオープンにやれ」には、元話者と行為が示されていない。そのため、この引用部は元話者と行為に関して次の2通りの解釈が可能である。すなわち、(i) 話題となっている第三者に対するN自身の“心の声”を引用したものであるという解釈と、(ii) ほかの誰かの発言や格言などを引用したものであるという解釈である。この事例では(i)の可能性が高いものの、厳密に特定することはできない。このように *gitu* は、元話者と行為に関する情報をあいまいにしながら、今その場にいる自分が聞き手に向けて行った発話ではないものとして直前部分を提示することができる。

(7) 交際中であることを周囲に隠している友人のカップル（その場にはいない第三者）について
DとNが意見を述べ合う中で。 [DNND 05:04]

N: “Lebih open aja,” gitu loh.

より オープン だけ そのような particle

「もっとオープンにやれ」ってのよ。

この点は、次の事例(8)も同様である。06行目の発話における引用部 *saya yang duluan, saya duluan* 「我が先、我が先」には *gitu* だけが引用標識として用いられており、元話者と行為が示されていない。この事例では特に、この引用部が誰かの実際の発言を再現したものなのか、それとも列に並ばない人々がみな考えているであろうことをあたかも言ったように引用したものなのか、先行する文脈を参照してもなお、非常にあいまいである。いずれにしてもここで重要なことは、元話者と行為を明示しないという特徴を帯びた *gitu* を用いることによって、実際に誰かがそう言ったわけでない場合であっても、誰かの言葉を引用しているかのように表現することが可能になるということである。

(8) インドネシア人が行列に並ぼうとしないということを述べる中で。 [FJAD 07:05]

01 F: Meskipun sedikit, (0.9) meskipun dah disiap-,
～だけれども 少し ～だけれども 既に 準備される
短い行列であろうが、既に準備、

02 disiapin antrian, tetep aja.
準備される 列 依然として だけ
行列（の順路）が準備されていようがやっぱり同じ。

03 (0.7)

- 04 Nggak bisa bik(h)in antrian.
 否定 できる 作る 行列
 並ぶことはできない。
- 05 D: ((笑い))
- 06 F: ⇒ Tetep, “saya yang duluan, saya duluan,” gitu.
 依然として 1SG 関係詞 先に 1SG 先に そのような
 結局、「我が先、我が先」って。

上の事例(7)と(8)で見たように、*gitu* は他者（客体化した自己を含む）の声を招き入れるために発話の末に置かれる。このとき *gitu* は、以下で説明するような、「何者として話すか」という、話し手の立場の切り替わりを合図している。

Goffman (1981) は、「話し手」と言われる中には言葉を選択し発話を作り上げ表現する「作者(author)」、実際に声を出して伝達する「発声者(animotor)」、発せられた言葉に対する責任を持つ「本人(principal)」の役割の区別があるとした。自分のことばで自分が発話する場合のように同一人物がそれら役割を担う場合と、テレビでコメンテーターが述べていた内容を言い回しまでそっくり受け売りする場合のように、animotor である自分と、author や principal とが異なっている場合もあるということになる。

この Goffman (1981) の言葉を借りていうなら、*gitu* は、話し手が自分自身を animotor、すなわち声を出して発話を伝達する役割のみを担う「発声者」として配役し、それを通して、直前部分が今その場にいる自分ではない不特定の author によって創り出された発話であることを示している。

4. *gitu* の談話的機能

第1章で述べたように、本稿の目的は、Sneddon (2006) の言う「強調」がどのような意味のものであり、どのようなメカニズムによってその「強調」効果がもたらされるのかという問いを明らかにすることである。データの分析に基づき、本章ではまずその問いに対する答えとして、主張や説明を述べる談話に現れる *gitu* について「聞き手の理解促進・説得」という機能を 4.4.1 で提案し、そのメカニズムが第3章で述べたような *gitu* の引用標識としての特徴に基づいて説明できることを論じる。

さらに、続く 4.1.2 では、聞き手に対する非難を述べる発話に現れる *gitu* が、いわゆる「強調」や「断言」とは対称的に、発話を和らげる機能を持つという解釈を新たに提案し、この「和らげ」機能も「聞き手の理解の促進・説得」機能と同様に *gitu* の引用標識としての特徴に基づいて説明可能であることを主張する。*gitu* が引用標識であることと関連するこれら 2 つの機能は、まとめて 4.1 節で扱う。

また、今回の分析では、引用標識としての特徴ではなく、「そのような」という *gitu* の比況の意味がより前面に出ていると考えられる「断定回避」機能と解釈できる事例も観察された。それについては 4.2 節で取り上げる。

4.1. 引用標識としての特徴に基づく機能

4.1.1. 聞き手の理解促進・説得

本稿のデータでは、*gitu* が、先行する文脈から導かれる論理的な帰結となる内容を表す発話や、さらに先行する文脈の内容を別の形で言い換えた発話に現れる事例が多く見受けられた。それら事例では、述べられた内容の真実性を断言する談話辞 *loh* (Sneddon 2006: 124) と *gitu* が頻繁に共起するなど、強い確信を持って発話を伝達しようとする話し手の姿勢がうかがえることから、*gitu* の働きは Sneddon (2006: 132) の言う「強調」と共通していると考えられる。

まずは下の事例(9)を見られたい。

(9) ジャカルタにごみが散らかる原因を考えるやりとり。 [LFAD 08:16]

- 01 L: Mungkin, apa, mereka lebih aware nggak sih,
多分 何 3PL より 自覚的な 否定詞 particle
多分、何、彼ら（地方からジャカルタに移住した人々）はもっと自覚的じゃない？
- 02 kalo di daerah?
~なら で 地方
地方だったら？
- 03 Apa karena di Jakarta tuh imigran?
疑問 ~だから で 地名 particle 移民
ジャカルタは移民だからか？
- 04 Maksudnya mereka, mereka kan datang dari luar kan?
つまり 3PL 3PL particle 来る から 外 particle
つまり彼ら、彼らは外から来てるじゃん？
- 05 D: He'eh [he'eh.]
うん、うん。
- 06 L: [Orang] luar semua kan yang datang?
人 外 全て particle 関係詞 来る
全部外の人たちじゃん（ジャカルタに）来てるのは？
- 07 ⇒ Jadi, mereka nggak ada rasa memiliki, gitu loh.
だから 3PL 否定詞 ある 感覚 所有する そのような particle
だから、彼らには所有している感覚がないってわけよ。
- 08 D: He:.....m mungkin ya.
可能性はある particle
う～ん、かもね。

上の事例では 07 行目に *gitu* が現れているが、*gitu* の直前部分 *mereka nggak ada rasa memiliki* 「彼ら（ジャカルタの住民）には所有している感覚がない」は、接続詞 *jadi* 「だから」で導入されていることからわかるように、さらに先行する 06 行目までの L の発話の内容から導かれる論理的な帰結を述べようとしたものである。この事例における話し手 L の主張は、「ジャカルタの住民は外の地域からの移住者ばかりである（04, 06 行目）」⇒「彼らはジャカルタが自分のものであると

いう感覚がない (07 行目)」という論理の流れを持っている。先行文脈から段階を踏んで出された論理的な帰結を、*gitu* によって提示している。

このように、話し手の主張や説明における論理的な帰結を述べる発話に現れる *gitu* は、第 3 章で述べた引用標識としての特徴に基づいてその機能を考えることが可能である。すなわち、元話者を示さないという特徴を帯びた引用標識である *gitu* を置くことによって、話し手は発話を伝達するだけの *animator* として自分自身を配役し、誰かの言葉を借りて表現する主体として振る舞う。その結果、直前部分が「～ということ」「～というわけ」のように、単に話し手のみによる主観的な考えを表すものではなく、より客観性・事実性を帯びたものとして提示される。こうしたメカニズムによって、聞き手を説得するような態度で発話を伝達していると考えられる。

また、次に示す事例(10)では、*gitu* の直前部分の内容が、さらに先行する内容の言い換えとなっている。このような事例において現れる *gitu* も同様の機能を持っていると考えられる。

(10) インドネシア人の行動の特徴を、日本人の行動と比較しながら話している。[JLAD 07:13]

- 01 F Misalnya kan kita mau beli sesuatu nih.
 例えば particle 1PLI 未来 買う 何か particle
 例えばさ、何かを買おうとしているでしょう。
- 02 Tapi banyak orang.
 でも 多くの 人
 でも人がたくさんいる。
- 03 D: [Hm]
 うん。
- 04 F: [Nah,] itu mereka langsung bisa ngebentuk barisan.
 間投詞 それ 3PL すぐに できる 形作る 列
 ほら、そういうとき彼ら（日本人）はすぐに列を作れるんだよ。
- 05 (0.6) ((F が視線を D に移す))
- 06 F: ⇒ Buat antrian, gitu loh.
 作る 行列 そのような particle
 並ぶってことだよ。
- 07 D: Oh, iya iya iya iya iya iya iya.
 間投詞 肯定
 あ～はいはいはいはいはいはい。

F は、01-02 行目で「何かを買おうとするが他にもたくさん人がある」という状況を仮定し、そうした状況で日本人はすぐに「列を作る (*ngembentuk barisan*)」ことができると述べている (04 行目)。しかし、その直後に 0.6 秒の沈黙が生じている (05 行目)。この沈黙は、04 行目で F が述べた *ngembentuk barisan* 「列を作る」がやや漠然とした表現であるがゆえに聞き手 D がその意味を理解できなかったことで生じた反応の不在と理解可能である。これを受けて、F は *ngembentuk barisan* を別の形 *buat antrian* 「行列を作る (並ぶ)」で言い換え、さらに発話内容の真実性を断言する談話辞 *loh* (Sneddon 2006: 124) を置いて聞き手に受容を迫っている (06 行目)。そしてその発話に *gitu* が現れている。ここでは引用標識 *gitu* を置くことによって直前部分を話し手自身による表現では

なく誰かの言葉の引用であるかのように提示し、それを通して「(いわゆる) ～ということ」のように、誰もが当然理解可能であるという態度で伝達し聞き手の理解を促していると考えられる。

以上の考察から本稿では、Sneddon (2006) が言う「強調」が「聞き手の理解促進・説得」、すなわち、*gitu* の引用標識としての特徴に基づいて主張や説明に事実性・客観性をもたらし、聞き手の理解を促すという意味の「強調」であることを主張する。

4.1.2. 和らげ

4.1.1 では、Sneddon (2006) がいう「強調」の意味及びメカニズムについて論じた。一方本稿のデータには、いわゆる「強調」や「断言」というのとは対称的に、むしろ *gitu* が発話を和らげていると考えられる事例も見られた。それは具体的には、*gitu* の直前部分が聞き手に対する非難を表す場合である。まずは下の事例(11)を見られたい。

(11) [FAAN 03:18]

- 01 A: Pulang kuliah aja nongkrong ↑du↓lu baru pulang.
 帰る 講義 だけ たむろする まず やっと 帰る
 放課後だって(友達と)たむろしてから帰る。
- 02 F: Kenapa lu nongkrong?
 なぜ 2SG たむろする
 何でたむろするの?
- 03 Itu kan, (0.7)
 それ ~じゃないか
 それは、
- 04 ⇒ bu[kan aktiv-, aktifitas yang baik, gitu.]
 否定詞 活動 関係詞 好ましい そのような
 (学生として)好ましい活動ではないじゃないかっていう。
- 05 A: [Ntar kalo ngga nongkrong, bengong mulu.]
 あとで ~なら 否定 たむろする ぼーっとする ばかり
 たむろしなかったら、ぼーっとしてるだけだもん。

この事例で特に注目するのは、04 行目に見られる *gitu* である。この *gitu* の直前部分は、03 行目から続く *itu kan bukan aktivitas yang baik* 「それは好ましい活動ではないじゃないか」という、聞き手 A の行動に対する強い非難を表している。周辺部分をさらに詳しくみていくと、*gitu* の置かれた 03-04 行目の F の発話は産出の途中で中断されている (0.7 秒の沈黙部分)。この発話産出の中断は、その前の 02 行目でも F が A の行動に対する非難を述べている⁷ことから考えると、聞き手 A に対して繰り返し非難を述べることへのためらいを表していると解釈可能である。さらにそのあと F が発話の産出を再開するのとほぼ同時に、A がまくしたてるようにやや大きな声で割り込み、F の 02 行目の発話に応答している (05 行目)。こうした局面において F は産出中の発話 (03-

⁷ 「友達とたむろする」という行動について、純粋に理由を尋ねるのはいささか不自然に思えるため、ここでは F の意図としては、理解できない行動であるという評価を示すことで非難を述べていると解釈する。

04 行目) の終わりに引用標識 *gitu* を置くことで、出どころの不明な発話を単に伝達するだけの animator へと身を翻す。そうすることによって、直前部分の author が自分ではないかのように表し、その発話が直接的すぎるのを弱めようとしていると考えられる。

下の事例(12)に見られる *gitu* も、同様の機能を持っていると考えられる。

(12) 同期の R が自分よりも先に卒業してしまうことを、S が嘆いている。[SBRG 01:33]

- 01 S : Istilahnya lu, lu udah,
いわば 2SG 2SG すでに
いわばあんたはもう、
- 02 Lu udah ngulang tiga kali, [gue dua kali.]
2SG すでに 繰り返す 3 回 1SG 2 回
あんたは3回(試験を)やり直しになって、私は2回。
- 03 R : [((笑い))]
- 04 S : ⇒ Tapi kenapa lu lulus duluan, gitu =
しかし なぜ 2SG 卒業する 先に そのような
なのになんであんたが先に卒業するのっていう。
- 05 =¥Lu jahat. Lu nggak nungguin gue.¥
2SG ひどい 2SG 否定 待つ 1SG
あんたひどい。あんた私を待ってくれなかった。

この事例では、04 行目の発話に *gitu* が見られる。仮に *gitu* が置かれなかった場合、*gitu* の直前部分 *kenapa lu lulus duluan* 「何であんたが先に卒業するの」は、自分より卒業試験を不合格になった回数が多い(01-02 行目) のにもかかわらず先に卒業する R に対して S が直接的に非難を述べたものであると聞かれかねない。また、この直前部分が質問の形式である点も重要である。一般に、質問に対しては応答が期待される (Schegloff & Sacks 1973)。この事例に至る少し前に R は、卒業論文の執筆に関して S の取り組みが不十分である旨を指摘しており、それによってやや緊張感のあるやりとりが生じている。もし仮に R が 04 行目の *kenapa lu lulus duluan* 「何であんたが先に卒業するの」を自分に向けられた質問として受け取った場合、ここで再びその事実を持ち出してまともに応答することも十分考えられる。その場合、和やかな雰囲気が損なわれてしまうことは容易に想像できる。そこで S は、発話の終わりに *gitu* を置き、直前部分があたかも元話者とその行為が不明な引用発話であるかのように提示することで、それが R に向けられたものではないかのように表し、衝突のリスクを軽減しようとしていると考えられる。

以上のように本項では、聞き手に対する非難を述べる発話の末に置かれる *gitu* について、引用標識としての特徴によって発話の創作者と受け手をあいまいにすることで非難を和らげるという「和らげ」機能を提案する。

本稿で扱う会話の参加者達のように親しい友人同士という間柄では、初対面や目上の相手との会話とは違って相手に自分の本音をさらけ出すことが可能である。しかし相手に本音をぶつける

ということは一方で、相手のフェイス⁸を侵害する可能性が高く、結果として良好な人間関係を損ないかねない行為でもある。そうしたリスクへの配慮から話し手は、発話を引用として述べることによって、あたかも自分自身のものではないかのように表し、非難が直接的すぎるのを調節しようとしているのだと考えられる。

4.1.3. 4.1 節のまとめ

以上のように本節では、*gitu* の引用標識としての機能及び特徴に着目したことによって以下のことが明らかになった。まず、今まで単に「強調」(Sneddon 2006)とされていた *gitu* の機能が、他者の声を借りて客観性をもたらすというメカニズムによる「聞き手の理解促進・説得」であるとわかった。さらにそれだけではなく、聞き手に対する非難を述べる発話の末に *gitu* が現れる場合は、直前部分があたかも自分の創作した発話ではないかのように示すことで非難を和らげる効果をもたらすことが新たに明らかになった(「和らげ」機能)。これらは一見矛盾するようにも見えるが、実は表裏一体の機能である。すなわち、話し手が *gitu* によって発話の伝達のみを担う *animator* として自分自身を位置づけ、発話の出どころを不特定にすることが、主張という局面では客観性をもたらして説得力を高める一方、聞き手に対する非難を述べるという局面では行為の仕手と受け手をあいまいにすることで発話を和らげるという効果をもたらすのである。

本節で挙げた 2 つの機能について私が主張したことと同じようなことが、日本語においても述べられている。*gitu* は、いくつかの点⁹で日本語の引用助詞「と」と似ていると考えられるが、日本語の話し言葉に見られる様々な引用表現を取り上げてその機能を論じた加藤 (2010) は、先行文脈から導かれる論理的な帰結を述べる発話の終わりに「と」が置かれる現象を取り上げ、次のように述べている。すなわち、「と」を用いることで話し手は、自己の主張や説明を、誰もが納得する当然の事実として提示し、説得するような態度で伝達することができる、と。この指摘は、主張の帰結に現れる *gitu* の事例(先の事例(9))について筆者が指摘したこととも重なる。一方 Hayashi (1997) は、加藤 (2010) が挙げたのと類似する「と」の事例を挙げ、話し手が、主張した内容に対する責任を「と」を置くことで自分から切り離し、他人から反論や抗議を受けないようにしていると述べている。*gitu* の「和らげ」機能も、引用として述べることで直前部分に対する責任が話し手本人にないかのように示した結果生じるものであり、その意味では Hayashi (1997) の主張と共通していると言える。

この 2 つの研究からもわかるように、自分の考えや主張を、あたかも誰かの言葉の引用であるかのように述べるのが「発話の説得的伝達」および「責任回避」という 2 つの効果をもたらすという現象が、言語を超えて認められると言える。

⁸ ここで言う「フェイス」は、Brown & Levinson (1987) におけるフェイスの概念に基づいている。Brown & Levinson によると、人間は、他者からよく評価され仲間として認められたいという欲求 (positive face: ポジティブ・フェイス) と、自分の行動や領域を他者に侵害されたくないという欲求 (negative face: ネガティブ・フェイス) を持ち合わせている。本項で見た非難は、聞き手のフェイスを侵害する行為 (Face Threatening Act) である。

⁹ 元話者と伝達行為を明示しなくてもよい引用標識であるという点、前方照応の指示詞に由来する (小林 1936: 229) 点、必ず引用発話のあとに現れる点が *gitu* との共通点として挙げられる。

4.2. 比況の意味に基づく機能一断定回避

本節では、*gitu* の直前に置かれることばについて話し手がはっきり覚えていない、はっきりとわからない、あるいはあえて特定を避けようとしていることが読み取れる事例における *gitu* の機能を考察する。そのような事例では、あとで例示するように、*gitu* が現れる位置が必ずしも発話の末でないという点で、引用標識としての特徴に基づいた機能と解釈できる事例とは異なっている。

事例を見ていこう。次の事例(13)は本稿のデータではなく、あるトーク番組において起こった発話である。この発話では、複数の要素（副詞 *kali* 「多分」、数詞 *sepuluh-sebelas* 「10-11」、数がおおよそであることを表す接尾辞 *-an*、そして発話末における音調のわずかな上昇）から、*gitu* の直前の内容について話し手がはっきり記憶していないことが明確に読み取れる。

- (13) ある女優が、今まで何本のミュージックビデオに出演したことがあるかを聞かれて。

D: Ada kali, sepuluh-sebelasan gitu;
ある 多分 10-11-an そのような
10（本）か11（本）かそのくらいあるでしょう。

[Ini Talk Show, 2014]

同様に、本稿のデータからの抜粋である次の事例(14)でも、*gitu* の直前のことばが、話し手にとって確信度の低いものであることが読み取れる。

- (14) 友人と出かけた際、その友人が uber¹⁰のクーポンを持っていたことについて。[SVCR 02:07]

01 S: Trus, punya kayak, dia, tiket gitu..
それから 持つ ~のような 3SG チケット そのような
それで持ってたの何か、その、チケットみたいな。
02 Tiket, bukan tiket sih. Kupon.
チケット 否定 チケット particle クーポン
チケット、チケットじゃないけど。クーポン。

01 行目で S は、友人が持っていたものを *tiket* 「チケット」と描写しており、その直後に *gitu* が置かれている。ここで、*tiket* という表現に至る直前における前置詞 *kayak* 「~のような」及び言い淀みから、この時点で S が *tiket* ということばについて確信を持っていないことがうかがえる。実際にその直後、S は *tiket* を *kupon* 「クーポン」と言い直している（02 行目）。

このように、話し手にとって確信度の低いことばの直後に置かれる *gitu* は、「そのような」という比況の意味によって、直前のことばを“ぼかす”機能を持っていると考えられる。

下の(15)は、話し手があえて特定のことばに限定することを避けたと考えられる事例である。この事例では、発話内部における *gitu* の位置にも注目されたい。

¹⁰ オンライン配車サービスの一つ。

- (15) 留学生同士の会話。この断片の直前で E は、既に留学プログラムを修了しているのにもかかわらず、研究室にある自分のデスクはまだそのままの状態であると述べた。

[TIEG 01:23]

- 01T: Trus lo ngapain di lab.
それから 2SG 何をする で 研究室
それであんた研究室で何やってんの？
- 02 (1.3)
- 03E: Nggak dateng gue. Jarang-jarang.
否定 来る 1SG めったにない
来てないよ私。ほとんど。
- 04 [Males. Ngapain?]
億劫である 何のために
めんどくさい。何しに（来るの）。
- 05T: [((笑い))]
- 06 (1.3)
- 07E: ⇒ Tapi kalo ada party gitu-gitu gue date(h)ng
でも ~なら ある パーティ そのような 1SG 来る
でもパーティーみたいなのがあったら来る。
- 08T&E: ((笑い))
- 09T: <Dasar>
底
最低。

07 行目の E の発話に *gitu* が現れているが、仮にこの位置に *gitu* が置かれなかったとすると、「パーティーがあったら来る」のように、E が研究室に来る動機を「パーティー」に限定しているような印象を与える。しかしこの事例では、*gitu* が置かれていることによって明らかに、そうした断定的・限定的な印象が弱まっている。実際、この発話によって笑いが起き（08 行目）、さらに E が T から *Dasar* 「最低」という評価を受けているのは（09 行目）、E が研究室に来る動機が「パーティー」という特定の目的に限定されていないからにほかならない。言い換えれば、07 行目の発話は、めったに研究室に顔を出さない E が、パーティーのようなお楽しみ行事が催されるときのみ研究室に来るという意味に解釈されたからこそ、可笑しいものとして扱われているのである。

また、この事例では、発話内部における *gitu* の位置も重要である。「断定回避」機能と解釈できる事例では、*gitu* が引用標識として現れるときと異なり、この事例のように *gitu* が発話の途中に現れる点が特徴のひとつである。このことから、*gitu* は発話全体ではなく直前の名詞 *party* のみを指し、*gitu* という語そのものが内包する「そのような」という比況の意味を前面に出しながら、「パーティーやそのようなこと」のように他の楽しい行事の存在を暗示していると考えられる。

以上の分析から本節では、比況の意味によって直前のことばに対する限定や断定を回避するという「断定回避」機能を提案する。

5. おわりに

以上のように本稿では、文の構成要素外の要素として現れ、談話辞のようなふるまいを示す指示詞 *gitu* の談話的機能について、Sneddon (2006) の言う「強調」がどのような意味であり、どのようなメカニズムによる「強調」なのかという問いを出発点とし、探究した。

まず第3章では、発話末に現れる *gitu* が、元話者を示さないという特徴を帯びた引用標識であることを示し、話し手がほかの誰かのことばを伝達する役割のみを担う animator (Goffman 1981) として振る舞うことを合図するマーカーであると論じた。本稿ではこの点に着目したことによって、今まで単に「強調」(Sneddon 2006) とされていた *gitu* の談話的機能が、他者の声を招き入れて客観性をもたらすというメカニズムによって聞き手の理解を促すという意味の「強調」すなわち「聞き手の理解の促進・説得」であるとわかった。さらに、*gitu* が聞き手に対する非難を述べる発話に現れる場合は、引用標識 *gitu* で行為の仕手と受け手をあいまいにすることによって非難が直接的すぎるのを和らげる効果をもたらすことが新たに明らかになった。

さらに本稿では、*gitu* が直前のことばを“ぼかす”という「断定回避」機能も提案した。「断定回避」機能と解釈できる事例では、発話内部における *gitu* の分布上の特徴及び *gitu* と共起する表現から、*gitu* の引用標識としての特徴ではなく、*gitu* 自体に含まれる比況の意味がより前面に出た機能であるという解釈を提案した。

本稿で取り上げた *gitu* の談話的機能は、今回データとして用いた会話から代表的と思われるものであるが、取り上げることができなかった用法もある。したがって今後、検討するデータの量を増やす、あるいは異なるジャンルにおけるデータを検討した場合、本稿で指摘したのとは異なる機能を新たに発見できる可能性がある。引き続きデータを増やしながら分析に取り組み、より体系的な考察を目指したい。また、4.1.3 で触れたような他言語における類似現象との対照も、*gitu* の談話的機能についてより体系的に整理したうえでいずれ試みたい課題である。

参考文献

- Alwi, Hasan, Soenjono, Dardjowodjojo, Hans, Lapoliwa dan Anton, M. Moeliono (2003) *Tata Bahasa Baku Bahasa Indonesia*. Edisi ke-3. Jakarta: Balai Pustaka.
- Brown, Penelope and Stephen C. Levinson (1987) *Politeness: Some Universals in language usage*. Cambridge: Cambridge University Press. [ペネロピ・ブラウン、スティーヴン・C・レヴィンソン (田中典子監訳) 『ポライトネス：言語使用における、ある普遍現象』、研究社、2011年]
- Ewing, C. Michael (2005) Colloquial Indonesian. In: Adelaar and N. Himmelmann (eds.) *The Austronesian Languages of Asia and Madagascar*. 227-258. New York: Routledge.
- Ginanjari, Pika Yestia (2016) 「自然会話における引用発話の形式：日本語とインドネシア語の対照研究」 博士論文、大阪大学.
- Goffman, Erving (1981) Footing. In: *Forms of Talk*. 124-159. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- Hayashi, Makoto (1997) An Exploration of sentence-final uses of the quotative particle in Japanese spoken discourse. In: Ho-Min Sohn, & John Haig. (eds.) *Japanese/Korean linguistics*. vol. 6. 565-581. Stanford, Calif. : Published for the Stanford Linguistics Association by the Center for the Study of

- Language and Information, Stanford University.
- Ini Talk Show (2014) Ini Talk Show - Sheila On 7 Part 4/4 - Eross, Duta, Adam dan Brian SHEILA ON 7. *Youtube*. September 3, 2014. https://www.youtube.com/watch?v=z0_QFwo5Mj0&t=480s [2018 年 12 月 16 日アクセス] .
- Jumariam (ed.) (2000) *Petunjuk praktis berbahasa Indonesia*. Cet. ke-6. Jakarta: Pusat Bahasa.
- 加藤陽子 (2010) 『話し言葉における引用表現：引用標識に着目して』 くろしお出版.
- 小林好日 (1936) 『日本文法史』 刀江書院.
- Schegloff, Emanuel A and Harvey Sacks (1973) Opening up Closings. *Semiotica*. 8: 289-327.
- Sneddon, James Neil (2003) Digglosia in Indonesian. *Bidragen tot de Taal, Land- en Volkenkunde*. 159: 519-549.
- (2006). *Colloquial Jakartan Indonesian*. Canberra : Pacific Linguistics, Research School of Pacific and Asian Studies, Australian National University.
- Sneddon, James Neil, Alexander Adelaar, Dwi N. Djenar, Michael C. Ewing (2010) *Indonesian: A Comprehensive Grammar*. New York: Routledge.

グロスにおける人称代名詞の表記

1SG:	first person singular	3PL:	third person plural
2SG:	second person singular	1PLI:	first person plural (inclusive)
3SG:	third person singular	1PLE:	first person plural (exclusive)

文字化に用いた転写記号の一覧

会話の文字化に用いた記号は以下の通りである。これらは、2008 年に刊行された『社会言語科学』第 10 巻 2 号の特集「相互行為における言語使用：会話データをを用いた研究」に掲載されていた記号に、必要に応じて追加・修正を施したものである。

[SR 10:01]	事例の右下にある[]内のアルファベットと数字は、その事例がどのトランスクリプトのどの部分の抜粋かを示す。 左の例では、SR というタイトルのトランスクリプト 10 ページの 1 行目から抜粋したことを示す。	iya::::	直前の音が引き延ばされていることは、コロンで示される。コロンの数は引き延ばしの長さに比例している。
		hhh	小さく短い笑い声は h で示す。h の数はそれぞれの音の長さに比例している。
iya.	下降（文末）イントネーション	i(h)ya(h)	笑いながら発話が産出されるとき、そのことは、呼吸を伴う音のあとに(h)を挟むことで示される。
iya,	継続イントネーション	((笑い))	大きく長い笑い声。

iya?	上昇（文末）イントネーション。	¥iya¥	発話が笑いながらなされているわけではないが、にやにやしながらなど笑い声でなされていることを示すときは該当箇所を¥¥で挟む。
iyaꞤ	文末におけるイントネーションのわずかな上昇。	<u>iya</u>	特に大きな声で発話された箇所は下線によって示す。
↑i↓ya	極端な音調の上がり下がりはそれぞれ上向き矢印と下向き矢印で示す。左の例では、iの部分のみ音調が上昇し、↓向き矢印以降は元に戻ったことを表している。	°iya°	特に小さな声で発話された箇所は該当箇所を°で挟むことで示す。
		[]	2人の発話が重なっている箇所は、角括弧で示す。
=	2つの発話の間に無音区間が全くないことを等号（=）で表す。	>iya<	発話のスピードが目立って速くなる部分は、該当箇所を左開きの不等号と右開きの不等号で挟む。
(0.3)	()内の数字は無音区間の秒数を表す。秒数は小数点第一位までを示す。	<iya>	発話のスピードが目立って遅くなる部分は、該当箇所を右開きの不等号と左開きの不等号で挟む。
iy-,	途中で途切れた不完全な発話をハイフンとカンマによって示す。	(())	筆者のコメントや補足情報、音声に現れない聞き手の反応など。

Sebuah Tinjauan atas Singkatan, Akronim, dan Politik 略語、頭字語と政治についての一分析

Edy Priyono (Universitas Kyoto Sangyo)
エディ・プリヨノ (京都産業大学)

要旨

略語及び頭字語は、インドネシア社会の時流を映しながらか、次々に新たに作り出される。インターネット、新聞、雑誌等の印刷メディアで多用され、インドネシア語の顕著な特徴となっている。したがって、インドネシアの現代史や社会・文化の研究をする上で頭字語の知識は大変有用である。頭字語は表面の意味だけでなく、そこに込められた社会風刺やメッセージを読み解くことが重要である。本発表では、特に大統領選挙に伴ってインドネシアの雑誌等に登場した略語及び頭字語について分析を行い、インドネシアの新しい略語及び頭字語が社会的なメッセージになっていることを明らかにする。

2019 年の大統領選挙は、2014 年の大統領選挙に続いて、再びジョコウィ(Jokowi)とプラボウォ(Prabowo)の戦いになったが、新たな頭字語が新たな時流を象徴している。

まず、インターネットに関連するものが登場し、インドネシア社会が 5 年前に比べて圧倒的なスマートフォン社会になっていることを映している。例えば、Jangkar Bejo は Jaringan Rakyat Bersama Jokowi (ジョコウィとともにある市民ネットワーク)、Seknas JOKOWI は Sekretariat Nasional Jaringan Organisasi dan Komunitas Warga Indonesia (インドネシア国民の組織および共同体の全国ネットワーク事務局)、Ninja は Negeriku Indonesia Jaya (私たちの国、栄光のインドネシア)の頭字語である。フェイクニュースが流れないようにインターネットを監視する動きも、Mafindo、つまり Masyarakat Anti Fitnah Indonesia (インドネシアアンチフェイクニュース団体) という頭字語になった。

一方、プラボウォ陣営で使われている頭字語は、Koppasandi、つまり Komando Ulama Pemenangan Prabowo Sandi (プラボウォ大統領とサンディ副大統領の勝利をイスラム教の宗教指導者たちに命令せよ)である。宗教政党ではないにもかかわらず Ulama (ウラマーと呼ばれるイスラム教の宗教指導者) という単語を使うところに、スハルト政権崩壊後のインドネシア社会でみられるイスラム教の浸透を利用しようとする考えが見て取れる。

2014 年の大統領選挙との 1 つの違いは、インターネット上ででっちあげの候補者が現れたことである。そこでもやはり頭字語が使われていた。冗談でインターネット上にでっちあげの候補者のポスターをのせ、Dildo という頭字語、つまり Nurhadi Aldo (でっちあげ大統領候補者)、を使ったのは、5 年前と同じジョコウィ(Jokowi)とプラボウォ(Prabowo)の戦いに失望した若者たちであった。

このように、新しい頭字語やその意味を知ることによって、インドネシア人の社会風刺の精神、あるいは今現在のインドネシア社会を理解することができる。

1. Pendahuluan

Arti politik secara singkat adalah suatu kegiatan untuk memperoleh kekuasaan. Dalam kegiatan

tersebut aktor-aktor politik (pemerintah, tokoh-tokoh partai, dan politikus) terlibat. Di kalangan aktor-aktor politik selalu ada persaingan atau pertarungan untuk meraih kekuasaan pada struktur pemerintahan. Kekuasaan pada struktur pemerintahan di Indonesia ada tiga, yaitu: kekuasaan eksekutif, kekuasaan legislatif, dan kekuasaan yudikatif. Di negara Republik Indonesia kekuasaan eksekutif dipegang oleh Presiden dan Wakil Presiden. Kekuasaan legislatif dipegang oleh Dewan Perwakilan Rakyat (DPR) dan Majelis Permusyawaratan Rakyat (MPR). Kekuasaan yudikatif dipegang oleh Mahkamah Agung (MA), Mahkamah Konstitusi (MK), dan Komisi Yudisial (KY). Presiden dan Wakil Presiden dipilih langsung oleh rakyat melalui Pemilihan Presiden (Pilpres). Anggota DPR dan MPR dipilih langsung oleh rakyat melalui Pemilihan Legislatif (Pileg). Pilpres dan Pileg diadakan lima tahun sekali. Tanggal 17 bulan April 2019, adalah tanggal spesial bagi masyarakat Indonesia karena untuk pertama kalinya Pemilu (Pemilihan Umum) serentak diselenggarakan. Pemilihan umum serentak artinya pemilihan legislatif dan pemilihan presiden diselenggarakan pada tanggal yang sama. Dalam sejarah Pemilu di Indonesia, selama ini Pileg (pemilu legislatif) diadakan lebih dulu. Setelah itu, baru Pilpres (Pemilihan Presiden). Pileg dan Pilpres dilaksanakan serentak di seluruh wilayah Indonesia pada hari Rabu tanggal 17 April 2019. Tetapi, pelaksanaan pemilu di luar negeri berbeda. Tanggal dan hari pemilihan di luar negeri ditetapkan oleh panitia pemilihan setempat di masing-masing negara. Pemilih di luar negeri juga bisa memilih melalui pos. Pemilih di luar negeri hanya bisa memilih Presiden dan anggota DPR di daerah pemilihan DKI Jakarta. Sedangkan, pemilih di Indonesia berhak untuk memilih Presiden, anggota Dewan Perwakilan Rakyat Republik Indonesia (DPR RI), Dewan Perwakilan Rakyat Daerah Provinsi, Dewan Perwakilan Daerah Kabupaten/Kota, dan Dewan Perwakilan Daerah Republik Indonesia (DPD RI).

2. Pemilihan Legislatif dan Pemilihan Presiden

Pemilihan legislatif 2019 diikuti oleh 16 partai politik nasional dan 4 partai lokal. Empat partai lokal ini adalah partai politik di Aceh. Hanya pemilih di Aceh yang memilih mereka. Nama 16 partai politik nasional peserta pemilu 2019 berdasarkan nomor urut adalah sebagai berikut.

- (1) Partai Kebangkitan Bangsa (PKB)
- (2) Partai Gerakan Indonesia Raya (Gerindra)
- (3) Partai Demokrasi Indonesia Perjuangan (PDIP)
- (4) Partai Golongan Karya (Golkar)
- (5) Partai Nasional Demokrat (Nasdem)
- (6) *Partai Gerakan Perubahan Indonesia (Garuda)*
- (7) *Partai Berkarya*
- (8) Partai Keadilan Sejahtera (PKS)
- (9) *Partai Persatuan Indonesia (Perindo)*
- (10) Partai Persatuan Pembangunan (PPP)
- (11) *Partai Solidaritas Indonesia (PSI)*
- (12) Partai Amanat Nasional (PAN)
- (13) Partai Hati Nurani Rakyat (Hanura)
- (14) Partai Demokrat

- (15) Partai Bulan Bintang (PBB)
- (16) Partai Keadilan dan Persatuan Indonesia (PKPI)

Partai yang ditulis dengan huruf miring (huruf kursif atau italic) adalah partai baru (nomor 6, 7, 9, dan 11). Yang lain adalah partai politik peserta Pileg 2014.

Setiap partai politik harus mendapat suara minimal 4% (ambang batas) dari total suara pemilih kalau mereka mau menempatkan kadernya di parlemen Senayan (menjadi anggota DPRD RI).

Pemilihan presiden juga diselenggarakan pada hari Rabu, 17 Juli 2019. Pemilihan presiden diadakan untuk menentukan Presiden dan Wakil Presiden Republik Indonesia yang baru untuk periode 2019-2024. Pemilihan presiden 2019 diikuti oleh dua pasangan calon presiden dan calon wakil presiden. Nama dan nomor urut mereka adalah sebagai berikut.

Nomor urut 1: Joko Widodo dan Ma'ruf Amin

Nomor urut 2: Prabowo Subianto dan Sandiaga Salahuddin Uno

Pada Pilpres 2014, calonnya juga Joko Widodo dan Prabowo Subianto. Jadi, Pilpres 2019 seperti pertandingan ulang karena calon presidennya sama.

Pemilu legislatif dan pemilihan presiden tahun 2019 mendapat perhatian dari berbagai media di luar negeri juga. Bahkan laman pencarian Google juga turut memeriahkan Pemilu 2019 melalui gambar di mesin pencari yang disebut Google Doodle. Doodle adalah kreasi temporer untuk laman pencarian Google yang memperingati sebuah peristiwa. Pada Rabu, 17 April 2019, Google Doodle memuat orang yang mengantre di tempat pemungutan suara untuk memasukkan surat suara ke kotak suara. Doodle menggambarkan keberagaman fisik orang-orang tersebut mulai dari generasi milenial, penyandang disabilitas, dan orang tua.

3. Tujuan Penulisan

Makalah ini ditulis untuk melanjutkan tulisan penulis yang telah dimuat di Jurnal Bahasa dan Budaya Himpunan Pengkaji Indonesia Seluruh Jepang (Priyono 2015:12-21).

Kali ini makalah ini ditulis dengan tujuan untuk mengetahui singkatan dan akronim yang muncul di media cetak pada Pemilu 2019. Makalah ini juga akan membandingkan singkatan dan akronim yang muncul pada Pemilu 2014 dengan singkatan dan akronim yang muncul pada Pemilu 2019. Selain itu, makalah ini akan mencoba untuk menyoroti latar belakang pembuatan singkatan dan akronim tersebut.

4. Data

Data untuk penulisan makalah ini ada dua, yaitu:

- (1) Data Primer: Majalah Tempo Edisi Oktober 2018 sd. Oktober 2019
- (2) Data Sekunder: Surat Kabar, Media Online, spanduk dan baliho

5. Akronim dan Singkatan

Akronim berbeda dengan singkatan. Akronim adalah kependekan yang berupa gabungan huruf awal, gabungan suku kata, atau gabungan huruf awal yang dilafalkan seperti kata biasa (dibaca seperti satu kata). Pembentukan akronim ada dua, yaitu:

- (1) Analogi: Gabungan huruf awal atau suku kata yang beraturan, misalnya ABRI [*Angkatan Bersenjata Republik Indonesia*], parpol [*partai politik*].
- (2) Anomali: Gabungan suku kata yang tidak beraturan, misalnya Garuda [*Gerakan Perubahan Indonesia*].

Singkatan adalah pemendekan kata dengan cara mengambil huruf awal dari beberapa kata, lalu dilafalkan satu persatu (huruf demi huruf), misalnya UUD [*Undang-Undang Dasar*] atau dilafalkan sesuai dengan bentuk lengkapnya, misalnya dll. [*dan lain-lain*] bukan [*de-el-el*]. Kebiasaan menyingkat kata adalah hal biasa di Indonesia. Orang Indonesia suka membuat akronim dan singkatan. Akronim dan singkatan itu dibuat ketika ada suatu kejadian, kegiatan, dan peristiwa penting. Akronim dan singkatan itu muncul dalam bahasa lisan dan bahasa tulisan.

6. Singkatan dan Akronim yang Berhubungan dengan Pileg dan Pilpres

Menjelang Pemilu 2019 muncul berbagai singkatan di media cetak dan media online. Tetapi, sebagian besar singkatan yang muncul dalam Pileg 2019 adalah singkatan yang juga muncul dalam Pileg 2014. Berikut ini beberapa contoh singkatan dan akronim yang berhubungan dengan Pileg (pemilihan legislatif) dan Pilpres (pemilihan presiden).

Tabel 1 (表 1) : Daftar Singkatan dalam Pileg dan Pilpres 2019

(国民議会議員選挙及び大統領選挙に関連する略語のリスト)

No.	Singkatan 略語	Arti 意味
1	KPU	Komisi Pemilihan Umum 中央選挙管理委員会
2	DPT	Daftar Pemilih Tetap 確定有権者名簿
3	DPK	Daftar Pemilih Khusus 特別な選挙人名簿
4	TPS	Tempat Pemungutan Suara 投票所
5	PSU	Pemungutan Suara Ulang 再選挙
6	DPR	Dewan Perwakilan Rakyat 国民議会
7	DPD	Dewan Perwakilan Daerah 地方代表議会
8	DPRD	Dewan Perwakilan Rakyat Daerah 地方議会
9	MPR	Majelis Permusyawaratan Rakyat 国民協議会
10	MK	Mahkamah Konstitusi 憲法裁判所
11	KIK	Koalisi Indonesia kerja インドネシアのために合同して働こう
12	KIAM	Koalisi Indonesia Adil Makmur インドネシアの公平と繁栄のために合同しよう

Tabel 2 (表 2) : Daftar Akronim dalam Pemilihan Presiden

(大統領選挙に関連する頭字語のリスト)

No.	Akronim 頭字語	Arti 意味
1	Pilpres	pemilihan presiden 大統領選挙
2	capres	calon presiden 大統領候補者
3	cawapres	calon wakil presiden 副大統領候補者
4	(Sang) Sura	(Sang) Surat Suara 投票用紙
5	Join	Jokowi - Ma'ruf Amin
6	PAS	Prabowo - Sandiaga
7	Ninja	Negeriku Indonesia Jaya 私たちの国、栄光のインドネシア
8	Jangkar Bejo	Jaringan Rakyat Bersama Joko Widodo ジョコウィとともにある市民ネットワーク
9	Super	Suara Perempuan 女性たちの声
10	Rumah Jamaah	Relawan Utama Amanah Jokowi-Ma'ruf Amin ジョコウィとマルフ・アミンを信頼する最高のボランティア
11	Gojo	Golkar Jokowi ジョコウィのためのゴルカル
12	Padi	Prabowo - Sandi
13	Pride	Prabowo - Sandi Digital Team プラボウォとサンディのためのデジタルチーム
14	Rekat	Relawan Kawal TPS 投票所を守るボランティア
15	Koppasandi	Komando Oelama Pemenangan Prabowo - Sandi プラボウォ大統領とサンディ副大統領の勝利をイスラム学者たちに命令せよ
16	Dildo	Nurhadi Aldo (でっちあげ大統領候補者)
17	Mafindo	Masyarakat Anti Fitnah Indonesia インドネシアアンチフェイクニュース団体
18	ampibi	anak, menantu, paman, isteri, bibi 両生類=子供+婿/嫁, +おじ, +妻+おば
19	golput	Golongan putih 白い人々=棄権する人々
20	kumbo	kumpul kebo (kumpul=集まる+kebo=kerbau 水牛) 同棲元々ライバルだった人がタグを組むこと

6.1. Penjelasan tentang Singkatan dalam Pemilihan Legislatif

Singkatan nomor 1 sampai nomor 10 sudah muncul dalam Pemilu 2014. Penjelasan nya bisa dibaca dalam makalah penulis di Jurnal Bahasa dan Budaya Himpunan Pengkaji Indonesia Seluruh Jepang (Priyono 2015: 12-21).

Singkatan nomor 11 dan 12 adalah singkatan baru yang muncul dalam Pemilu 2019. Singkatan

nomor 11, Koalisi Indonesia Kerja (KIK) adalah koalisi partai yang mendukung Joko Widodo dan Ma'ruf Amin dalam pemilihan presiden 2019. Koalisi Indonesia Kerja terdiri dari Partai Demokrasi Indonesia Perjuangan, Partai Golkar, Partai Kebangkitan Bangsa, Partai Nasdem (Nasional Demokrat), Partai Persatuan Pembangunan, Partai Hanura, dan Partai Keadilan dan Persatuan Indonesia. Sekarang KIK menjadi partai pemerintah dan menguasai kursi DPR. Partai Golkar yang mendukung Prabowo dalam Pemilu 2014, berubah pendirian. Partai Golkar mendukung Jokowi dalam Pemilu 2019.

Selanjutnya, singkatan nomor 12, Koalisi Indonesia Adil Makmur (KIAM) adalah koalisi partai yang mendukung Prabowo dan Sandiaga Uno dalam pemilihan presiden 2019. Koalisi Indonesia Adil Makmur terdiri dari partai Gerindra, Partai Amanat Nasional, Partai Keadilan Sejahtera, Partai Demokrat. Sekarang KIAM menjadi partai oposisi tetapi tidak menguasai kursi DPR.

6.2. Penjelasan tentang Akronim dalam Pemilihan Presiden

Akronim nomor 1 sampai 3 sudah muncul dalam Pemilu 2014. Penjelasannya bisa dibaca dalam makalah penulis di Jurnal Bahasa dan Budaya Himpunan Pengkaji Indonesia Seluruh Jepang (Priyono 2015: 12-21).

Akronim nomor 4 sampai nomor 18 adalah akronim baru yang muncul dalam Pemilu 2019. Akronim nomor, Sang Sura (surat suara) adalah maskot Pemilu 2019. Pada Pemilu 2014, maskotnya adalah Sikora atau Si Kotak Suara. Maskot Pemilu 2019, Sang Sura, dilambangkan dengan surat suara sebagai simbol kedaulatan rakyat dan paku untuk mencoblos surat suara tersebut.

Akronim nomor 5 dan 6 (Join dan PAS) adalah akronim untuk pasangan Capres dan Cawapres 2019.

Akronim nomor 7 sampai 11 (Ninja, Jangkar Bejo, Super, Rumah Jamaah, Gojo) adalah akronim untuk kelompok relawan pendukung Jokowi dan Ma'ruf Amin.

Akronim nomor 12 sampai 15 (Padi, Pride, Rekat, Koppasandi) adalah kelompok akronim untuk relawan pendukung Prabowo dan Sandiaga Uno.

Akronim nomor 16 (Dildo) adalah akronim untuk pasangan Capres dan Cawapres fiktif. Dalam Pemilu 2019 hanya ada dua pasangan Capres dan Cawapres. Dua Capres (Jokowi dan Prabowo) adalah Capres yang juga bersaing dalam Pemilu 2014.

Beberapa pemuda di Yogyakarta pada tanggal 3 Januari 2019 membuat Capres fiktif dengan nomor urut 10. Nurhadi benar-benar ada. Dia adalah seorang tukang pijat di kota Kudus. Sedangkan Aldo adalah tokoh fiktif. Foto Aldo adalah foto rekayasa atau gabungan dari seorang politikus dan seorang politikus yang lain. Kalau koalisi Jokowi adalah Koalisi Indonesia Kerja dan koalisi Prabowo adalah Koalisi Indonesia Adil Makmur, koalisi pasangan Nurhadi-Aldo adalah Koalisi Tronjal Tronjol (bahasa Jawa) yang artinya sembarangan.

Akronim nomor 17, Mafindo (Masyarakat Anti Fitnah Indonesia) muncul dalam Pemilu 2019 karena selama kampanye ada banyak kampanye hitam atau berita bohong (hoaks). Berdasarkan data Mafindo, dari Januari sampai Maret 2019 ada 47 hoaks untuk Jokowi dan ada 17 untuk Prabowo. Berita bohong ini disebarkan oleh orang-orang yang tidak bertanggung jawab melalui media sosial Facebook dan WhatsApp.

Akronim nomor 18, ampibi (anak, menantu, paman, isteri, bibi) muncul karena belakangan ini ada gejala nepotisme. Banyak keluarga pejabat dan politikus yang mencalonkan diri dalam Pemilu.

Akronim nomor 19, golput (golongan putih), adalah akronim yang selalu muncul dalam Pemilu.

Golput atau orang yang tidak mau menggunakan hak pilihnya dalam Pemilu sudah ada dari tahun 1971. Ada dua golput yaitu golput ideologis dan golput administratif. Golput ideologis adalah orang-orang yang tidak suka dengan semua parpol dan Capres. Golput administratif adalah orang-orang yang tidak mendapat undangan untuk memilih. Menurut data KPU, golput pada Pemilihan Presiden 2019 adalah 19,24 %. Prosentase golput untuk Pilpres 2019 ini lebih kecil dibandingkan dengan prosentase Pilpres 2014 (30,42%).

Akronim nomor 20, kumbo (kumpul kebo), adalah ungkapan dari bahasa Jawa. Artinya, hidup bersama sebagai suami isteri di luar pernikahan. Politik kumbo muncul karena Prabowo bertemu dengan Megawati sesudah Pemilu.

7. Akronim dan Latar Belakang Pembuatannya

Akronim bahasa Indonesia adalah bukti kreativitas pembuatnya. Tetapi, selain itu, beberapa akronim dibuat karena ada misi politik di belakangnya. Berikut ini beberapa akronim yang ada misi politiknya. Misalnya, akronim nomor 10, rumah jamaah (Relawan Utama Amanah Jokowi-Ma'ruf Amin). Mengapa bukan 'rumah Join' ? Rumah Jamaah terkesan lebih Islami. Misi Politiknya adalah untuk menunjukkan kedekatan Jokowi dengan kelompok Islam tertentu. Lalu, akronim nomor 15, koppasandi (Komando Oelama Pemenangan Prabowo - Sandi). Akronim ini dan artinya ini seolah-olah dibuat secara paksa. Padahal, sebenarnya ada misi politik di belakangnya. Koppasandi bisa diasosiasikan menjadi Koppasanda (Komando Pasukan Sandi Yudha). Koppasandha berubah menjadi Kopassus (Komando Pasukan Khusus). Misi politik akronim ini adalah untuk menunjukkan bahwa Prabowo pernah menjadi Danjen Kopassus. Pembuatan akronim juga mempunyai latar belakang politik. Misalnya, majalah Tempo edisi tanggal 27 Maret 1993, menyebutkan adanya “demam AIDS” setiap kali pemilu selesai. AIDS bukan singkatan tetapi akronim karena dibaca seperti satu kata. Arti akronim ini dalam bahasa Inggris adalah *acquired immune deficiency syndrome*. Tetapi dalam bahasa Indonesia artinya “Aku Ingin Ditelepon Soeharto”. Begitulah, setelah pemilu, Presiden Soeharto biasanya menelepon beberapa orang untuk diminta menjadi menteri. Jadi, banyak politikus yang mengharapkan mendapat telepon dari Presiden Soeharto.

8. Hasil Pemilihan Presiden dan Pemilihan Legislatif 2019

Salah satu daya tarik Pemilu 2019 adalah adanya pemilih muda atau pemilih milenial. Jumlah pemilih milenial kurang lebih 85 juta orang (sekitar 45 persen dari jumlah total pemilih). Jumlah total berdasarkan data KPU adalah 192.866.254 orang. Jumlah pemilih di dalam negeri 190.779.969. Jumlah pemilih di luar negeri 2.086.285. (Farisa 2019). Pemilih milenial adalah orang-orang yang rentang usianya 18 sampai 36 tahun.

Komisi Pemilihan Umum (KPU) mengadakan rapat pleno rekapitulasi penghitungan suara pada Selasa dinihari 21 Mei 2019. Jumlah surat suara pasangan nomor urut 1 (Jokowi dan Ma'ruf Amin) adalah 85.607.362 (55,5 %). Sedangkan, pasangan Prabowo dan Sandiaga Uno adalah 68.650.239 (44,5%). Berdasarkan rekapitulasi ini, KPU menyatakan pasangan Jokowi dan Ma'ruf Amin sebagai pemenang Pilpres 2019. Pasangan Jokowi dan Ma'ruf Amin menang di 21 propinsi. Pasangan Prabowo dan Sandiaga Uno menang di 13 propinsi.

Sedangkan hasil Pileg 2019, sebagai pemenang tiga besar adalah sebagai berikut. PDIP nomor 1 (19,33%), Gerindra nomor 2 (12,57%), dan Golkar nomor 3 (12,31%). Berdasarkan ambang batas parlemen

atau *parliamentary threshold* untuk pemilu 2019, partai politik yang mendapat suara lebih dari 4 persen berhak mengirimkan kadernya ke parlemen. Sembilan partai politik lolos ke parlemen. Tujuh parpol tidak lolos ke parlemen. Pasca pengumuman Pileg 2019, pada tanggal 21 dan 22 Mei 2019, terjadi demonstrasi yang berakhir dengan kerusuhan di Jakarta. Sembilan orang tewas di Jakarta.

9. Sengketa Pemilihan Presiden dan Pemilihan Legislatif 2019

Setelah KPU menetapkan hasil Pileg, pasangan nomor 2 (Prabowo dan Sandiaga Uno) memutuskan untuk menggugat hasilnya ke Mahkamah Konstitusi (MK). Mahkamah Konstitusi mengadakan sidang pertama Perselisihan Hasil Pemilu Umum (PHPU) 2019 pada Jumat, 14 Juni 2019. Sidang MK berakhir pada Kamis, 27 Juni 2019 sekitar pukul 21.00. Sembilan hakim MK bergantian membacakan putusan setebal 1.944 halaman. Dalam kesimpulannya, majelis hakim konstitusi menyatakan semua dalil hukum yang diajukan tim hukum Prabowo-Sandiaga tidak beralasan. Intinya menolak seluruh gugatan Prabowo dan mengukuhkan kemenangan Jokowi dan Ma'ruf Amin. Berdasarkan keputusan MK ini, tidak ada jalan lagi bagi pasangan nomor 2 untuk menggugat hasil pemilihan presiden 2019.

10. Rekonsiliasi Pasca Pemilu

Rekonsiliasi berarti perbuatan memulihkan hubungan persahabatan ke keadaan semula (Kamus Besar Bahasa Indonesia, Edisi ke-4, halaman 1158). Pemilu 2019 telah berakhir. Pemenangnya adalah Jokowi dan PDIP. Kata rekonsiliasi sangat tepat digunakan karena selama kampanye pemilu masyarakat Indonesia seperti dibagi menjadi dua kelompok, yaitu nasionalis dan islamis.

Pendukung Jokowi disebut kelompok nasionalis, sedangkan pendukung Prabowo disebut kelompok islamis. Bahkan ada seorang politikus yang menyebut adanya partai setan dan partai tuhan. Selama kampanye terjadi ketegangan antara kubu nasionalis dan kubu islamis. Setelah pemilu berakhir, pemerintah berusaha untuk meredakan ketegangan dengan tawaran kepada kubu islamis untuk berkoalisi di kabinet. Setelah pengumuman hasil pemilu sehingga terjadi kerusuhan pada 21-22 Mei 2019, kubu Jokowi (nasionalis) menghubungi kubu Prabowo (islamisme) untuk membicarakan rekonsiliasi. Dalam pertemuan dua kubu tersebut dibicarakan kemungkinan bergabungnya Prabowo dan Gerindra ke pemerintahan Jokowi.

Dalam politik, tidak ada lawan dan teman abadi, yang ada adalah kepentingan abadi. Ungkapan ini sangat cocok untuk memahami kondisi politik di Indonesia. Prabowo akhirnya betul-betul bergabung ke kubu Jokowi. Prabowo ditunjuk oleh Presiden Jokowi untuk menjadi Menteri Pertahanan dalam Kabinet Indonesia Maju periode 2019 – 2024.

11. Kabinet Indonesia Maju

Rabu, 23 Oktober 2019, sambil duduk di tangga Istana Negara, Jakarta, Presiden Jokowi mengumumkan susunan kabinetnya yang disebut Kabinet Indonesia Maju. Ada 38 menteri dalam kabinet ini. Komposisinya adalah sebagai berikut. Dua puluh satu menteri adalah profesional dan tujuh belas Menteri adalah birokrat. PDIP sebagai pemenang pemilu legislatif mendapat jatah 5 menteri sedangkan Gerindra yang bergabung ke kubu Jokowi mendapat jatah 2 menteri (Prabowo sebagai Menteri Pertahanan dan Edhy Prabowo sebagai Menteri Kelautan dan Perikanan).

Melalui akun Twitter @jokowi, Presiden menyatakan bahwa para menteri terpilih adalah sosok yang inovatif, produktif, pekerja keras dan cepat. Sosok yang tidak terjebak rutinitas yang monoton. Presiden juga

ingin agar para menteri sering mengeluarkan terobosan baru dan tidak terpaku pada kebiasaan lama.

12. Penutup

Makalah ini kelanjutan makalah penulis yang telah dimuat di di Jurnal Bahasa dan Budaya Himpunan Pengkaji Indonesia Seluruh Jepang, Nomor 21.

Makalah ini juga ditulis dengan tujuan untuk mengetahui singkatan dan akronim yang muncul di media cetak pada Pemilu 2019. Makalah ini juga akan membandingkan singkatan dan akronim yang muncul pada Pemilu 2014 dengan singkatan dan akronim yang muncul pada Pemilu 2019. Selain itu, makalah ini akan mencoba untuk menyoroti latar belakang pembuatan singkatan dan akronim tersebut.

Jumlah total pemilih pemilu 201, berdasarkan data KPU adalah 192.866.254 orang. Jumlah pemilih di dalam negeri 190.779.969. Jumlah pemilih di luar negeri 2.086.285. (Kompas, 8 April 2019). Salah satu daya tarik Pemilu 2019 adalah adanya pemilih muda atau pemilih milenial. Jumlah pemilih milenial kurang lebih 85 juta orang (sekitar 45 persen dari jumlah total pemilih). Karakteristik kelompok milenial adalah melek digital dan adaptif dengan teknologi. Dua Capres dan Cawapres pemilu 2019 berusaha untuk mendekati pemilih milenial. Mereka memermak penampilan dan membuat konten-konten untuk media sosial (Facebook dan Twitter) yang bisa diterima oleh kelompok milenial. Hasil survei menunjukkan bahwa Jokowi mendapat dukungan sekitar 52 prosen dari kelompok milenial. Hal ini menunjukkan adanya sambutan positif pemilih muda terhadap program-programnya.

Dalam politik, tidak ada musuh dan teman abadi, yang ada kepentingan abadi. Ungkapan ini sangat cocok untuk memahami kondisi politik di Indonesia. Prabowo akhirnya bergabung ke kubu Jokowi. Prabowo ditunjuk oleh Presiden Jokowi untuk menjadi Menteri Pertahanan dalam Kabinet Indonesia Maju periode 2019 – 2024.

Rujukan

- Farisa, Fitria Chusna (2019) Jumlah Pemilih Pemilu 2019 Bertambah Jadi 192.866.254. *Kompas*, April 8, 2019. <https://nasional.kompas.com/read/2019/04/08/21501411/> (diakses 13 Oktober 2019).
- Priyono, Edy (2015) 「Sebuah Tinjauan atas Akronim dan Singkatan dalam Pemilu 2014」『インドネシア言語と文化』第 21 号: 12-21

Lampiran: Sumber Data

Daftar Pemberitaan tentang Pemilu 2019 di Majalah *Tempo* Edisi 5-11 Maret 2018 sampai 8-14 Juli 2019

5-11 Maret 2018 “Galau Jokowi”		
OPINI		
“Jokowi Versus Jokowi”	p.25	
LAPORAN UTAMA		
“Kunci Nomor Dua”	p. 28-33	
		2 Artikel
15-21 Oktober 2018 “Adu Balap Calon Ban Serep”.		
LAPORAN UTAMA		
“Catatan Bukan Si Boy”	p. 28-30	
“Rayuan Bekas Seteru”	p.31-32	
“Berkat Bunda dan Sahabat Amerika”	p. 33-35	
		3 Artikel
29 Oktober-4 November 2018 “Bayang-Bayang Tim Bayangan”		
LAPORAN UTAMA		
“Tagar dari Balik Awan”	p.32-33	
“Riwayat Sontoloyo Viral”	p.34-35	
“Dari Alpha ke Meikarta”	p.36-37	
		3 Artikel
17-23 Desember 2018 “Jokowi dan Faktor Ma’ruf”		
OPINI		
“Faktor Ma’ruf dalam Politik Jokowi”	p.25	
LAPORAN UTAMA		
“Daya Ungkit Satu Setrip”	p.28-31	
		2 Artikel
4-10 Februari 2019 “Waswas Golput”		
LAPORAN UTAMA		
“Lampu Kuning Golongan Putih”	p.28-33	
“Diskon Tiket di Bilik Suara”	p.34-35	
		2 Artikel
11-17 Februari 2019 “Prahara Jiwasraya”		
TEMPO DOELOE		
“Berkat Pemilih Muda”	p.18	
NASIONAL		
“Bersama Bobby Mengejar Anak Muda”	p.28-31	
“Bandul Politik Generasi Y”	p.32-33	
“Muda-Mudi Pemilu Sekarang”	p.34-35	
		4 Artikel

25 Februari-3 Maret 2019 “Perang Bubat di Tanah Jawa”		
LAPORAN UTAMA		
“Padang Kurusetra Dua Kandidat”	p.30-31	
“Palagan Jawadwipa”	p.32-33	
“Dari Cantrang ke Tanah Nenek Moyang”	p.36-37	
“Ngalap Restu Kiai dan Koruptor”	p.38-39	
		4 Artikel
15-21 April 2019 “Saatnya Memilih”		
NASIONAL		
“Berebut Rabu Putih”	p.30-32	
LIPUTAN KHUSUS Pilpres 2019		
“Ring -1 Dua Kandidat”	p.45-47	
“Penyelinap Istana dan Sahabat Lawas ”	p.49	
“Lingkaran Inti dari Surakarta”	p.50-51	
“Bawahan dengan Tugas Tambahan”	p.52-53	
“Bohir Habis-Habisan”	p.64-65	
“Sahabat dari Barak”	p.66	
“Teman Bermain dan Berdiskusi”	p.68-69	
“Orang Dekat Setiap Saat”	p.74-75	
		9 Artikel
22-28 April 2019 “Rahasia Kemenangan”		
OPINI		
“Setelah Kemenangan”	p.27	
LAPORAN UTAMA		
“Sekali Lagi”	p.30-31	
“Dengan Corona ke Tanah Suci”	p.32-34	
“Abang-Ijo di Kandang Banteng”	p. 36-37	
“Presiden Jakarta Selatan”	p.38-39	
“Berkat Agama dan Hoaks”	p.44-45	
“Suara dari Kantong Lama”	p.46-47	
		7 Artikel
20-26 Mei 2019 “Sesumbar Berang 22 Mei		
OPINI		
“Kesatria atawa Penyulut Petaka”	p.23	
LAPORAN UTAMA		
“Detik-Detik yang Menentukan”	p.26-30	
“Satu Pemilu Dua Sikap”	p.32-33	
“Klaim Minim Bukti”	p. 34-35	
		4 Artikel

3-9 Juni 2019 “Rusuh oleh Siapa”		
OPINI		
“Amuk yang Sia-Sia”	p.26	
LAPORAN UTAMA		
“Paket dalam Tas Raket dan Skenario 22 Mei”	p.28-33	
“Ambulans Penyuplai Amunisi”	p. 36-3	
		3 Artikel
1-7 Juli 2019 “Yang Lalu Biarlah Berlalu”		
LAPORAN UTAMA		
“Karpas Merah Buat Seteru”	p.30-33	
“Koalisi tanpa Dosa Orang Tua”	p.34-35	
“Akhir Laga”	p. 36-37	
		3 Artikel
8-14 Juli 2019 “Lelaki Gondrong dan Glock 42”		
OPINI		
“Keadilan bagi Korban Rusuh”	p.25	
LAPORAN UTAMA		
“Peluru Maut Siapa Punya”	p.28-30	
“Pria Lencir dengan Glock 42”	p.34-35	
		3 Artikel
TOTAL		49 Artikel

LAMPIRAN FOTO:



Foto 1 : Foto Spanduk Jokowi-Amin



Foto 2: Foto Spanduk Prabowo-Sandi

(Foto 1 dan 2: Diambil di Sanur, Bali pada tanggal 4 Maret 2019 oleh Edy Priyono)



Foto 3: Foto Surat Suara Presiden dan Wakil Presiden 2019 (bagian luar)



Foto 4: Foto Surat Suara Presiden dan Wakil Presiden 2019 (bagian dalam)



Foto 5: Foto Surat Suara Anggota DPR RI 2019

(Foto 3, 4, dan 5: Diambil di Otsu, Shiga pada tanggal 8 April 2019 oleh Edy Priyono)

インドネシア語応用教材に関する共同研究からの報告¹
**Laporan dari Penelitian mengenai Bahan Pengajaran Bahasa Indonesia
Terapan**

降幡正志（東京外国語大学）
原真由子（大阪大学）
森山幹弘（南山大学）

FURIHATA Masashi (Tokyo University of Foreign Languages)
HARA Mayuko (Osaka University)
MORIYAMA Mikihiro (Nanzan University)

Sinopsis

Makalah ini merupakan laporan dari penelitian bersama selama 3 tahun terakhir ini. Penelitian ini penelitian lanjutan dari penyusunan buku referensi Tata Bahasa Dasar Bahasa Indonesia yang dapat digunakan dalam pengajaran untuk penutur bahasa Jepang yang sudah diselesaikan oleh tiga peneliti pada tahun 2017 (http://www.tufs.ac.jp/ts/personal/furihata/ind_kyozai_bank/). Tujuan utama penelitian ini adalah meneliti bagaimana kata, frasa, dan unsur tata bahasa diterapkan dalam kalimat-kalimat aktual yang terdapat dalam korpus.

Makalah ini menerangkan cara penelitian yang memakai metode concordance dengan suatu korpus dari harian KOMPAS. Hasil penelitian menunjukkan bahwa suatu kata sering dipakai dengan kata-kata tertentu atau frasa tertentu. Juga disadari dari hasil penelitian bahwa referensi tata bahasa, keterangan dan contoh kalimat yang telah kami susun itu bersifat normatif.

Oleh karena itu, perlu diperhatikan pemakaian yang nyata dalam korpus dan juga aspek edukatif. Sedangkan, dari penelitian ini disadari juga keterbatasan jenis korpus yang sifatnya jurnalistis sehingga dibutuhkan jenis korpus yang lain. Sebagai suatu output dari penelitian ini direncanakan untuk menyusun suatu kumpulan contoh kalimat sebagai bahan pengajaran dan pembelajaran Bahasa Indonesia.

Makalah ini ditulis berdasarkan presentasi bersama pada pertemuan tahunan akademis dari Himpunan Peneliti Indonesia Seluruh Jepang (HPISJ) ke-50 pada bulan November tahun 2019 di Universitas Osaka.

1. 共同研究の目的と進捗状況

インドネシア語教材に関する共同研究については、2011 年の日本インドネシア学会のテーマ発

¹ 本論文は 2019 年 11 月 9 日に大阪大学豊中キャンパスで開催された第 50 回日本インドネシア学会研究大会において行ったテーマ発表「インドネシア語応用教材に関する共同研究からの報告」を基にまとめたものである。本研究は科学研究費助成事業（基盤研究 C）「日本におけるインドネシア語応用教材の研究と開発および教材バンクの拡張」（2016～2020 年）の助成を受けて実施している。森山については、上記科学研究費と併せて、2020 年度南山大学パッヘ研究奨励金 I-A-2 による研究助成を受けて研究を実施した。

表において、「インドネシア語教育の活性化のために」と題した発表に遡る²。そこで提起した課題とは、今世紀に入って以降、日本においてもインドネシア語学習者が減ったことに伴い、インドネシア語を教える教育機関が減少するとともに教員も減少し、独自の教材を開発する「体力」がなくなっているということであった。それに対して国内に散らばっている教育機関の教員が協力し、今後の日本のインドネシア語教育にとって必要である具体的な取り組みを進めるべきであるということを提案した。それを踏まえて、森山、降幡、原の3名は、既存の教育資源を最大限かつ有効に活用するための方策について具体的な議論を行い、2013年度の文部科学省の科学研究費の基盤研究に「日本におけるインドネシア語教材の分析と教材バンクの創設」という研究課題で応募し採択された³。その研究成果の一部として、2013年に摂南大学で開催された第44回日本インドネシア学会研究大会においてテーマ発表「インドネシア語の会話の授業について—ネイティブ教員の報告を手がかりとして—」で、東京外国語大学と大阪大学における会話の授業の実践と課題について発表を行った⁴。さらに2016年には愛知県立大学で開催された第47回日本インドネシア学会研究大会において「インドネシア語基本文法の記述：教材作成のための共同研究からの報告」と題して、インドネシア語の教材開発の中でも特に文法教材について行ってきた研究成果の一部を発表した⁵。その発表では、国内の教育機関でインドネシア語を教える際に利用することができる共通の基本文法について具体的な記述例を示して発表を行い学会員の批判を仰いだ。それを踏まえて、翌年の3月には試行版として31項目からなる『インドネシア語基本文法』（以下『基本文法』）を日本インドネシア学会の会員に公開した⁶。ここまでが第一期の共同研究の経緯である。

次に取り組んだ第二期の共同研究では、『基本文法』の記述において取り上げた文法項目及び例として取り上げた語が、実際の文の中でどのように使われているのかについて研究することとし、2016年度の文部科学省の科学研究費の基盤研究に「日本におけるインドネシア語応用教材の研究と開発および教材バンクの拡張」という研究課題で応募し採択された⁷。その研究の中間発表として、2019年の大阪大学で開催された第50回日本インドネシア学会研究大会において「インドネシア語応用教材に関する共同研究からの報告」と題して発表した。『基本文法』で例として採用した例文が果たして適切であったのか、ある語が文の中でどの語とどのように共起するのかなどについて、例を示しながら作業手順を報告するとともに、そこで見えてきた課題と今後の研究の方向性について報告した。本論文は、その発表の際に行われた質疑応答や批判を取り込みながらまとめたものである。

² 2011年の発表は、森山、降幡、原（2012）としてまとめている。

³ 科学研究費助成事業（基盤研究C）「日本におけるインドネシア語教材の分析と教材バンクの創設」（2013～2015年）の助成を受けて、平成25年度から3年間の共同研究を行った。

⁴ この発表内容は、森山他（2014）に掲載されている。

⁵ 2016年の発表は、原、森山、降幡（2017）としてまとめている。

⁶ 『基本文法』（試行版）は次のサイトに公開している。http://www.tufs.ac.jp/ts/personal/furihata/ind_kyozai_bank/.

⁷ 科学研究費助成事業（基盤研究C）「日本におけるインドネシア語応用教材の研究と開発および教材バンクの拡張」（2016～2020年）の助成を受けて、平成28年度から5年間の共同研究を実施しているところである。

2. 用例収集の作業手順と実例

本章では、『基本文法』に基づき、実例を示しながら用例収集の作業手順を述べていく。

2.1. 利用するコーパスデータとソフトウェア

日刊紙コンパス KOMPAS ウェブ版の記事が 2004 年 1 月から 12 月まで (計 33,391 件) テキストファイルの形式で利用できるものがあり、今回のプロジェクトではこれを用例収集のコーパスデータとして使用することとした。

なお、3 名で作業をする中で記事あるいは例文が重複することをなるべく避けるため、上述のコーパスを 2004 年 1 月～2004 年 3 月 (6,785 件)、2004 年 4 月～2004 年 6 月 (7,991 件)、2004 年 7 月～2004 年 9 月 (8,846 件) に区切り、3 名それぞれに担当として割り振ることにした。残りの 2004 年 10 月～2004 年 12 月 (9,739 件) は、予備としておくこととし、今回は用いていない。

上述のコーパスデータを分析し用例を抽出するために、コンコーダンスソフト AntConc⁸ を用いることとした。同ソフトは、Windows, Macintosh, Linux のいずれの OS にも対応するようプログラムが用意されているため、OS の違いにより作業が大幅に変わることを防ぐことができ、作業の手順や内容を共有することができる。後述するように、AntConc では「wordlist」「collocates」「concordance」の機能を主に使用する。

2.2. 対象となる語の確認と選定

用例の選定にあたっては、各文法項目から 10 語を選択し、それぞれの語に対して 10 の例文を収集することをおおよその目安とした。選択する約 10 語は、『基本文法』に記載されている語例から選ぶことになるが、その際にコーパスデータにおける「頻度」を参考とした。また「学習者にとってどの程度必要か」という観点も考慮した点である。以下、接頭辞 *memper-* (『基本文法』第 21 章) から、*memperpanjang* 「延長する」を例として作業手順を紹介していく。

まず、*memper-* を含む語を AntConc の「wordlist」機能を用いてコーパスデータで確認する。ただし、検索の際に注意しなければならないことがある。他動詞の場合、*meN-* 形の他に接頭辞 *di-* を伴う *di-* 形、接頭辞を伴わないゼロ形の 3 形態があり、それらをすべて確認する必要がある。また、代名詞の接語形 (*ku-*, *kau-*, *-ku*, *-mu*, *-nya*) や他の接辞 (例: *-lah*, *-kah*) などが当該の語に付されていることもあるので、そのような点も考慮しなければならない。

2004 年 4 月～2004 年 6 月の記事から他動詞の 3 形態それぞれの頻度を検索した結果、表 1a-c のようなデータが得られた。

これらのデータを検討し、*memperpanjang* が 3 形態のいずれにも出現しかつ頻度が比較的高いこと、また「ビザを延長する」など学習者にとって必要な語であることを考慮し、用例収集の対象の 1 つに含めることとした。

なお、表中に現れる *memperoleh* (*diperoleh*, *peroleh*) は、非常に頻度が高いが『基本文法』の語例には挙げられていない。また、*diperkirakan* も高頻度だが『基本文法』では「補足」の中で取り扱っているのみである。このような高頻度の語も確認する必要がある、また『基本文法』としてどう

⁸ AntConc は Laurence Anthony 氏の開発したフリーソフトウェアである。詳細については次のサイトを参照。

“AntConc Homepage”, Laurence Anthony's Website. <https://www.laurenceanthony.net/software/antconc/> (2020 年 2 月 18 日閲覧)。

取り扱うかを検討すべきであることもこの研究からわかってきた。

表 1a. *memper-* (meN-形)の頻度

順位	<i>memper-</i> (meN-形)	頻度
1	memperoleh	1,222
2	memperbaiki	595
3	mempertahankan	568
4	memperlihatkan	407
15	memperebutkan	125
16	memperluas	117
17	memperpanjang	108
18	mempersoalkan	99

表 1b. *memper-* (di-形)の頻度

順位	<i>memper-</i> (di-形)	頻度
1	diperkirakan	1,073
2	diperoleh	824
3	diperbaiki	191
4	diperhatikan	186
12	dipergunakan	104
13	diperlakukan	92
14	diperpanjang	92
15	diperdagangkan	89

表 1c. *memper-* (ゼロ形)の頻度

順位	<i>memper-</i> (ゼロ形)	頻度
1	peroleh	86
2	perhatikan	52
3	pelajari	28
4	pertahankan	26
19	perkenalkan	5
20	perketat	5
21	perpanjang	5
22	persembahkan	5

頻度を選択基準の 1 つとする一方で、作業の一環として辞書で語義や語法・用法を確認することとした。その際に用いた辞書は以下の 3 点である。

- ・ *Kamus Besar Bahasa Indonesia*⁹
- ・ *A Comprehensive Indonesian-English Dictionary*¹⁰
- ・ *The Learner's Dictionary of Today's Indonesian*¹¹

辞書の参照は、語の意味や語形成のほか、補文節や二重目的語、副詞節など、どのような文型をとり得るかを再確認するために行うものである。

⁹ Badan Pengembangan dan Pembinaan Bahasa (2016).

¹⁰ Stevens and Schmidgall-Tellings (2010).

¹¹ Quinn (2001).

2.3. 用例の収集

2.3.1. 共起しやすい語の確認

用例を収集する際に、対象となる語がコロケーション、すなわちどのような語と共起するかを事前に確認しておくことは、当該の語の具体的な用法を知る上で有効である。*AntConc* では「collocates」の機能を使うことにより、当該の語の前（左側）や後（右側）に現れる語の頻度を調べることができる。

上述の *memperpanjang* に対して直前および直後のコロケーションを調べると、直前では助動詞類や否定詞 *tidak*、関係詞 *yang*、前置詞 *untuk* や *dengan* などと、直後では *masa* や *waktu* など時間・期間を表す語や「契約 (*kontrak*)」や「許可 (*izin*)」など期間を伴う名詞などが共起しやすいことが見えてくる。*diperpanjang* の場合は、直前では *memperpanjang* と似た傾向が見られるのに対し、直後では数詞や「～まで

(*hingga, sampai*)」、「～なので (*karena*)」などが多く、*diperpanjang* の後には期間・期限や理由が続きやすいことがわかる。

対象となる語の直前や直後のみでなく、左右それぞれコロケーションが何語以内に現れるかを設定することも可能である。表 2a と表 2b は、*memperpanjang* および *diperpanjang* につき、左右それぞれ 1 語以内（すなわち直前と直後）、3 語以内、5 語以内に共起する語の例を示している。表中の L と R はそれぞれ対象となる語の左

(left) と右 (right) を、L と R に続く数字は対象となるから何語以内に現れているかを示している。

表 2a-b で、対象となる語の左側に現れる否定詞 *tidak* と関係詞 *yang* を例として見ておく。否定語 *tidak* は *memperpanjang* と *diperpanjang* のいずれも、左側 5 語以内では半数以上がそれらの語の直前に用いられていることがわかる。一方、関係詞 *yang* は直前に現れることは少ないものの、3 語以内で半数以上が現れており、このことは *yang* と *memperpanjang* / *diperpanjang* の間に 1～2 語が挟まることが多いことを示している。

表 2a. *memperpanjang* と共起する語とその頻度の例

L5	L3	L1	共起する語	R1	R3	R5
25	23	18	untuk			4
4	2		di		8	17
12	9	2	yang			7
15	13	9	tidak			2
8	7		dan			9
			masa	14	15	16
15	14	14	akan			
5	5		itu			7
2			setelah		4	7
3			dengan			6

表 2b. *diperpanjang* と共起する語とその頻度の例

L5	L3	L1	共起する語	R1	R3	R5
17	15	10	tidak	1	9	12
14	9	4	yang			2
13	10		dan		1	2
8	8	8	akan		2	7
1			lagi	8	11	13
9	6	4	sudah		2	3
6	5		tahun		5	5
17	15	10	tidak	1	9	12
14	9	4	yang			2
13	10		dan		1	2

このようにしてデータを検討することにより、実際に用例を収集する際にどのような文型に注目すべきかという見当がおおよそなげられることになる。

2.3.2. 実際の用例の収集

上述の手順により得られた大まかな傾向に基づき、*AntConc* の「concordance」機能を用いて対象となる語を含む用例を収集する。収集に際しては以下の点を考慮している。

- (1) 例文は 100 字程度までの長さを基本とする。
- (2) なるべく文脈に左右されない文を選択する。
- (3) 見出し（記事のタイトル）は除外する。

さらに、作業を進め互いに検討を重ねていく中で、以下の点についても確認した。

- (4) 取り扱うコーパス（文章）の性質上、収集する用例は中級レベルと考える。
- (5) 可能な限り用例に訳語を付すことを心がける。

特に (5) については「機能的に同じ文でも訳文が同じになるとは限らない」「新たな気づきにつながる可能性がある」といったことが検討を重ねる中で見えてきたポイントである。

以下に、memperpanjang (perpanjang, diperpanjang) を例にとって実際に収集した用例のいくつかを示す。

Saya ingin⁽¹⁾ **memperpanjang kontrak**⁽²⁾ empat tahun lagi⁽³⁾.

「私は契約をさらに 4 年間延長したい」

※ 収集のポイント：(1) 助動詞、(2) 期間を伴う名詞、(3) 期間を表す語句

Surat tersebut⁽¹⁾ berlaku selama satu tahun dan dapat⁽²⁾ **diperpanjang untuk satu tahun berikutnya**⁽³⁾.

「その書類は 1 年間有効で、その次の 1 年間延長することができる」

※ 収集のポイント：(1) 期間を伴う名詞、(2) 助動詞、(3) 期間を表す語句

Mempertimbangkan prestasi saya, beasiswa⁽¹⁾ akhirnya **diperpanjang**.

「私の実績を考慮して、奨学金が最終的に延長された」

※ 収集のポイント：(1) 期間を伴う名詞

Kita telah mencapai kesepakatan baru untuk⁽¹⁾ **memperpanjang gencatan senjata**⁽²⁾ sampai waktu tak terbatas dan menyepakati sejumlah hal baru⁽³⁾.

「我々は、無期限かついくつかの新規の事項に合意するまで、停戦を延長するという新たな合意に達した」

※ 収集のポイント：(1) 前置詞 untuk、(2) 期間を伴う名詞、(3) 期間を表す語句

“Setelah izin tinggal⁽¹⁾ saya yang⁽²⁾ **diperpanjang 10 hari**⁽³⁾ habis, saya akan parkir di Singapura,” ujar Jones.

「『10 日間延長された滞在許可が切れたら、私はシンガポールに一時的に逗留する』とジョーンズが述べた」

※ 収集のポイント：(1) 期間を伴う名詞、(2) 関係詞 yang、(3) 期間を表す語句

上記の5文は、「延長する」という *memperpanjang* / *diperpanjang* の語義に基づいて収集したものである。助動詞 (*ingin*, *dapat*) や前置詞 (*untuk*)、関係詞 (*yang*)、期間を伴う名詞 (*kontrak* 「契約」、*surat* 「書類」、*beasiswa* 「奨学金」、*gencatan senjata* 「停戦」、*izin tinggal* 「滞在許可」)、期間を示す語句 (*empat tahun lagi* 「さらに4年間」、*untuk satu tahun berikutnya* 「その次の1年間」、*sampai waktu yang tak terbatas...* 「無期限に」、*10 hari* 「10日間」) など、共起する語の傾向および文自体が文脈に大きく左右されないことを考慮し選択したものである。

しかし、*memperpanjang* の語義が『基本文法』には「延長する」とのみ記され、参照した記述の辞書でもほぼ「延長する」の語義で説明がなされているのに対し、むしろ「長びかせる」の意で用いられている用例も見受けられた。以下にその例を記す。

Spacey sudah mencabut laporannya dan polisi tidak **memperpanjang** kasus itu.

「スペーシーは報告書をすでに取り下げ、警察官はその事件を長びかせることをしなかった」

Kebijakan sektoral merupakan salah satu faktor lain yang **memperpanjang** ancaman kerusakan lingkungan dan pengelolaan SDA.

「縦割り行政（政策）は、環境と天然資源管理の破壊という脅威を長びかせる別の要因である」

Janganlah kita **perpanjang** lagi penderitaan ini dengan tindakan kita yang justru membawa kita semua lebih terpuruk lagi.

「我々全員をさらに消沈させるような自らの行為によって、この苦悩をさらに長びかせてはならない」

これらの文の *memperpanjang* / *perpanjang* は「延長する」という日本語訳にはそぐわない。単に用例を収集するのみでなく、文全体の意味を検討し、必要に応じて訳文を与えることにより、こうした点に気づくことにつながっていく。

2.4. 用例収集のポイント

本章でこれまで述べてきた作業手順に関するポイントを整理する。まず、ある文法項目から用例収集の対象となる語を選択する際に、コーパス内での頻度が大きな目安となる。また、対象の語の頻度だけでなく、どのような語と共起する（共起しやすい傾向がある）かを調べることで、対象の語がどのような用いられ方をするか、あるいはどのような文型を取るかという点も合わせて確認することができる。また実際の用例収集では対象の語の語義や文全体の意味も確認しておくことが有効である。

とりわけ他動詞については、*meN*-形だけでなく *di*-形やゼロ形の用法や頻度も確認しなければならない。また文中でどのような動作主や動作対象が見られるか、その文法的な対応がどのようなになっているかといった点も考慮する必要がある。

対象となる語を検討する上で、同じ基語を持つ別の派生語（例：*memperpanjang* と *memanjangkan*）や、基語が異なるが同じ（あるいは類似した）意味を持つ語（例：*mempersoalkan* と

mempermasalahkan)をどのように取り扱っていくかも検討すべき必要があろう。今回の作業では、ある文法事項に基づいて対象となる語を選択するという作業手順を取っているため、このような違いまでは考慮に入っていない。この点は、さらに次の段階で検討していきたい。

3. 本研究の課題と今後の計画

3.1. 課題と方向性

第2章で例示したように、本研究は、日刊紙 KOMPAS の記事を対象に、『基本文法』の項目ごとに頻度、意味、語形成、文型、共起する語などの点から用例を収集し、考察している。この作業の中で得られた認識と課題として、主に次の3つをあげることができる。

- (1) インドネシア語研究の新たな視点の獲得
- (2) 用例の選定基準の方向性
- (3) 『基本文法』の記述と用例の再検討の必要性

まず、(1)についてである。これまでの研究では、既存の言語研究の成果や文法書を参照し、規範的な文法について検討し、それを記述してきたが、2.3で示したように、コンコーダンスツールを用いることによって、実際に用いられている例を頻度、共起する語や文型などのいくつかの観点からある程度組織的に分類し、考察することが可能になった。その結果、規範に合致する例だけでなく、規範から外れるが許容されている例も見られることがわかり、また規範そのものや規範の範囲が変化している可能性も見えてきた。言語研究および言語教育において、規範と実践のどちらか一方のみを見ていては不十分であり、インドネシア語に関しても同じことが言える。コンコーダンスツールによって、規範と対照しながら実例を詳細に観察するという重要性を新たに認識することができた。

(2)の気づきは、1つめと関連している。上記の気づきの結果、これまで『基本文法』での記述は、既存の文法書の記述と規範に引きずられており、必ずしも実際の使用を反映していないことがわかった。つまり、規範のみにとらわれていた「思い込み」を修正し、文法記述や用例は、規範と実践の両方を考慮する必要があるという認識を得た。そのため、現在編纂を計画している用例集の用例の選定には、使用頻度の高さを考慮する必要がある。また、その用例は、文の長さや使用語句など多少変える必要があるが、できる限り実例に基づくべきである。

最後の(3)で示したように、すでに試用版を作成済みの『基本文法』の記述内容や文例を再検討する必要性があげられる。コンコーダンスツールによって実例を詳細に考察するという上述の作業を行う中で、各文法事項の記述内容および文例とのずれが見られ、修正をすべき必要が出てきている。

以上の3点が、現在行なっている、実例に基づいた、『基本文法』の各項目の用例選定の作業を通して気づいた内容である。ポイントは、規範と実践のバランスを考慮しながら、できるだけ実際の使用を反映したものにすることである。ただし、教育で用いる文法や用例であるため、内容やレベルといった、それに見合った配慮も必要である。

さらに課題として見えてきたことは、コーパスの分野や文体の偏りである。これまでの研究で材料としてきたのは日刊紙のコンパスだけであり、しばしば、用いられる語や文型、語順などの

点で見られる特徴がジャーナリスティックな文体だからではないかと思われる場合があった。したがって、分野や文体に偏りがないように、今後使用するコーパスには、別の分野や文体のものを加えることが望ましい。例えば、小説などの文学作品が考えられる。しかしながら、理想を目指し、コーパスを大きくし、多種多様になればなるほど、コンコーダンスを利用する作業にはますます莫大な時間と労力が必要となってくる。際限のない作業に対して、何らかの基準を設けて効率化を図ることも必要である。

最後に、この共同研究が開始して以降ずっと課題として意識されてきたこととして、記述の仕方の不統一がある。現在行っている作業については、用例の記述と提示の仕方の統一が問題となっている。長期かつ莫大な作業に基づく研究のアウトプットとして記述する場合に、まず共同研究者間の認識をすり合わせる必要がある。次にはその共通の認識と理解をどのような用語で表現し、どのような提示の仕方で行うのかについて統一する必要がある。これまでは作業の完遂を優先してきたために用語と記述の仕方がバラバラになっており、その統一をしなければならない。その際にも、あくまでも教育的な観点を念頭においた記述を行うことを第一に考え、かつ基本文法を学んだ学習者を念頭においた中級レベルの教材、つまり応用教材を提供することを意識しておく必要がある。

3.2. 今後の計画と展望

本研究を通じて多くの課題が明らかになってきたが、それはインドネシア語教材研究が深化したからこそと考えることができ、研究の成果が蓄積されてきていると言える。これらの課題を克服していきながら、すでに発表した基本教材に続き、それに即した応用教材を完成させる予定である。

上記の通り、研究の深化が進み、コーパスの拡張などの必要性も認められるものの、現時点での研究の蓄積は、すでに基盤的な枠組みと内容を備えており、発表する意味が十分にある。基本教材の作成を目的とした第一期目に引き続き、現在第二期目であるインドネシア語教材研究は、2020年度に最終年度を迎えることになり、年度末には一つの研究成果として「インドネシア語用例集」を作成する計画である。基本教材の時と同様に、今回もまずは試行版として日本インドネシア学会の会員に限り公開し、会員からの批判をいただき継続的に修正を施していきたいと考えている。

「インドネシア語用例集」を作成し、発表した後、本研究は第三期目に突入する。次の段階では、これまで積み上げてきた研究成果を土台として、インドネシア語活用辞典を具体的な成果物とすることを目標とし、研究を引き続き進めていく予定である。

参考文献

- 原真由子、森山幹弘、降幡正志 (2017)「インドネシア語基本文法の記述：教材作成のための共同研究からの報告」『インドネシア 言語と文化』、23 号、pp. 7-30.
- 森山幹弘、降幡正志、原真由子 (2012)「インドネシア語教育の活性化のために」『インドネシア 言語と文化』、18 号、pp. 2-10.
- 森山幹弘、サフィトリ・エリアス、モハンマド・ウマル・ムスリム、降幡正志、原真由子 (2014)「インドネシア語会話の授業について」『インドネシア 言語と文化』、20 号、pp. 1-11.

- Badan Pengembangan dan Pembinaan Bahasa. 2016. *Kamus Besar Bahasa Indonesia*. 5th ed. Jakarta: Badan Pengembangan Bahasa dan Perbukuan, Kementerian Pendidikan dan Kebudayaan Republik Indonesia. [<https://kbbi.kemdikbud.go.id/Beranda>].
- Quinn, G. 2001. *The Learner's Dictionary of Today's Indonesian*. St. Leonards: Allen & Unwin.
- Stevens, A. M. & A. Ed. Schmidgall-Tellings. 2010. *A Comprehensive Indonesian-English Dictionary*. 2nd ed. Athens, Ohio: Ohio University Press.

日本インドネシア学会会則

- 第1条 本学会は「日本インドネシア学会」（インドネシア語名称 Himpunan Peneliti Indonesia Seluruh Jepang、英語名称 Japan Association for Indonesian Studies）と称する。
- 第2条 本学会はインドネシアを中心とした言語、文化、文学等に関する研究の発展および会員相互の協力を促進することを目的とする。
- 第3条 本学会は前条の目的を達成するために次の事業を行う。
- ① 機関誌の発行
 - ② 研究発表のための大会の準備
 - ③ 会員総会の開催
 - ④ 会員への連絡および協力促進
 - ⑤ その他必要な事業
- 第4条 本学会の会員は第2条の目的に賛同し、所定の会費を納めたものとする。
2. 入会の際には、5年以上会員であった者1名の推薦により、会員総会における承認を求める。
 3. 特別な理由なく3年以上にわたり、所定の会費を納めないものに関しては、本人の意思を確認の上、総会において除籍する。
- 第5条 本学会の発展に寄与し、会員総会において承認されたものを名誉会員とする。
2. 名誉会員からは会費の徴収をせず、機関誌を贈呈する。
- 第6条 本学会の会員は、大会（総会および研究発表）への参加、機関誌への投稿、機関誌の被配布の権利を有する。また、会費納入の義務を負う。
- 第7条 本学会に次の役員と委員を置く。
- ⑥ 会長1名
 - ⑦ 監査委員1名
 - ⑧ 事務局委員（総務担当1名、学会誌担当1名、会計担当1名）
2. 会長の任期は3年とし、重任をさまたげない。
 3. 監査委員および事務局委員は、会長がこれを委嘱し、会員総会において承認を経なければならない。
 4. 監査委員および事務局委員の任期は3年とする。
 5. 当番校は事務局と協議の上、研究発表のための大会および会員総会を開催する。
 6. 会長は、「日本インドネシア学会会長選挙規程」の定めるところにより、会員総会において選出する。
- 第8条 本学会の事務は事務局が執り行う。

2. 本学会の事務局を東京外国語大学（郵便番号 183-8534 東京都府中市朝日町 3-11-1）内におく。

第 9 条 本学会会則の改正は会員総会において行う。

第 10 条 本学会の会議は会員総会とし、毎年少なくとも一回会長が招集する。

2. 会員総会は、全会員の 3 分の 1 以上の出席をもって成立し、議事は出席会員の過半数をもって決する。
3. 総会の議事は、事務局の総務担当が執り行う。

第 11 条 本学会の経費は、会費、寄付金及びその他の収入をもってあてる。

2. 本学会の会計年度は、10 月に始まり翌年 9 月に終わる。
3. 決算報告書は、会員総会に提出し、その承認を経なければならない。

附則 この会則は 1998 年 12 月 14 日より発効する。

2007 年 11 月 10 日 一部（7 条 1, 2, 3, 4, 5 項、8 条 1, 2 項、9 条 1 項、10 条 1, 2, 3 項、11 条 1, 2, 3 項）改正、即日施行。

2008 年 11 月 8 日 一部（4 条 2 項、10 条 2 項）改正、即日施行。

2016 年 11 月 19 日 一部（第 1 条）改正、即日施行。

会費等に関する細則

この細則は、会則第 4 条の規定のうち、会費の施行について定める。

2. 会員の会費は、年額 3000 円とする。

付則 この細則は 1998 年 12 月 14 日より発効する。

2008 年 11 月 8 日一部（2 項）改正、3 項削除、即日施行。

以上

編集後記

『インドネシア 言語と文化 Bahasa dan Budaya: Jurnal Himpunan Peneliti Indonesia Seluruh Jepang』第26号をお届けいたします。

本誌は、2019年11月9日（土）・10日（日）の両日に大阪大学豊中キャンパス（豊中市）にて開催されたインドネシア学会第50回研究大会における座談会および発表報告をもとに、改めて投稿していただいた論稿を掲載したものです。

第50回研究大会のプログラムは以下のとおりです。

第1日目 11月9日（土曜日）

場所：大阪大学 豊中キャンパス 国際公共政策研究科6階会議室

11:30～12:00 受付

12:00～12:05 開会の辞（舟田京子会長）

12:05～13:05 学会創立50周年記念座談会～50年を振り返って

佐々木重次、クトゥット・スディアルタ、左藤正範（司会：舟田京子）

〔左藤氏は体調不良のため欠席〕

13:05～14:05 招待講演

Gufran Ali Ibrahim (Badan Pengembangan Bahasa dan Perbukuan)

“Kebijakan Pelindungan Bahasa Daerah di Indonesia”

Dora Amalia (Badan Pengembangan Bahasa dan Perbukuan)

“Sumbangan kosakata Daerah dalam Kamus Besar Bahasa Indonesia”

14:05～14:15 休憩

14:15～14:40 自由発表 01

東海林恵子（東海大学大学院博士後期課程）

「ワリソンゴからワリピトゥヘーバリ島におけるイスラム聖者廟の隆盛―」

14:40～15:05 自由発表 02

上石景子（南山大学大学院博士後期課程）

「古ジャワ文学におけるガトーカチャーシュラヤ(Ghaṭotkacāśraya)に関する考察」

15:05～15:30 自由発表 03

西島薫（京都大学）

「ダヤック人エリートの形成過程―西カリマンタン州・クタパン県の事例から」

15:30～15:40 休憩

15:40～16:05 自由発表 04

大形里美（九州国際大学）

「インドネシアにおける女子割礼―政策の変化と現状」

16:05～16:30 自由発表 05

佐近優太（東京外国語大学大学院博士後期課程）

「インドネシア語の能動文的 *ter* 派生動詞」

16:30～16:55 自由発表 06

藤崎拓海（大阪大学大学院博士後期課程）

「インドネシア語会話における *gitu* の談話的機能」

16:55～17:05 休憩
17:05～18:25 会員総会
19:00～21:00 懇親会（がんこ池田石橋苑）

第2日目 11月10日（日曜日）

場所：大阪大学 豊中キャンパス 国際公共政策研究科6階会議室

08:45～09:00 受付

09:00～09:25 自由発表 07

Diess Alwi Tutiarta（南山大学大学院博士後期課程）

「インドネシア語における他動詞化形式素としての共接辞 meN-kan」

09:25～09:50 自由発表 08

Dewi Ariantini Yudhasari（立命館アジア太平洋大学）

Menjayakan Bahasa Indonesia melalui Peningkatan Kompetensi Berbahasa Indonesia:
Studi Kasus Rencana Pengembangan Kemampuan Bahasa Indonesia di STBA LIA

09:50～10:15 自由発表 09

Totok Suhardijanto (Universitas Indonesia)

Peran APPBIPA dalam Pembangunan Sumber Daya Pengajaran Bahasa Indonesia

10:15～10:25 休憩

10:25～10:50 自由発表 10

Atin Fitriana (Universitas Indonesia)

Kesadaran Metalinguistik dalam Pengajaran BIPA

10:50～11:15 自由発表 11

Dwi Puspitorini（大阪大学）

Bahasa Indonesia di Media Sosial dalam Pengajaran Bahasa Indonesia sebagai Bahasa
Asing

11:15～11:40 自由発表 12

Pujiharto (Universitas Gajah Mada)

Focalizer Jawa-Islam tentang Kematian dalam Fungsi Kepengarangan Danarto

11:40～11:50 休憩

11:50～12:15 自由発表 13

Novi Siti Kussuji Indrastuti (Universitas Gajah Mada)

Konstruksi Hegemonic Masculinity dalam Cerita Rakyat Indonesia

12:15～12:40 自由発表 14

Edy Priyono（京都産業大学）

Singkatan, Akronim, dan Politik

12:40～13:05 自由発表 15

森山幹弘（南山大学）、降幡正志（東京外国語大学）、原真由子（大阪大学）
インドネシア語応用教材に関する共同研究からの報告

13:05～13:10 閉会の辞（当番校：菅原由美会員）

インドネシア 言語と文化
Bahasa dan Budaya: Jurnal Himpunan Peneliti Indonesia Seluruh Jepang
第 26 号

編集者： 高地 薫（神田外語大学外国語学部）

発行者： 日本インドネシア学会 Himpunan Peneliti Indonesia Seluruh Jepang
<http://nihon-indonesia-gakkai.org/>

連絡先： humas@indonesia-gakkai.sakura.ne.jp

〒183-8534 東京都府中市朝日町 3-11-1

東京外国語大学 大学院総合国際学研究院 インドネシア研究室気付 青山亭
Prof. Toru Aoyama

c/o Indonesian Studies Program, Graduate School of Global Studies,
Tokyo University of Foreign Studies

3-11-1 Asahi-cho, Fuchu-shi, Tokyo 183-8534, Japan

発行日： 2020 年 8 月 31 日

ISSN： 1882-9848
